

日本新聞  
掲載小説

千里眼

(編續)

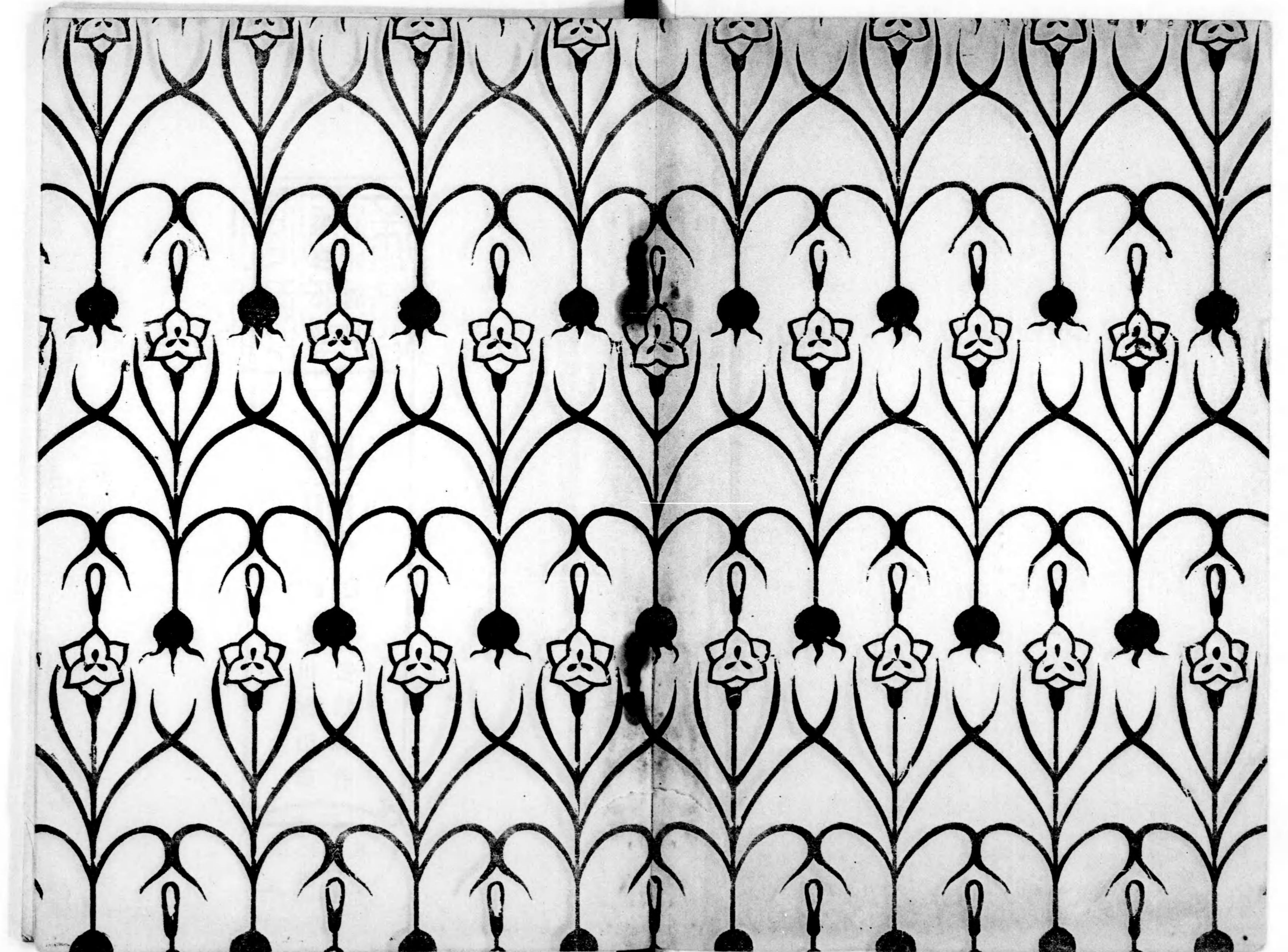
渡邊默禪  
歌川國松  
畫作



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始





持104  
222

日本新聞  
掲載小説

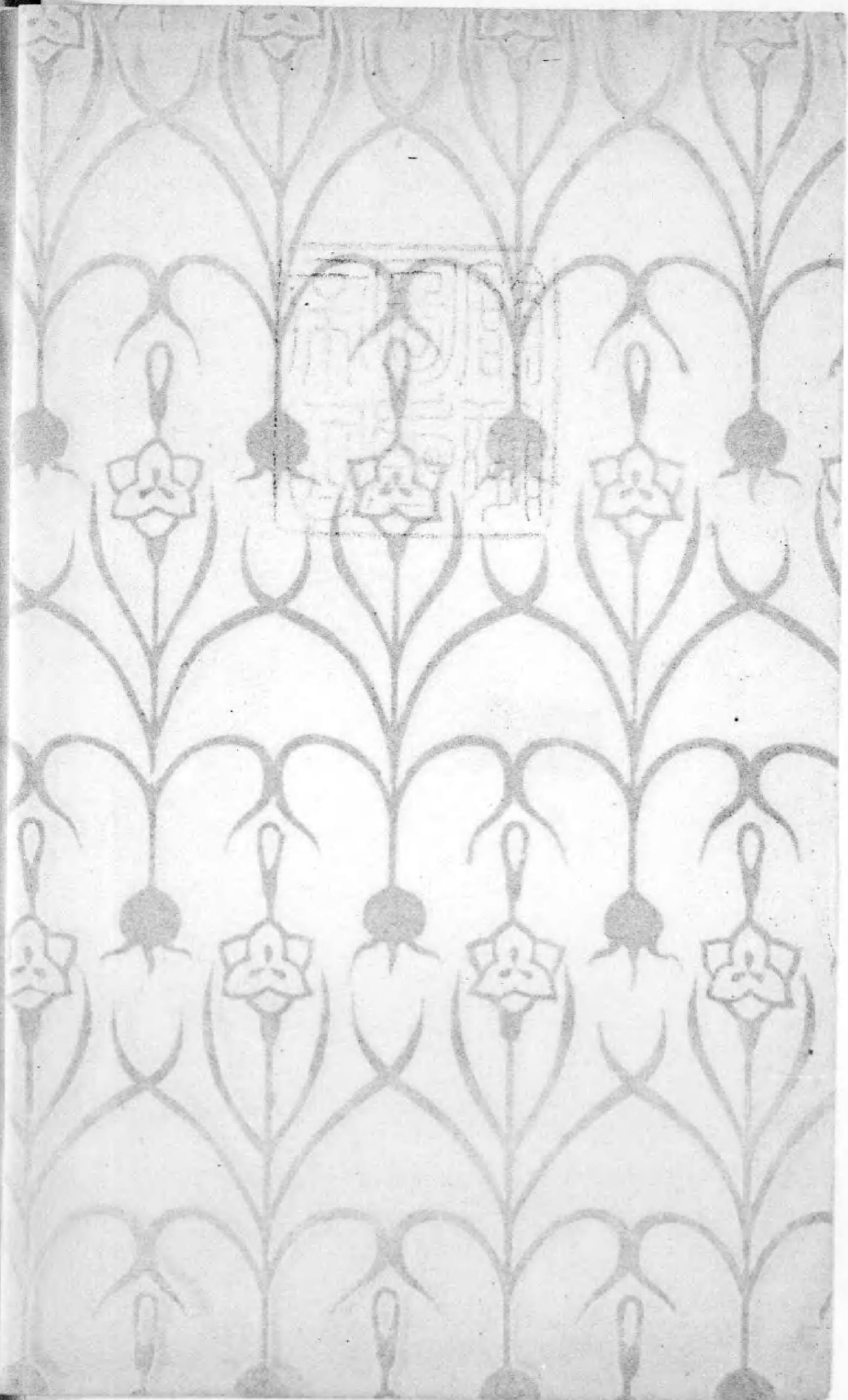
千里眼せんりがん

(編續)

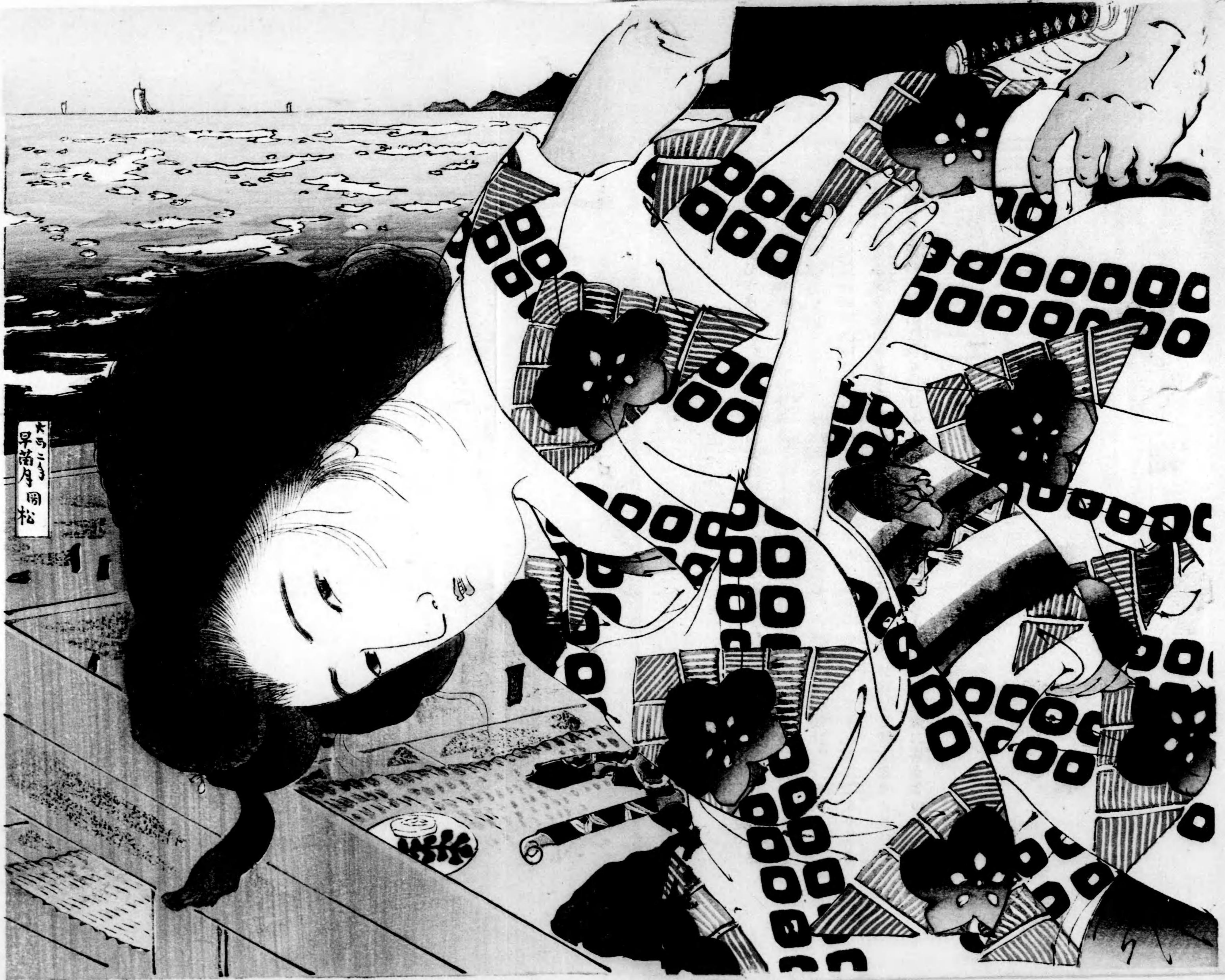
渡邊默禪  
歌川國松  
作畫

2. 6. 12

内交







大馬三  
早苗月岡松

(1)

千

里

眼

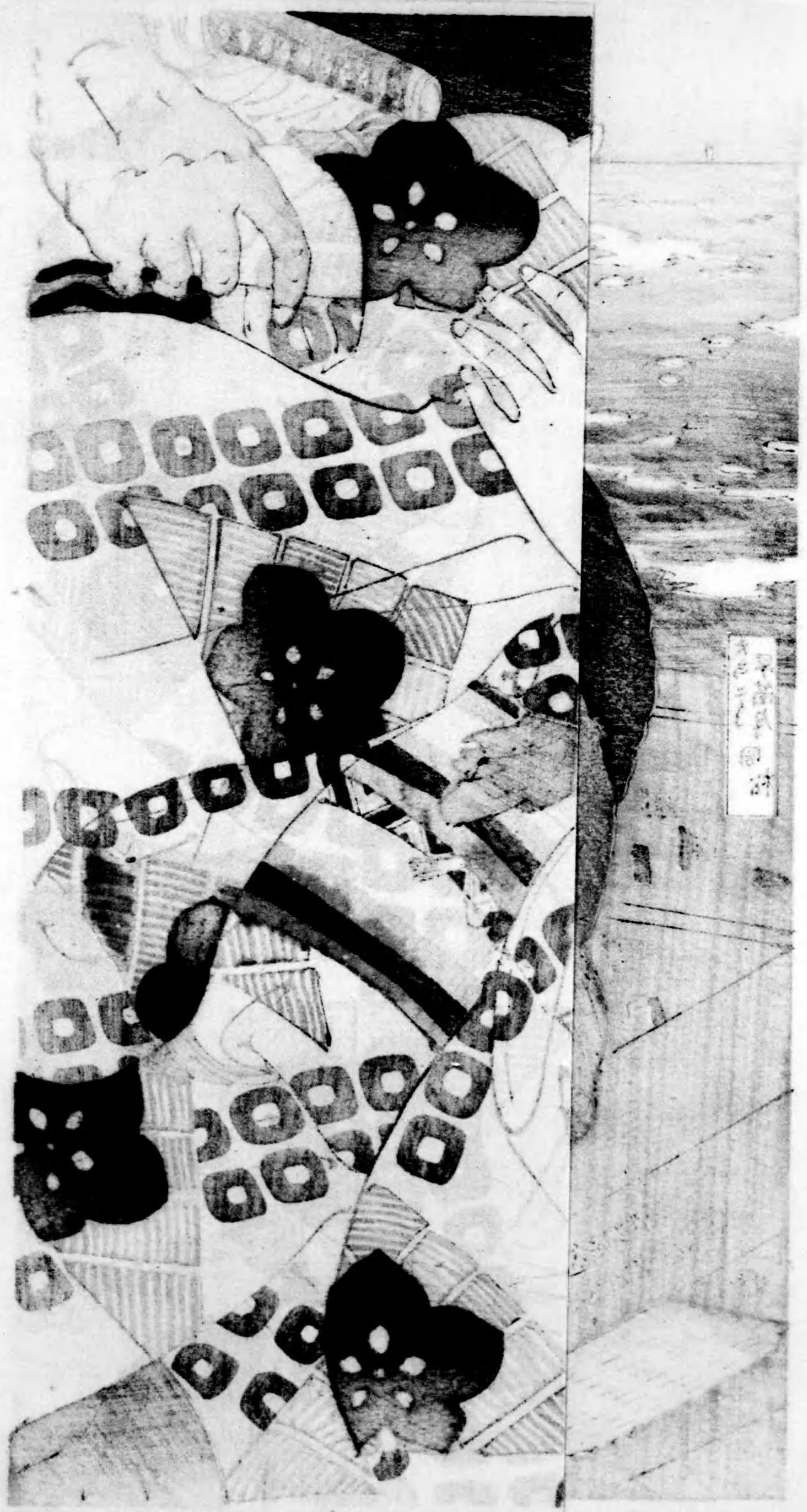
(續編)

渡 邊 默 禪

(一)

場所こそ異れ、幾んど時を同じふして、母と其子がごちらも水の上の災禍に罹るといふのが不思議だ。迷信家には甲乙がない、唯船といふ一種のボックスの中に封じ込められた二人の運命が、什麼にか展びて行かれるだけの穴罅を與へられるや否、それだけが疑問だ。

八百屋の辰はテストラから短銃を突つけられるまで嚇された。命が惜ければ謝罪を爲ろ——全くの心得違ひであつた、此の子供は貴殿が相當の金を拂つて、他から貰ひ受けられた物に相



違ない、それを私しが盗み取らうとしたのは重々恐れ入りました——といふ訃證文を書け、爾したならば釋して還して遣る、と脅かされたが、辰は手強く刎つけて應じなかつた。

テストラは持倦んで、ウエツチと協議の末に、辰を引立、正甲板の機關室と涼室との中間にある薄暗い一室に連れて行つた。爾して其處へ突入れてピンと鎗を懸けたなりに、少許の麵麩と水とを與へた儘、叩いても喚いても一向お構ひなし、暴れ放題に暴れさせて置いた。

恰かも其の晩のサツパーが濟んでから、テストラはウエツチを伴つて、談話室へ這入つた。折柄人影はなく、卓子に飾つた熱帯植物の花の香は、空しく寫真帖の上に散つて、雪の如き大理石の美人像、淋し氣に玉火蓋の青い光を瞻めてゐる。

『ウエツチ君、酒は最う可厭かね』、テストラは衣兜から黒い壘と銀製の洋盃を取つて、卓子の上に置いた。『イヤ、何事にも可厭と言つたことのないのが自慢の我輩だ、好きな情婦の顔を見て、可厭だなんて吐いたらウエツチの金看板に泥だ、歡迎する、早く接吻をさして呉れ』、『は、飯を喰つたばかりの矢先に……よく這入る胃袋だ』。

随分無作法な男輩である。皮蒲團の椅子へだらしなく腰を懸けながら、肱を卓子の上に突い

て、洋盃のぐい呑にそろ／＼秘密の談を始め。

『一件物は什麼だらうね、君、拗ッといても大丈夫か』、テストラは辰の事を懸念してゐる。『言ふだけ野暮よ、幾個暴れたつて、腕いたつて、彼の室なら如何する事も出来アしないよ』、『船長が何とか嚴ましく言ひやしまいか』、『否貴君の事は薄々知つてゐて、黙許してゐるくらゐだから、干渉する氣づかひはないよ、先刻の騒ぎに給仕の野郎が何とか口告したもんと見えて、我輩が什麼したのかと聞くから、實は是々だと好い加減に瞞着して置いた、何しろ事務長でも運轉士でも、皆な貴君の方から行渡がついてゐるのだから、愚圖々々言ふものはないさ、併しテストラ君、彼の男は何時まで彼箇して置く心算だね』、ウエツチは盛んに呷つてゐる。

『さればさ、此處を出帆する時に酷い目に遇はして出して遣らうか、とも思つたがね、考へて見ると奴、屹と日本役人に訴へて出るに相違ない、すると此の船が神戸に寄つた時に、又た甚麼面倒が飛込んで來ないとも限れないから、寧ろそのこと、神戸へ行くまで彼箇して置いて貰つて僕は彼地に着早々歐羅巴行の船へ乗替へようと思つてるんだ、僕が此の船を上つたとなつたら直にも彼奴を出して貰ひたい、ナニ、活かすとも殺すとも君等の隨意だ』とテストラは鼻眼鏡を取つて曇を拭く。

「爾か、可し、心配し玉ふな」ウエッチは諾の答を與へてから「だがテストラ君、貴君は一体彼の小兒を何處へ持つて行くんですか、神戸にも約束した者があるといふ事だし、又た上海でも二三人買ひたいと言つてなさるが、什麼いふ使ひ途があるんですね、真逆米國に歸つて萬國小兒陳列館といふのを押立てる計畫でもあるまいが、不審さうに尋ねると、テストラは「フ、フ、」と凄笑を洩らした。「なアに皆な殺して了うのさ」、「わッ、殺す!」ウエッチは葡萄酒の色を睜つた。

## (二)

殺すといふ一語は、宛ら闘鶏遊技に腮を蹴つたかの如くウエッチを驚かした、惘れた顔をして洋盃へ手を伏せて、前へ首を突出しながら問返すのをテストラは冷かな笑に承けて「殺すと云つたつて、何も僕が手づから殺すのではない、唯爾いふ運命の下に彼等を送り込む役目、つまり何だ、屠殺場に牛や豚を曳張つて行くだけの手取綱まア、そんなものだ」と恐ろしいことを言ふ。

「驚いたなア、そいつは」とウエッチは眼をくるくると回轉して「何處で殺す?、誰が殺す?、如何いふ譯で殺す?、ね、テストラ君!」更に熱心に訊く。

「それを聞きたいのか、困つたなア」テストラは舌打して「商賣の秘密を爾う無闇にボン／＼嘶す譯にはゆかかんよ呆乎喋舌られると、又た嚴ましい人道論なんか起つて来て、此の船から逃出さなけりやアならない様な羽目になるまア止さう、沈黙!沈黙!」と故意とらしく燥してゐる。

「不可んな、テストラ君、君は友人甲斐がないよ、恚して君の味方になつて何も筒も一致の行動をしてゐる俺ぢやないか、聞いたからと云つて、友人の秘密を口外するやうな俺ぢやない、知つてるだらうが、君も……俺の氣質は」怨めしさに顔を仰看げるのを「ハ、ハ、ハ、嘶すよ嘶さない譯にはゆかないのだ、此の事に就ては將來一層の盡方をして貰はなけりやアならない君の事だもの、秘密も何もあつたものぢやない、實は迅から嘶をして、呑込んで貰はうと思つてゐたんだ」、「何だ、人が悪い、思はせ振を爲やがつて」、「ウエッチも笑つて。

「君、土耳其の君士坦堡に回航つたことがあるだらう」、「む、二三度寄つたことがある、不思議な風俗の、可笑しい國だ、秘密の端緒は切られた。



「イヤ、可笑しいとばかり言つてはゐられないよ、随分惨酷な、怪したらん事を、平氣でやつてゐる野蠻國だ、殿羅巴の隅ッこにあるお蔭で、表面だけは文明の衣服を着てゐるやうに想はれるが、その實人智の進まない事と來たら、亟弗利加か南洋諸島の土人など、撰ぶところが、ねい、其度が、ソレ我輩等の突目どころで、好い金儲が出来るといふ譯よ、ハッハッハ、」その土耳古が什麼かしたのかね。

「什麼かしたどころの沙汰ぢやない、僕の荷物はソノ土耳古で捌くのだ、土耳古で殺らすのだ」「ヘエー、小兒をか?」「爾よ、二人の聲は低いが力が籠つて來た。

「一体彼國ほど迷信の強い國はないので、皇帝始め四百七十八萬の國民は残らず馬鹿々々しい迷信の奴になつてゐる、さア、その迷信もね、君、寺へ行つて、聖像へ接吻をしたり、日曜に爪を切ると、その切目から惡魔が飛込むと思つて居るぐらゐることなら、未だしもだが、土耳古と來たら法外だ、一体金曜日には神聖な日と稱へられて、全國の鐘の音が鎗々と響き渡る、皇帝は儀仗兵をお連れになつて肅々とペラ丘の寺院へお詣りになる、市民一同精進潔齋して、極樂往生を願うといふ八釜しい日だ、所で其の晩、寺の坊主が市中へ出て、少いさな女兒が七人だけ攫ひ取つて、寺へ引張込んだ上或る方法を以てそれを殺してからに、その生肉を神へ供へ

てお下りを頂戴するといふ恐ろしい慣例があるのだ、」ねッ!人間の生肉をッ!、く、く、食ふのかッ、驚いたなア、ウエツチは覺えず叫び出す下から慌て、口を押へた。

(三)

幾んど此の世に有り得べき事實ではないと想はれる程——爾も事實に相違ない事實の——奇怪なる物語は、牡丹色の厚く反かへつたテストラの唇から、腥い空氣を揺がして、魔の火の如く噴き落される。

「攫つて來た少女は高手小手に縛り上げて、大きな室の中に投出して置いて、先づ大勢の僧侶們が祈禱をする、それからその繩を解いて神籤を引かせるのであるが、七本の籤の中、五本だけは命が助かるので、是を引いた者は查婆といふ尼のやうな女の手に渡つて一間に押籠められて、都合一週間だけ斷食の荒行をさせられ、それから羊の肉を搬ぶ車の中に叩ッ込まれて、こつそり波戸場へ送り出されるのであるが其處には埃及と土耳古とを往復してゐる舟があつて、その船長が残らず買取るのだ、買取つてから亞弗利加の土人に賣る、土人は膏氣のある中は散

々奴隷にこきつかつて、それからサワラの大沙漠を渡つて、エアンアスベン邊の蠻人に又賣をやる、賣られた者こそ災難、獸のやうな蠻人に骨ごとムシャ／＼と食はれて了うのだ。』

瞬きもせず、驚いた顔で聞いてゐたウエツチは、此時漸と問ひかける機會を得て『五人の方はそれで解つたが、残る二人は何なる？』、『さア、それが面白いんだ、先づ其の死籤を引いたとなつて、鋭い針でチクリ／＼渾身を刺して生血を取る、是は體の毒血を除くんだといふ事で、それから眞暗な害の中へ突落して一晩投つて置く、夜が明けてから引張出して、湯浴をさせて唐辛子の汁を飲ませる、死んだやうに元氣の衰れた二人は、是で少し精神が興奮して來るそれを機會に、一人の僧侶が双刃の大かい劍を振つて、ピタリと一打、その臂の肉を切るのだ、斬つてから三日だけ活かして置いて、偕四日目になると、俎板の上に縛りつけて、兩方の耳に釘を打つける、それから身體へ吸瓢を當て、生血を搾る、搾つた血は僧侶們が先を争つて飲むのだが、これを飲むと天から幸福が降るといふのだ、聽てお仕舞になると、今度は長い錐を持出して、少女の心臓へグツサと刺す、是か十々滅だ、それから愈々お料理にかゝるので、腦味噌や臟腑を一々抜き取つた上、骨や皮は棄て、了う、何とウエツチ君、妙な風俗もあるものぢやないか。

『酷いことを爲やアがるな』とウエツチは眉を蹙せた、實に無慘なりけり、言語同斷だ、シテ君、その抜取つた腦味噌や臟腑は何なるのだ』、『テストラは凄く笑つて』、『皇帝が召上るのさ』、『ね皇帝さまが……』、『爾うよ、金曜日の聖日に寺院へ行幸になる、その時に僧侶どもが一々料理をして差上げる、ハイ一皿はお臂の肉でござい、ハイ一皿は腦味噌こちらが肺臓、こちらが心臓、と云つたやうな工合さ、此の料理が最も神聖な御供物、一口嘗めても死んで天堂に上れると思ひ詰めてゐるのだ、何と君、愚も此處までいけば最上行止り、滑稽な話ぢやないかと虎鬚をそよがした。

『滑稽どころの騒ぎやありやアしない、宛然此世からなる地獄だ』とウエツチは飲んだ酒もお蔭で醒めたといふ顔をして『君、最う一杯呉れ給へ……すると何かい、その人身御供にする爲に、東洋から品物を仕入れて行くのかね？』、『爾さ』と軽く答へて、一体土耳其人は自分の娘を攫はれるのを、非常の名譽悅樂としてゐたんだが、流石に血肉を分けた可愛ゆい子であつて見れば、爾いふ慘酷な生料理にされるのが、餘り快い心地もしないと思つて、近頃では他から買入れた小兒を自分の子のやうに繕つて、僧侶們に攫はせるやうになつた、僧侶們も又た同じ宗教の人の子よりは、異教の國に生れた者なれば一つは宗教上の復讐にもなるといふ心からか

それを喜ぶやうな傾向になつて来た、そこで内々子供の賣買が市場に行はれる、俺はその注文を一ダース許引受けて来たんだから、まあ當り障りのない東洋人を仕入れて行つて、君士坦堡丁の交易場に持出さうと思つてるんだ、ハ、ハ、ハ、君、利益は三割やるせ、宜しくやつて呉れ可いか』と肩を拊つと、『罪な事を爲るなア』とウエツチは苦笑した。

と、誰やら此室へ這入つて来るらしく、戸の外に靴音。テストラは『エシツ』と眼配、微聲に歌をうたひ始めた。

\* \* \* \* \*

密室に押籠められた辰之助は、怒と悶と餓と勞とに責められながら、涙の中に一晝夜を過した。

恰かも翌日の午後十二時過、運轉手交代の點鐘が鳴竭んだと思ふ頃である、室の外面に人の氣配がして、ゴソリゴソリゴリ〜と扉の鍵穴を捏るやうな音がする、辰はふつと耳を敬てた。

( 四 )

この深更に、麼も何者？と辰之助は不審して伸上つた。窃と戸口に耳を着けて、其の齶音を聞分けようと努めたゴツ〜ゴリ〜といふ小さな響は間斷なく續く、それが恰と鼠などの器物を齶るかのやうに想はれる。

『訝しいなア、確かに此邊だが……』と辰は鍵穴を覗めて獨語を言つた、鼠ならば下の方で音がする理だ、何だらう、人間か知ら……泥坊？、否、真逆』と小首を燃つて『む、彼の赤鬚奴、俺を殺しに来たんだな、む、爾だ、晝間は船長や何かの手前があるから、夜半を狙つてこッそり殺しに来たのに違ねえ』と覺えず慄然としたが、それにしても變だ、彼奴や彼奴の味方ならば鍵で自由に啓けられる理だから、こんを問拔な事を爲る譯が無』と愈々思ひ惑つた。

斯る中に外から揺ぶり立てるのか扉はがた〜と震動する、おのれ、這入つて来たなら眼に物見せて遣らうと、辰は室の隅に突立つて、在合せた古椅子へ兩手を懸けながら身構へした。

途端に扉がぎうと開いて、踰けるやうに飛込んだ者がある。一點の灯だにない眞黒暗、誰も解らう筈がない。

『お爺さん、お爺さん』と力の籠つた忍び聲で呼ぶのが聞けた。『ね、だ、だ、誰だッ』、辰は愕然とした。『私です』、『何ッ、源作かッ!』、『ハイお爺さん!』、ど、ど、何處にゐます』、『こ、こ此處だッ、て、て、手前は、ど、ど、何處に?』、慌てて手探りに摺寄つた。

源作とは己れの忤である。今年十八の青年、教育こそ寺小屋仕込であるが心立の優しい、親孝行な、爾も敗嫌ひの、父の血を享けた故か、思ひ込んだ事は理が非でも透すといふ強い意志の平生父を助けて勤勉に働いてゐる實息子であつた。

辰之助は夢のやうな氣がした。餘りに意外ではあるで、何が那やら事情が解らぬけれど、自分を救ひ出す目的で此の船へ来たことだけは、聞かすとも知り得られる。能く言ふ地獄で佛、嬉しさは渾身の血を躍らせる。二人はいきなり抱合つて涙を噉り上げた。

源作、ど、ど、甚麼して来た、よく俺が此室に叩つ込まれてゐる事が解つたなア』、顫ひ聲だ。『お爺さん、私ア一生懸命に貴父の居所を探したんですよ。のくらゐ心配したか知れませんせあゝ可かつた、是で私の一心が透つた』源作は荐りに後方を氣遣ひながら『その嘶は後で爲ます

から、お爺さん、早く逃げて下さい、若しも此の船のマドロスに發見らうもんなら、大變ですさア早く……船も一艘持つて来て、彼所に着けてありますから』、『何、舟を持つて来て呉れたか、や、そいつは有難わ』。

二人は急いで室を逃出した、四邊は黒闇々、十一時になると全船悉く消燈して、唯病室に火を殘してあるだけである。寂然として人聲なく、舷を拍つ波のみが、ど、ど、どといふ單調な奏を闇に合はしてゐる。

『待てよ』、辰は立停つた。『源作、お前は知るまいが』と耳に口を着けて『私が這麼酷い目に遇はされたのも、實は此の船に攫はれて来た一人の小兒、そいつを盗み出さうとした事から湧いて出たのだ、執念深いやうだが、皇國の爲の人助け、一つは彼の毛唐への腹癒に、行き掛の駄賃だ、序にその小兒を連れて行かうと思ふが、甚麼だらう』と囁くと『ね、小兒!』と驚いて『それは可哀想ですなア、連れて参りませうよ』と直ちに同意した。

手段をしめし合せて、二人は手を曳きながら爪先探り、非常の注意を拂つて機關室と炭庫の前を通り抜けた。幸ひにして人目に觸れず、昇降口から上甲板へ上つて、一等客室の前に出ることが出来た。

## (五)

テストラの室は角から三番目の十七號室であることを辰之助は記憶してゐた。闇の中ではあるが大抵此邊だと心當りがつく。

恰かも盲が襖を撫でるやうに、角から右へ扉へ手を當てたなりに、横なぐりに迂らして行く。苦もなく三番目の客室を捜り當てることが出来た、戸口の所に立つて耳を鍵穴へ着けると室内は寂寥として物音がしない。只テストラの軒らしいのが幽かに洩れるばかりであつた。

第一の懸念は目指す花子が果して此の中に居るか什麼かといふ事である。或ひは戒心深く他の室に遷してゐるなら、折角の苦心も水の泡となるのだ、幸ひにして花子が居るとするも中から固く鎖された此の扉を如何にして啓け得べきか。啓け切らぬ中に倘しも夜警の船員に發見されたら何とすべきか。目前に層る心配が恐るべき危険を伴つて、父子二人の胸を攪亂するであつた。

迷つた、迷つて一時は猶豫つたが、何のくそ！失敗つたらそれまでだ、と成否を天に委せて

辰之助は悴の携帶してゐた一挺の大鑿を取つた。手探りに鍵穴の所へ刃を突立て、ゴリ／＼と剋りはじめた。音がする、はつと思つて手を止める、又た剋る、音が烈しく立つ、首を縮めて左右を嚮す、斯くして物の十分間も摠り廻した。途端に室の中でバタリミシリといふ響、二人は倅然として扉から飛退いた。

別に異状はない、偕は寢返打つたのかと一息吐くと、室中から「母ちゃん、母ちゃん、お水欲ちいよ」と花子の聲が聞けた。夢か、忽ちにして寂然。

占めたッ!! 二人は雀躍した。確かに此處に居るぞ、それ早く！頓かに躍る血の武者震ひ、ぐつと一氣に鑿を刺して力を籠める手に、乗蒐る如く戸を壓すと、機會を吃つてぎうと開く、二人は轉がるやうに飛込んだ。

此の物音にテストラは眼を覺したのか、「誰だッ」と鋭い聲を浴せかけた。燐寸を摺つた光が前面に懸けた花模様の紗帷にぼつと映つた、二人はたち／＼と後へ身を引く。

光と供にテストラは寢床の上から手を伸して、紗帷を右へ引いた。から／＼と鳴る鑲の音、大きな鬚面が抽然と出た。「やッ、泥坊！」と英語で叫ぶ。

同時に燐寸の光が消れた、消える刹那、辰之助は花子が下段の寢床に毛布をかけた儘寢て

ゐるのを認め、得たりと身を躍らして駈寄るより早く、花子の背へぐつと手を懸けて引抱へた。

『源作、構はずと逃げろッ、ソレ、渡すぞッ』、『可しッ、来たッ』。

可憐の天使は母の乳を手弄る楽しい夢を帯びた儘で、救ひ主の手から手へと渡された、源作は一生懸命である。小腕に犇と抱へながら、闇を探つて室を駈出した。後には父とテストラが格闘するのであらう、ごしり、ばたん、といふ物を蹴仆すやうな響に交つて、氣立ましい叫聲が聞けた。

それを顧みる暇がない。偃るやうに廊下先を駈けて、心覺の昇降口へ出ようとする。戸へ突當つて額をコッリ、物へ跌いて、バタリ倒れたことも幾回だか知れぬ。

辛ふじて階梯口へ出られた、黄色に彩られた欄干に片手をかけ、殆んど轉落するやうに迂り降ると、二つ目の屈曲した中段目で前へ偃つた。花子はあつと泣く、その刹那、後にごッといふ足音、『待てッ』と大喝する聲が轟く。

恟乎として上を仰視すると、一人の水夫が片手に角燈を挈げながら、片手に短銃を突出して覗ひをつけてゐる。呀！萬事休す。

## (六)

茂兵衛と云ふ男の打つて變つた態度に、お梅は少からず驚かされたが、先づ何を言ふか、言はせるだけの事を言はして見ようと、微笑を以て迎へながら、黙つて聞いてゐた。

彼は厚刺の長半纏をぐつと被つて、帆柱下の蕪包へぶかりと腰をかけた。爾して片膝を折つて、突立てた刀の鞘へ乗せながら、腮を反らしてお梅を下眼に看る、異う氣取るもんだとはお梅は肚の中で可笑しく思つた。

『俺アな、おい』と巻舌になつて、神田の間屋で伊豆屋なんて、言つたの、口から出鱈目のボケナスで、その實定つた時の無に旅鳥よ、茂兵衛なんてねと豪勢小粹な名前だが、相手のおさんが居ねねので、根ツから濡の利かねねちやり敵だ、その代りに鮫の徳藏といやア、相撲から伊豆は愚かなこと、駿河遠州、伊勢の方から紀州沖までも自分の繩張内にして、一梶間違ねや船幽霊の仲間入をするといふ此の荒海を、向ふ不見の白頭翁もよろしく、お先眞闇に飛んで廻つちやア、實になりさうな船を探して、片つ端から餌食にするといふ毛色の變つた商賣だ

ハツハツハ、這邊船とも知らずに乗せられた手前こそ、餘程星廻りの凶い因果者察して見りやア氣の毒だのう』と冷笑つた。

『おや、それぢやアおまはんは泥坊かね』お梅は眼を睨つた。『おい、泥坊と云つちやア値打が無くならアな同じこつても海賊とか何とか、威勢よく言つて貰ひてね』、『ぢやア海賊さまかね』とお梅は笑つて『道理で訝しいと思つたよ、そんな事なら最つと早く淺黄の頭巾を脱いで、名乗を揚げて呉れりや可いの、さんざばら人に氣を揉まて抜いて、今頃本音を吐くなんて、随分罪な芝居をするぢやないか、そしてソノ海賊さまが、妾のやうな木葉役者を、何の御用に立てやうと思つて、態々此の船へ引張込んだのだね、さア、それを聞きませう』と摺寄つた。

『男が女を連れ込むからにやア、言はずとも解つてらアな、おい、お梅、俺ア心から惚れ込んだのだ』と凄い眼でぢろりと其の横顔を窺いて、にや／＼しながら『越中島から一緒に蒸氣船に乗込んだその時から、ア、佳い女だ……』と言ひかけるのを、お梅は遮つて『最う解つたよ、聞きたくもないお世辞なんかを、臺詞めかしてベト／＼と列べなくつたつてさ、蛇の道は蛇、情事で叩き上げた妾だもの、惚れたと一言いひや百も合點だアね、おまはん、そりやア眞

氣かね、挑弄つて遊ぶのぢやアなからうねね』お梅は溢るゝばかりの媚を含ませた顔を徳藏の正的に向けて、此の嬉しい胸の底を叩けばかりに、飽までも見せつけて遣つた。徳は戦々として心柱立つ。

## ( 七 )

お梅は先づ相手に充分の氣焰を吐かせて、其の本音を抑へてから、徐々逆手にかけて荒肝を挫いて遣らうと試みるのであつた。併し敵もさる者、首尾能く此方の手に乗るや否、それが自らも危まれる所であるが、情事にこだわつて來てゐるだけ、未だ始末が爲易い、一つ此の弱點を突込んで、乗るか外るか、一騎打の勝負をして見よう、と咄嗟の間に考へた。

『妾のやうな者でも何處に取得があつて、それを見込んでのお話ならばね、そりやア随分歌と咏で、是から何年生きるか知れないが、有りつたけの命へ鬩斗をつけて、皆おまはんにお上げもするけれど、ちよいと浮氣をして見たいが、交際つて呉れまいかぐらゐの、薄つべらなお話なら、妾ア眞平だ、ね、伊豆屋の旦那……ぢやアなかつた、鮫の徳さん、おまはんの眞箇の

心意氣てわのア、一体什麼なの、鮮かな、張のある言で搦みかゝつた。

「ハ、、、御念の入つたお尋ねだないつア」と徳は口を瘋めて「面抱を顔に吹かした青二  
 戈ちやアあるめねし、那麼出来心の一寸惚をする柄かい濟まねわがコウ、徳藏の肚の中を割つ  
 て見せてくれわだせ」、「ちやア、一生涯妾を可愛がっておくれかね」、「あ、たばうよ、お前さ  
 れ可厭でなけりやア友白髪までだ」、「嬉しいねわ、チュツ」お梅は鼠啼をした。

漸々鈍くなりかゝる所は、火に融かされた生糞糊も宜しく、思ふ壺に陥つて来るやうに見ら  
 れたが、融けたと思はせて其の實は、べとつきながらも次第に凝固るのであつた。是が徳の駈  
 引。

「だがお梅、爾と嘶が定つたら、最う八丈鳥はサツバリと思ひ切つて呉れなけりやアならね  
 せ、可しか」、「アイヨ」、據所なく、苦しいのを吞殺して、故意と威勢よく返辞をした。「此の船  
 は島へ廻りやアしねわよ、可しか」、「アイ」、「假令此先甚麼事があつても、びく／＼したり、  
 はら／＼したり、初心らしく卑怯な所爲をするんぢやないよ」、「承知だよ」、「何處へ行くにも  
 一つ船、陸へ上たつら俺の側を放しやアしねわぞ」、「結構!」、「生死も苦惱も又た娛樂も、も  
 やひ傘とやらかさうせ」、「願つたり叶つたりだわ」。

「アハ、、、何を言つてもアイ／＼ちやア、根つから張合が無わ、お梅、お前心から承知なの  
 か」、「念疑深いねわ、其麼すりや可いんだわ?」、「心中を見せて呉れ」、「わ、心中!」、お梅は  
 美しい眸を輝かして、男の顔を仰看げたが頷いて三膝ばかり乗出して、いきなり其手から刀を  
 引奪つた。

「コレ、何を爲るツ」と徳は驚いて警戒するやうに、立揚つた。それを尻目に懸けて、お梅は  
 突と舷近くに寄つて「徳さん、御覽な、妾の心中は此の通り」と左の小指を欄干の上へ乗せて  
 右の手ですらりと抜いた白刃を振翳しながら、發矢と斬下した閃光に、白魚の艶やかな肉一寸  
 紅みの血汐の下にころりと墜ちた。それを鼻紙にくるくると巻んで、ぼんと徳の前へ投出して  
 「是で解らなけりやア、おまはんも餘程什麼かしてるよ」と淋しく笑ふのであつた。

(八)

鮫の徳は瞥乎とそれを見下して愉快氣に笑つた、「ハッハッハ、流石は柳橋で叩き上げた姐御  
 だけあつて、爲ることが圖及抜けてる、面白い、氣に入つた、可し、お前の心中は確かに見届



けた』、頗る恐悦の体。

『氣に入つて貰はなけりやア、埋らないぢやないかねね』、お梅は手拭を咬裂いて、ぎりぐりと指の切口に纏帶した。

『待て〜、俺が結へて遣る』、徳さん急に相好が顔れた。摺寄つて布を捲きながら『可哀想に嘸痛からう……親から貰つた五本の指を、四本半には誰がしたッて古い情歌があるが、お梅堪忍して呉れ、お前を不具にした代りには、なア、コウ、是から一生懸命に可愛がつて遣つて此の入合せを爲るからの、痛からうが我慢をしろ……オツと、此の切屑を這麼にしといぢやア勿体ねね、俺に取つちやア大事の記念だ、錦の袋にでも入れて肌身に着けて置かなけりやアなるめねよ、ハツハツハ』、鈍いことを御意召さる。斯くして切落しの肉の一片は、鼻紙ごと徳の懷中に拾ひ揚げられた。

『恚う芽出たく嘶が定つたら、最う水入らずの夫妻仲だから、お互ひに遠慮なく嘶し合つて、何かの相談を爲ようねね、徳さん』、『當然よ』、『おまはん一体、妾を如何する心算であつたの』、『實ア何だ、今だから話をするがな、おい、倘しも可厭だなかと吐しくさつたら、ふん縛つて手籠にした上では伊勢の津か、紀州の熊野邊へ賣飛して金に爲ようと思つてたんだ』、『爾う

頼母しいねね、妾ア那麼悪黨が好き、そしておまはん、此の船は何處へ行くの？』、『阿波の田浦に居る仲間から、大かい仕事があつたから、此の月末までに來いッて便があつたので、まッそれを目的に行くんだが、エーと是から御前岬を突切つて、遠江洋を志摩の鳥羽へ出て、それから熊野浦と檜野崎を通つて、紀伊をぐるりと廻つて四國へ出る路順だが、行き掛に物になりさうな船があれば、片端から盗いで行かうてねんだ』、『面白い稼業だね、妾も海賊さまの、女房といふ肩書が附いて見れば、只ぬく〜と寝轉んで御亭主のお稼ぎなさるのを見ても居られまいから、是から些と泥坊の見習をして、共稼ぎといふ味な寸法でいきませうかね』、『可からう、やつて呉れ』。

お梅の指切政策は美事に成功した、徳は忽ちにして二本棒となり了した、お梅は斯くして彼の急激なる迫害を避け、徐かに其の毒手から遁れ出づる工夫を運らして、都合好くは彼を賺し立て隼丸を八丈島へ回航させようといふ目的であつた。第一の望はそれで達したけれども、只姑息的に一時を瞞着したといふだけで、假令其場限りの逃口上にもせよ、我から進んで承諾した以上は、可厭でも彼に身を任せなければならぬ、獸慾の犠牲にならなければならぬ、なるくならぬなら始めから指切の痛い思をする必要は無いのだ、切つたからには其の指を役に立てるだ

けの工夫を爲さなければならぬ、所が徳の話を聞くと此の船は四國に直航するのだと云ふ、すると八丈島へ廻らせる事などは想ひも寄らぬ望、途中の上陸すら幾んど見込がない、それも彼に操を弄ぶことを許したならば、甚麽にかなるだろうと自分で想像もつくけれど、死んだ跡なら兎に角、此の世の空気を呼吸してゐる間は、斷じて彼等の手に操を渡すことは出来ぬ、然らば適當な手段が有るか？、無い！ 越ち得たるところは、敵をして十分に信用せしめ、油斷せしめた事、唯それだけである。

お梅は途方に昧れた。今までにあらぬ苦惱に心を寸斷された。苦しみながらも、一息吐いて寛りと考へながら、何とか工夫が付きさうなものだと思つた。で徳に對して恚いふことを申し出た——嘯が定つた上は、船の者へも披露して、正式に仲人を立て、眞似でもいゝから祝言の杯をしたい。でないと野合の浮氣咲き、何時棄てられるか解らぬ、爾して安心さして呉れ、最も日柄は今日も明日も凶い、次に其次も又た不吉、十二日目の子の日は中段ひろく、大恩の大恩日、婚禮には此上なしの吉日であるから、其日に芽出たく三三九度の祝ひを濟まさう、それまでは他人で居て貰ひいた——と携帶してゐた曆を突きつけた。徳は待遠しく思つたが、機嫌をそこねてはならぬと花聲氣取で、うん、諾々で通した。

船が伊勢の海に這入りかゝつた頃である。お梅は更に是ぞと思ふ妙案もなく、只煩悶が重なりゆくばかりの矢先、茲に恐ろしい出来事を目撃した。それは通行の和歌山丸といふ和船を却かして、塔載した貨物を奪ひ、乗組の船頭を傷殺した事である。

( 九 )

霧の黄昏である、志摩の菅島白崎と神島の中間、凡そ一哩許の沖合で、伊勢灣を出て來る和歌山丸にびつたりと會つた。此の船は豫てから見覺のある伊勢の松阪十津見屋といふ豪商の持船で、大阪から東京間を幾回となく往復し、伊勢一國に捌く商品を輸送することを、徳藏が知つてゐたので、其の船印を見るや否、手下の者にそれと號令を傳へ、端艇を下して急に追撃を加へたのである。

同勢七人、いづれも鐵砲やら白刃やらを提げて、猛烈に飛込んだ、命が措くば積荷を殘らず渡せ——理屈のない脅迫文句である、乗組んでゐたのは十津見屋の手代と、頭其他を合せて都合七名、防がれるだけは禦いだけれども、肝腎の武器は準備せず、不意の襲撃に狼狽へる方が

先に立つので、最も強く抵抗した者は斬殺され、見る間に三人の負傷者も出来た。賊の運動は頗る機敏、一方が格闘してゐる間に一方は積荷の眼星い物をごし／＼と搬ぶ。三十分と経たぬに仕事を了つて逸くも本船へ引揚げ、夕靄の中に跡を消すといふ行動は、其の名に背かぬ準式であつた。

此際慌て、海の中へ顛げ落ちた一人の若狭がある。波に揉まれて浮きつ沈みつ漂つてゐるが恰かも本船へ急走する賊の端艇を見て、苦し紛れにその舷へ手を懸け、救けて呉れと叫んだ。涙を有たぬ鬼們も、流石に見殺しにするには忍びず、引揚げて本船へ伴ひ還つたが、多量の沙水を飲んだと見えて、體がぐづ／＼になつてゐる。それを碌々手當もせず、下艙の積荷場に轉がし込んで、東風を幸ひに帆を揚げた儘、熊野浦を指して急航した。

お梅は其の嘶を手下の者から聞き、又た太く弱り抜いてゐる様子を見て、一方ならず哀れに思つた。で、一同が分捕品を撰分けて、そら生糸だ、反物だ、櫛だ、笄だ、異人の穿く皮の下駄だ、西洋の羽織だと調子づいて騒いでゐる隙に、窃と胴の間に脱出して、下艙の船底に降りて見ると、灯火もない真闇がりに、宛ら河岸に着いた鮪のやうになつて、ごろりと寝てゐる。「モシ」とお梅は背上へ手を懸けて揺動かしながら「氣分は甚麼ですわ、さア是をお上り、持

合せのお薬ですが、些とは驗くでせう」と紫金錠を小茶碗に洋かしたのを口許へ持つて行く。大儀さうに起直つて「ハイ、有難うございます、此處へ來てから二三遍吐きましたので大分快くなりました、ハイ實に飛んだことで御世話さまになります」。

持つて來た手燭の光で其の若狭を見ると年頃二十三、散髪天窓の色の白い、鄰しからぬ人品である、黒奉書の紋附の袷を着てゐたのが、潮に濡れたので、乾兒のお情に借して呉れた古布子に括まり、悪寒がするのかが、がた／＼と顛へてゐる。

「いね、飛んだことゝは此方はいふ言葉ですよ、眞箇にまア、何と言つてよいか、只最うお氣の毒だね」とお梅は同情して「一体おまはんは何處なの」と身許を訊ねた。

## ( 十 )

「はい、私は」と青年は顔を上げて「伊勢の松阪在で大黒田といふ所に、醫者を渡世にして居る玄庵といふのが、私の親でございまして、私は董と申します、實は横濱に知合の者がありますので、夫を使つて參つた上に、然るべき先生の門下に這入つて、蘭法の醫術を修行しいと思

ひまして、親に願ひました、けれども却々承知をして呉れません、でも草深い田舎に愚圖くしてゐましたんでは、到底も立派な醫者にはなれませんから飽までも志を果さければならぬと思ひ詰めまして、昨晚無断に家を飛出したんですが、東海道へ方へ出て参れば、跡から追手が懸つて取捉まりますので、十津見屋さんの和歌山丸が東京へ出て行くと聞いたのを幸ひ、出入の船頭に頼んで乗せて貰つたのが私の災難で、這麼情ない目に遇つたので御座います」と残念さうに語る。

『おや、それぢやア、おまはんは醫者さんか』とお梅は一汐哀れに感じて『まア、お氣の毒な、何といふことでせう』と太息を吐いた。同じ事情の下に、同じ悪黨の手に囚はれて、齊しく此の憂目を見る。運命といふ意地悪な神に虐待さるゝ繼子は吾ばかりではなかつたか、と思ふと痛々しく身につまされて、そゝろに涙が翻れる。其の涙には人鬼の餌食になつた自分の不甲斐なさを、悔まるゝ無念も、怨も、憎悪も籠つてゐた。

『尊姐も何でございますか、矢張船泥坊で？』、『私がかね』、『爾なんぞせう、内儀さん、お願ひでございます、萬望命だけはお助けなすつて、何處へでも上陸てやつて下さいまし、腰纏の金も此處に二十兩許持つて居ますが、是は皆な差出しますから』と懐中の胴巻を取出さうと爲

るのを『戯談おいひでないよ』とお梅は抑へた。

『成程、こんな船に乗つてるんだから、爾うお思ひなのも無理はないがね私ア決して那麼者ぢやアないよ、正直のところ、私もおまはん同様、此の泥坊船に体好く攫はれて來た旅の者なの』といふ顔を『アツ、尊姐も！』と董は圓い眼で仰看げた。

お梅は低聲で一通りの事情を晰して聞かせてから『ね、爾いふ譯なんだから、什麼にかして此の船を逃出したいと思つてるどころなんだが、おまはんといふ味方が一人殖ねて見れば、何を爲るにも都合が好し、私も急に氣丈夫になつたといふものだ、と云つて未だ恁といふ工夫もつきやアしないが、假令私が逃げ損つたにしても、おまはんだけは什麼ともして屹と逃がして上げるから、能く胸に疊んごいてね、私と這麼相談を爲し事なんか、腰にもお出しでないよ』と囁いた。

董は頓かに勇氣づいた、どんよりと曇つた眼の、垂死の人の如く光を失つたのが、活々と瞳が働いて來ると、聲までが勢ひよく昇つて『いやア、そりやア甚麼も、實に意外でございますな地獄に佛、私はお蔭で助かりますッ』と調子高く言ふのを、お梅に制されてはつと口を緘む。

長居して怪しまれてはと、お梅はぶつと蠟燭の火を消して立揚つた。その袂を董は下から引いて『モン』と聲を窃め『外に工夫があれば何ですけれども若し無いとすれば、此處に恠いふ物がありますかな』と内懐から小さな壘を一つ出して、お梅の手に掴ませながら、耳許で何事か囁くこと『まあ好い物が授かつたね、可いわ、萬事私に任してお置き、顔は見ぬが悦にみたされた聲音であつた。』

『うわー』、突然片隅で大きな欠伸。二人は愕然として飛退くやうに放れた。

『あゝ、酔ばらつた勢ひで、すつかり寢込んでしまつた、最う日が昏れたかな』、聲が續く、誰やらが劬々と起揚る氣配である。

お梅はその聲で稍と曉つた。手下の河豚六と渾名のある男が、酒に酔つて先刻の仕事にも加はらず、此處に来て寢てゐたのである。

\* \* \* \* \*

横濱の沖に碇泊してゐた米國汽船シテーフ號に一大椿事が起つた。汽罐の破烈！出火！それが恰かも辰之助父子が花子を盗み出す夜の同時刻——偶然？不思議？！

( 十一 )

シテーフ號の椿事を惹起した原因に就ては、其の詳細を知るに足るべき記録も傳はつてをらぬが、當時發行された木版摺の新誌などには——蒸氣船銅壺破裂、即死怪我人夥しく出来る——と漠然とした事を記してあつて、即死九人、怪我人百三人、生死不明二十七人と數字を加へたゞけが、較報道の機敏な方だ。併しその數も確實か什麼かに今になつて判断すべき方法が無い、只その銅壺といふのが機關室の汽罐の事で、蒸氣の壓力に堪へざるまでに密閉器の材料が損んでゐた所へ、それを知らずして熾んに火力を送るか、但しは安全瓣制限外の氣壓を起した爲め、突然汽罐の受熱面が破裁するか、火管煙箱、アツプターキなどに故障を生じて、火災を發するやうになつたのか、多分那麽事があつたらう、と専門の智識なき素人考ひ想像されるまでである。

恰かも其の曉方に横濱を出帆する都合であつたので、夜間から火夫長や石炭夫などが機關室に這入つて、作業に従事してゐたといふから、此時は石炭燃焼の最中であつたかも知れぬ。

辰之助は悴に花子を渡して、飛び着いて来るテストラを支へ、死物狂ひに格闘をしてゐる、その途端に凄じい響がして、宛ら大地震に揺上げられたかのやう、船體が激しく震動した。同時に慌たしい人聲靴音、耳を劈く叫喚が爆然として闇に起つた。それを聞くとテストラは掴み合う手を振放して、逃げるが如くに室外へ飛出した。

辰之助は何事とも思ひ分かぬが、續いて其の跡を趁ふと、艙房から寢表の儘で轉がり出した船客、先を争つて駈けて行く。這つて踏けるやら、突當つて偃るやら、折重なつて倒れるやら意外の混乱である。

昇降口に近い給仕室前へ来て、始めてそれと解つた。機關室から猛然として噴き上る焔は、逸くも料理室へ移つて、爆々たる響と共に毒蛇の舌を吐いてゐる。その火の粉を被つて右往左往に迷惑ふ人影、唧筒、水管を曳く水夫、非常信號の鐘は凄じい叫聲に和して、悲し氣に吼ゆる。

辰之助は悴と花子の成行を氣づかひながら、船橋の方へ出ようと煙を潜つて駈行く途で、濛々と渦き立つ黒煙の中へ捲込まれ、かつと咽ぶ息の下に物に跌いてばかりと偃反つた。

源作に取つては、此の出來事が幾んど天祐であつた。彼は夜警の水夫に發見され、危く短銃

で狙撃されようとした一刹那、突然の大爆音、大動揺と共に、水夫も源作も彈返されたやうに打仆れた。仆れたのが命を拾う動機、湧き立つやうな騷擾の中を潜り抜け、辛ふじて花子を抱いた儘繋いであつた我舟へ飛下りることができた。

## ( 十一 )

源作は花子を胸の間に置いて、絡びつけた索を引切つて。手早く櫓を舒べて汽船の舷側を離れると、どつといふ浪に曳かれて、瞬く中に半町許。

後方へ回顧ると汽船は熾んに燃わてゐる。炭庫から噴き揚る炎は甲板の上へ數丈の紅連を逆立たせて、ぱりくといふ凄じい響の下から、落花のやうな火の粉を降らすそれは浴びながら必死となつて乗客を收容し、救命端艇を卸さうとする水夫の影や、我勝に浮袋を取らうと争ひ立てる乗客の影が樺色の火光に映つて、明滅たる一幅の幻畫を描いてゐる。船員消防隊の手が廻らず、火は早や客室から倉庫にまで延焼したらしい。

源作は一旦舟を漕ぎ出したものゝ、跡に残つた父を振棄て、我一人立去る譯にはゆかぬ。そ

れを救ひ出す目的で来た上は飽までも一念を貫かなければならぬ、折角敵の手から奪ひ返しながら、無惨な火焙りにする様な事があつては、危険を冒して此處まで来た甲斐がないと思つた。

で、直ちに舳を復して再びシテーフ號の舷側に突進したが、上から吹落す火の粉と、窓から吐き出す煙とに遮られて、いつかな接近する事ができぬ。據所なく船に敷いた薄縁を花子に冠せ自分は裸になつて、塩水に浸した筒袖半纏を頭上からすつぽりと被つて、恚といふ目的もなく只ぐるぐると舷側を回轉つた。

父は逃げて来るに違ひなく、又た海に飛込むに違ひない、水練の心得もあることだから、よもや脆い溺れ様をせまいと堅く信じてゐた。で頻りに上と下とを回看しては、聲を限りに父を呼んだ、彼の眼も口も手も心も、有る限りの全力を盡して、船を爛らし肉を焦すその炎の如くに熱し切つたのだ。

救命帶を着けて上からドリットと飛込んで来る者はあるけれど、父らしい者は見當らぬ。喉も裂けるばかりに叫んでも應がない。源作は只と望を失つた。と思ふ中に火勢一際猛烈、まご／＼すれば自分の身も危くなつた。陸上からは此の火の手を認め、非常呼鐘の響を聞きつけ

て、救護の船五六艘矢の如くに飛んで来る。氣遣はしい父の命、生死を見届けずして此儘引揚げるのは、子として忍びぬことだと思つたが、助け船が来た上は、幸ひに火を潜つて水に落ちても、必ず救はるゝ事であらうと、只そのみを使ひにして、涙を呑みながら舳を回した。

五六町許りも漕ぎ出してから、シテーフ號はと顧ると、真紅な火に包まれながら、鯨の沈むやうに左舷から次第に傾き始めるのが見えた。

途端に右の方二間許の距離に、浪に漂つて手を振上げ、「あ、あ、尊君、た、た、助けてください、助けて？」と呼ぶ者がある。源作は急ぎ舟を寄せると、泳ぎ着いて舳へ手を懸けた。見ると紛れもないシテーフ號の水夫。

### ( 十三 )

源作がシテーフ號に忍び込んだ事情は恚である。

父の辰之助は氷室備附の果物蔬菜類を賣込むべく、一艘の荷足を傭人に漕がせて、シテーフ號に赴いたが、日が暮れてから其の傭人だけが戻つて来た父はと尋ねると何か大きな注文が出

るのを待つ都合で遅くなる、いづれ夜になるであらうが、此方の端艇が出るといふから夫に乘せて貰う、お前は先に歸つて明日の準備をしる、と個様に水夫が傳言をするので、自分だけ引揚げて來ましたと云ふ。

と、歸らぬ、空しく一晚を待明した。翌る日の午後になつても影がさゝぬ。母は心配して再び傭人を迎ひに出すと、昨夜遅く歸つた筈だとの答を齎らして來た。訝しい、餘程怪しく想はれる。

孝行者と評判されたる源作だけに氣が揉て堪らぬ。母にも内々で家を飛出したなりに、持舟に乗つて自ら櫓を切りつゝ、日の暮方にシテテ號に漕ぎ寄せた。水夫に訊いても知らぬと云ふ。事務長から主厨長にまで面會して確めたけれども、いづれもアイドノンだ。情々として引揚げようとする、恰ご自分と同年配の支那人の給仕が居て、源作を小陰に招き、お前のお爺さんは甚麽いふ譯か知らぬが、昨日水夫仲間打擲され、斯々の空室に押籠められてゐると密告した上に、素知らぬ顔で其の室の近くへ導びき位置までも教へて呉れた。此の給仕は長崎の居留地で手足を伸ばした者で、名を楊潭といひ、英語と日本語とを巧みに操る可愛い少年であつた。

楊潭の好情は是ばかりに止まらぬ。今夜こつそりと此の艦内に忍んで來て室からお爺さんを連出したら可からう其の手引は私がして遣る、とまで勧めた。源作は悦んで萬事を頼み置き、一旦船へ戻つて歸港してから、大鑿一挺を懐中して夜の更くるを待ち、再びシテテ號へ漕ぎ着けて、右舷の方へ廻つて見ると、豫て謀し合せた如く、楊潭は上甲板の打重機の邊から鈎索を一本落してある、源作はその索で自分の艇をつなぎ、猿のやうに縋り着いてするゝと甲板に登り、首尾好く艦内に忍び込んだのであつた。

楊潭といふ少年が何故斯くまで親切に盡くして呉れたか、といふ事は當時の源作には解するところが能きなかつた。が、長崎で育つて日本の國情に通じてゐるので、自然最負氣がある、其處へ同じ年頃の少年であるのと、實際辰之助が大勢の者に苛めつけられる所を目撃して、氣の毒に感じでゐたのと、夫や是やから湧いて出た同情に外ならぬ。否、最つと強い原因がある、それは水夫のウエツチと自分との間が悪く始終宥り立られてゐたので、彼に對する復讐？ 恚くして喫驚させて遣らうといふ子供らしい敵愾心であつたのだ。

今し源作が溺れた人を救ひ揚げようとして、傾く月光にその姿を見ると、正しくシテテ號の水夫である。おのれ、父の仇、這度目に遇うのも天の冥罪、什麼して助けられやう、人の怨



恨を思ひ知れど、物々として。突然舷に取着いた手に足を踏みかけ、浪に蹴落さうとしたが、待てッ！、是は自分の心得違ひ、男らしくもない卑怯な、日本人の大和魂といふものは、決して那麽物ではない、助けて遣れ、怨を恩で返せ、爾だ！と閃く靈火の心機一轉、誠を腕に籠めて、ぐいと舟へ引揚げた斯くして救はれた水夫こそ例のウエツチであつた。

( 十四 )

ウエツチは敏捷い男だけに、未だ船長の命令も下らぬ中に、危急と見るや否、救命環を着けて海に飛込み、物の一時間も浪の上に漂つて、船助の來るのを待つていたのであつた。

源作が引揚げて遣ると、衣裳は全濡れ、曉近い汐風の肉に沁止む寒さに顫ひながら「尊君、お蔭助かりました、日本人皆々親切、神さまあります、有難う、有難う」と日本語で禮を言ふ眞蒼になつた顔には無限の怡悦が溢れて見えた。

「イヤ私の親切といふよりも、お前さんの方が運が好いのだ」、源作は手拭を腰から抜いてウエツチに與へた、「さア是で顔や手をお拭きなさい、嘸寒からうが、私も生憎濡れた半纏一枚だけ

で外に貸して上げる着換も持たないから些この間辛抱して下さい、河岸へ着きさへすりやア、又た什麼とがして寒さ凌ぎの事をして上げるから、必死と櫓を切りながら舳るのであつた。

ウエツチは有難うを幾回か繰返して「私、早く逃げました、助かりました、仲間大勢危ないことあります、オー、大變、船沈む、船沈む」と叫びだ。沖の方には今しもシテーフ號が大炎柱を逆立て、没沈し始めた。その火が朧銀色の波を直射して、日の出のやうな美しい光の棧をゆるがせてゐる。

「お前さんが逃る、時に、倘しや年の頃が五十位の、少し前額の禿げた日本人を見懸けませんでしたかね」父の事が氣懸りなので聞質すと、は、五十ぐらいの日本人？と首を捻つて「彼の船に日本人居りません、昨日横濱から乗つたお客四十人程ある、皆他の國あります」、「いや、それはお客人ではないので、彼の船に青物を賣込に行く八百屋の辰之助といふ者ですが……」、「辰之助、オー、私知合あります」、「は、お前さんが御存知で」、「知合あります」とウエツチは重ねて答へてから「尊君、辰之助さん、友人ありますか」、「は、友人どころか」、「實は私の父爺ですよッ」、「オー、尊君お爺さんありますか！」、愕然として眼を瞬つた。

シテーフ號より奪ひ出されてから後の花子は、幼い身にも物凄じい光景に衰弱した神經の過

敏になつてゐた矢先一層恐怖の度を昇めて、頻りに泣き立てるのを、源作が賺し立てながら、薄縁を煎餅にして頭上からすつぽりと冠せて、眼を瞑つてゐると言合る、揺られて轉がり落ちぬやう、船の横木に緊と體を繋いで置いたので、此時は柔順しく胴の間の板子の上に寝轉んでゐた。

それが嘶聲がするのを不審に思つたのであらう。何の間にか薄縁から首を突出して、側に蹲まつたウテツチの顔を仰看げた。途端にウエツチも船の焚ける光に始めて其の姿が眼に着いて未だ辰之助の事を答へぬ先に、再び非常の驚愕に打たれた。『是れ、花子さんあります、オー花子さん』。

花子は怖いと思つたか、穴へ這入る蟹のやうに、ごそくと薄縁の中へ潜り込んだ。

夜が明けてから見ると、シテーフ號は只橋の尖端を水面に露出するだけで全く沈没してしまつた。乗組人員數十名の生死に就ては、市中の噂どりで當局者以外の人には更に其の真相が解らなかつた。

翼なきに飛ぶ風説の、横濱一圓にかけて有らゆる耳と目を聳動せしめた其の日の朝未明、市の南端北方の海岸本牧の鼻へ泳ぎ着いた一人の男がある、それは八百屋の辰之助であつた。

(十五)

辰之助は一旦煙に捲かれて窒息しようとしたのを、辛くも甲板運動場まで逃出して、悴と花子の所在を捜したけれども、大混亂の那裡であるから、更に成行が解らぬ。躊躇すれば焚死ぬばかりである。今はと心を定めて櫓干の上からざんぶと海に飛込んだが、浮袋の代りに甲板に在合せた長椅子を投げて置いて、それに捉まりながらに波に浮んだ。

海邊で育つれ男だけに十分水心はある。片手に長椅子を押し、片手に波を切つて、泳げるだけ泳いだ、目指す地點は英吉利波戸場、何でも彼處迄と一帶の黒線を望んで、必死とやつと見た。勞れる、長椅子に捉まつて息を吐く。又泳ぐ、斯くして二時間も努力を續けたが、思ふやうに進み得ぬ、波止場は眼に見えながら、風と潮との工合で反對の方向に逆行をするやうな氣がする救助船が通るのを呼んでも、氣が注かぬらしく行過ぐる。悶ねる、疲勞する、力が萎

わる、手足は凍わる、氣が遠くなる。最早駄目だと観念した。で椅子に憑れた儘、下帯を解いて、自分の体を括しつけて、波の吞吐に死生を任した。

斯くして、四時間許漂つてゐる中に、神は幸ひに此の倭漢を見殺しにせず、潮に送り送られて、夜明頃本牧の鼻に打揚げられたのであつた。此時は早や半死半生になつてゐたが、元來が氣丈な男、椅子を棄て、岩角に取着いて、匍うやうに陸へ揚つたあゝ、嬉しいと思ひながら五六間も踰々と歩いたか歩かぬかに突然ばかりと仆れて人事不省。

誰やら我を喚ぶ聲に、ふつと氣が注いで眼を開いた。見ると船頭らしいが、四五人許、焚火をするやら薬を哺ませるやらして、頻りに自分を令抱してゐるのであつた。

此の朝、北方の漁師藤三郎といふのが、例の如く漁に出ようとして、仲間と共に此の濱邊へ来て見ると、辰之助が仆れてゐるので、難船して漂着したものであらうと、直ちに體を温め水を吐かせ、種々應急手當を加へた甲斐があつて、半時間と経たぬ中に息を吹返したのである。忽ち歡喜の聲が揚つた。『めでたくや、有難ね〜』、『オイ、最う大丈夫か、確か』、『辰之助は起上らうすると、夫だふち〜と眩暈がして、氣が茫としてゐる。』『はい、有難うございます、お蔭さま、命拾ひをいたしました。』『起きちやア早いよ、まア爾やつて蓆の上に寝てゐる』

なせね、オイ、權兵衛、酒があつた筈だ、一杯飲まして遣れ、力がつくから……それから誰か大急ぎで粥を拵けて來い、腹が空つてるだらうから……成るべく薄くするんだぞ、可いか。藤三郎は愉快らしく差圖をする。

『お前さん、一体甚慮したといふんだ、難船か？、何處だね、家は……房州か上總か？』、『いね、私は辨天町一丁目の八百屋の辰之助といふ者で』、『何近所か、八百屋なら陸の物だのに、海で溺死するてのは訝しいぢやねわか』、『いね、それには色々事情がありますんで、實は昨晚焼きました蒸氣船から落こたんでございます』、『ねッ、それぢやア、アノ火事を出した異國船の……む、爾か』

と言つてる所へ、權兵衛といふ仲間が駈戻つて來た。『オイ、爺さん、最う一人土左が上つたせ、アレ、彼所だ』と浪打際を指さして『今度のは些と柄が變つてる、慈姑の取手だ』、『お醫者さまか』、『エイヤ、豚の尻尾だ』、『解らねことをいふ野郎だ、何だ』、『チャン〜坊主だよ、如何しやう、投ッちやらかして置かうか』、『爾さなア、面倒くせねから止さうぢやねわか』同じ日本人同士なら身に換へてもといふ事があるが、チャン〜坊主なら什麼でも可い、一人や二人死失つたところで日本の損にやアならねわかな、第一畑が違はア打棄ごとくすべね

よ』  
 辰之助はその顔を仰看げて『モシ、親方、濟みませんが、お助け序にッノ唐人も助けてやつて下さいませんか、私がお蔭さまで命を拾つて見れば、此の嬉しさを他人にも分けて遣りたうございませす、手當の甲斐がなければ據所ありませんが、活きるものなら活かして遣りたうもんで、唐人でも矢張人間に違ひがございませんから』と惻願した、身につまされての同情といふよりも、何となく助けて遣りたいやうな氣がしたのである。  
 『む、それも爾だなア、ぢやア、大衆早く行れッ』藤三郎は一同を促して其の方へ駆け去つた辰之助も大儀さうに起上つて、ふらめく足を踏みしめながら跡に續いた。

## ( 十六 )

波は磯の彼方に退いてゐる。その干潟に置去られた骸は、稍く十七八ぐらゐるの青年で、仰向に長く亂した辨髪眞闇な粗朶に引懸つたのと、汐につかつた青衣の唐めいた打扮とを見て、直にそれと解る支那人である、一同の足音に驚いて、其懐中からちよろゝと紅盤が奔つ

て出た。

『おや、何處でか見たやうな顔だぞ。』辰之助は側へ寄つて差窺いてゐたが、『む、違ひない、彼箇だッ』と急に反かへつて『モシ、親方、此の唐人は矢張アノ米利堅の蒸氣船に乗込んでゐたんで、日本なら小僧のやうな役を勤める少年だが、私が商ひに出掛ける度、親切にいろんなことを教へて呉れて、日本の言葉もよく覺わてゐました、まア可愛想に……矢張アノ騒ぎで逃端が無くなつて、海へ落こつたもんと見えます、何方もお願ひですが、早く手當をして見てください、萬に一つも助かれれば、私の義理が返せるといふものです』衰弱した身も忘れて、抱起しながら胸を摩つてゐたが『やッ、未だ鳩尾に温味があるぞ』と叫んだ。

『待てッ、俺が見て遣るッ、權、早く火を焚けよ』藤三郎は肛門を極めて見て『む大丈夫だッ未だ尻子玉を河童に抜かれやしねえ』一同は之に觸まされて、頻りに介抱した。カッ潮を吐くと嘔！彼の靈魂は忽ちにして死の手から投還された。

『オーイ慈姑のお化！確乎しろいッ』ハ、そんな呼様をする奴もないもんだ、何とか言ひねねな、南京さんとか何とか、『だつて親方、只南京と云つたけは通じアしめね、仕方が無ねから憐う言はう、オーイ、何處のごいつだか解らねえ唐人の若ね衆、オーイ、スチャラカチ

ヤンのチャン／＼やア！しツかりしろやアい』『アツハツハ』漁師們は調子づいて暢氣なことを言つてゐる。

辰之助は必死と渾身を摩ると。追々に正氣づいて来て、恍然とした眼に辰之助の顔を瞞めながら『尊君、八百屋さんと、優しい聲で呼びかけた』氣が注いたか、氣を確かに持たなけりやア不可ねね。ソラ、藥だ、飲みな』『ハイ、有難う……八百屋さん、此虎は何處でございます』『横濱の本牧といふ所だ、お前も私も一緒に船から落こつて、此處へ流へ着いたんだ』『ぢやア、夢ではないので』、『なにが夢なものか、是から私の家へ連れて行つて、寛々寝かして遣るから、最う何にも心配する事はないぞ』、『ハイ、有難うございます』その眼に涙が輝いてゐた。

斯くして悴の源作へ與へた同情が、今其の父に依つて報いられた。辰之助を救はうとして努力した給仕の楊潭は辰之助の努力に依つて救はれたのである。此時一方には、己れの父を迫害した敵のウエツチとは知らず、源作が其の危急を救つてゐる神の手から抛たれた不思議の鎖は此様にして四人を犇と結びつけた、什麼結果が其後に起るであらう。

海賊船の隼丸は今熊野浦を奔りつゝある、時は和歌丸襲撃の翌日晝に近い頃。親分の徳藏を始め乾兒們は、胴の間に車座になつて、奇偶の勝負に夢中。醫者の悴だといふ董は、積荷場に轉がつて呻いてゐる。

お梅は胴の間の背面、梶に近い臺所で、お晝の調理を急ぐのであつた、此處には一切の勝手道具を列べてあるのだ。

手拭を姐さん冠りにして、襷掛けの世話女房振に、ことり／＼粗板いぢりをして居ると、後からのつそりと拔足して忍び寄つた者がある。回顧るとそれが乾兒の河豚六、前夜下船に酔仆れて、董との密談を聞いた男。

## (十七)

『姐さア、一人かね』風邪を引いたやうな皺喉聲を一際低くして、河豚六は側へ寄つて来た。瓜先を立て、兩手を突いて、四ん這になりながら、首をすつと伸した。

『おや』とお梅は避けるやうに膝を回して『六どん、什麼おしだね、オホ、妙な姿勢ぢやな

いか河豚六とはよく謂つたもの、きびく〜と能くも這様に道化た顔を、雙親が拵へてくれたものだ、と可笑しさを味へて眺めてゐる。

『私なア、お前さアにちよつくら嘶してねことがあるたよ』、『妾に……甚麽お嘶？』、『縁切庖丁を組板の上に置いて向直つた。』、『わへ〜、可笑しいなア』、『何がさ、早くお嘶しよ』、『嘶しても可いかね、わへ〜』、『薄氣味悪く笑ふ。』

『何だよ、六ごん』、『私な』、『はア』、『お前さアに怨があるだ』、『おや怨？不思議だね、お前から怨を受けるやうな事をした覺が、何にも有りはしない筈だが』、『無いとは言はれぬ』、『甚麽して』、『お前さア、磯の鮑の片思ひちうことを知つてるけ』、『オホ、異だね、文句が……何處にその片思ひをしてゐる人が有るのかね』、『有る無の沙汰どころでは無ね、罪造りだ、お前さアは……日に三度の飯もろくさま喉を透らね、くれねくよら〜と思ひつめて、遠くの方からお前さアの姿を隠めては、ぼつたり〜涙を瀧してゐるのだその心が解んねわかよ、此の薄情阿魔奴』、『赤鯛も宜しくの充血した眼、睫毛にたまつた脂を摩りながら、色氣を含ませて、でれりと顔を見られた時は、お梅、覺はず慄然とした。』

『おほ〜、何を言ひだよ、六ごん、戯談も好い加減におしな、そんな事を親分に聞かれ

て御覽ごんなに、怒るか知れやしないよ、妾と親分との仲はお前解つてらうに』、『む、そりや知つてるだ、だけんと未だ祝言の杯を取換さねの中は、夫婦になつたらう譯でもあんめね親分のお嫌でねければ、ハア、俺が何としたつて構はね、理屈だ、コーレ、一体私を活かすのか殺すのか、甚麽する氣だ、その返答次第で此方にも覺悟があるだぞ』、『執濃いね、お前そんなことを言はれる柄だか何だか、まア鏡に當つて御覽な』、『は、鏡に？、アノ何か、女ッ兒の持つてる、む、彼箇か、當つたら打壊れべに、願事の叶う禁厭にでもなんのかね』、『オホ、眞箇に手が着けられやしないね』、『蒼蠅いから彼方へ去つていよ！』

面白半分挑弄つてはゐたもの、の方圖がないので叱り飛ばすと、六は怫然として起返つた。『手前、可厭だちうのだな、可し、覺わてる、その代りにな奴』と睨みつけて『昨夜、彼の野郎と企んだことを洗は凌に親分に打まけて二人ごんぐるみ、叩つ殺させて遣るから後悔するな』。

『アレ、六ごん、お待ちよ』、『お梅は慌て、立上る裾を引止めぬ』、『お前、彼の嘶を聞いたのかね』、『聞いたとも、寢た假態をして悉皆是よ』、『と指先に我が耳を突いた。』

『爾う解つたら妾も胸の据ね様があるわ』と頷いて『六ごん、ちよい』と耳許へ口を寄せて、

「お前、真箇にこんな者を思つておくれなのかね」、「嘘は吐かねね」、「そんならね、六ごん、妾も覺悟をして蒐るわ、お前、寧ろそのこと、妾を連出して逃げてお呉れな」、「アッ、逃げる？」

「アレ、静肅におしよ、逃げるよ云つてもね、此儘ぢやア如何する事も出来やしないからね、ちよいと、恚しようぢやないか。」

囁いた手段は六の大きいに歡迎するところであつた。彼が無邪氣な河豚面は餌にありついた時のやうに、満足の笑を以てにた〜と波打たせた。お梅は毒に中てられずに濟んだ、寧ろ其の毒を利用して、自分の危急を救はうと試みた。

飯四の酒六は、彼等日常の生活である此の晝も相變らず酒になつて。料理を了つたお梅は直ちにお燗番へ移つて、物の三升ばかりを引替へ取替へ、河豚六に搬ばせた。胴の間から打つて抜きの龍の間——帆柱下——まで、車座に居流れて、彼等は頻りに茶碗をめぐらした。威勢のよい蠻聲で語り合ふのが、皿や徳利の音に雜つて、賑かに料理場へ聞えて来る。それが半時間と經たぬ中に、次第に薄れ行いて斷續になつた。聽て大風の風いだやうに寂然と沈まり返る。

「姐さア、姐さア、早く來て見なせね、やア、こりや不思議々々々」と六の叫ぶ聲がする。お

梅は手を拭きながら胴の間に駆出して見ると、親分の徳藏を首め七人の大漢、ごろ〜と算を亂して轉がり合つてゐた。

( 十八 )

「いやア、こりや妙だ、わへ〜、こいつは可笑しい。河豚六は頓猛な聲を揚げながら、そつち此方と駆廻つては押立尻の首を下げて、倒れた仲間の顔を一々窺いて歩く。

いかにも妙だ、今が今まで壯んな元氣の高調子、賑かにさ〜めき立つてゐた徒黨が、稍と微酔加減の耳が熱くなつたばかりの汐合に、宛ら三日も酒浸しになつた揚句のやう、泥鰯の意氣地もなく身が頽れて、ノへと轉がり合ひ、僅かに残る呼吸の下に、むづむづと蠢いてゐる有様は、麼も何といふ奇恠であらう。

黒い膏藥を貼つた大きな唇や、熊を欺く毛もくぢやらの脛や、赤松の節くれ立つた腕やらが狼藉たる杯盤の中に重なり合つてゐるのを回看して、お梅は莞爾と笑つた、笑ひながらも薄氣味悪い感じがして、戦々と惡寒がした。

「モシ、親分」と徳藏の側へ寄つて「おまはん、彼箇つばかりのお酒に、まアこんなに酔つばらつたのかね、今日に限つて甚麽おしだね、呆れツちまうちやないか、さア、最つとお上りよ妾がお酌をして上げるから、さちよいと親分、お起きな、起きてお上りよ、肩へ手を懸けて揺ぶりながら、片手に猪口を突つけると、徳藏はばつちりと眼は開いてゐるが、四肢は些とも利かぬ、何か言ふやうだが、舌が縛れて只むにやむにやと聞える。

「オホ、、、仕様がないね、全然大病人のやうだわ、ア、恐ろしいもんだ、這様に驗くものか知ら」とお梅はその顔を噴めて哮喘息をした。「姐さア面白いなア、ごいつもこいつも皆な愚喙々々だ、海鼠か海月なら未だ殺の中だが、こげねなダボ鯨の野郎ばかりではハア、筋を抜いたところで天蘇羅の種にもならねだから、此儘で融かして了うべねか、河豚六は欣々然として寄つて来た。

「何、融かす?」「爾よ、飲ませて遣つたゞけで、こげねになをくれねだから、天窓から彼の薬を打かけたら、見てゐる中に融けて無くなるんだべね」「オホ、、、蛞蝓ぢやアあるまいし」とお梅は笑つて「六どん、最う恁なれば大丈夫といふもんだ、お前、急いで棍を廻してね、早く此の船を陸の方へ着けてお呉れな」「待て、その前に俺がチョツクラ敵打をするだ、敵打

? 誰にね、」まア可いだから見てゐろ。

河豚六は前に仆れてゐた仲間の一人をぐつと曳起した、「やい! 這畜生、奴よくも昨日の賭場で俺を素裸にしくさつたな、負るも勝つも時の運、東照權現さまのやうな偉い方でもハア戦争に負けて、危ねねところを大久保彦左衛門が助けたらう軍談を聞かねか、此の馬鹿野郎、こつんと天窓を一つ擲しつけて「さア、俺を裸にしたかはりに奴が勝つた錢を皆な此方へ進上しろ、懐中の三徳を巻揚げて手を放すと、ぐつたりと又仆れる。全然死人の追刺。

六は更に徳藏に向つた、「おい、親分お前にも文句があるぞ、いつも俺のことを夜明の行燈だの、鮫鱈の化物だの人間に毛が三本足りねねの毒吐いてくそみに苛めやがつたな、何方が馬鹿だ、醜狀ア見ろ、やいッ、苛められた意趣返しに、お前の嫌アを俺が貰つて行くが可いか『…………』是から夫婦になつて、可愛がつてやつたりやられたりするだが行いか』『…………』口惜しいか、口惜しけりや、蒐つて来いッ』『…………』ソレ、来られめね。俺の足へかぶりつけ、ソーラ、ハツハツハ、好い氣味だ、何を言はれても徳藏は感覺はない、只ぼつと曇つた瞳が幽かに動くばかりであつた。

此の間にお梅は下船から醫學生の董を呼出して来た、不思議なる一場の光景、それを指さし



示すと、董は豫期したことであるが、藥劑の特効に駭いて眼を睜つた。

と、十町許の距離に帆を揚げて反對の方向に駛り行く一艘の大船があつた、お梅は眼敏くその影を認めて天の祐と欣んだ、董を促立て、急ぎ船の方へ駈出して、手拭やら衣類やらを竿の先に結びつけ、必死とそれを振りながら、聲を限りに呼び止めた。

## ( 十九 )

先方では氣が注かぬらしく、船脚早く前面を通り過ぎた。燥れながら猶も呼ぶ、一生懸命に衣を振つた。と始めてそれと悟つたものゝ如く、梶を此方へ廻して引返して來た。

董は急いで帆を下して、錨を投げて待つてゐた、應て先の船は十間許の距離にまで進み寄つたが、欄干の所へ船頭らしいのが顔を出した。

「何ぢやい！」と大きな聲で叫んで、「船でも壊れたかい、わらう騒ぎさるの、阿房らしい、

『まア仰山な聲やおまへんか』と呟く。見れば五百石積ぐらゐの親船、青地に御用の二字を染抜いた幟が立つて、平安丸と記號がついてゐた。

「親方さん」とお梅は舳の所に立つて、後生一生の願ひだから、私們二人を助けてくださいな、實は此船が泥坊の巢窟なんです、海賊船なんですよ、『わゝッ、ご、ご、泥坊！』先方は喫驚した様子だ。

二人が此の船に攫はれて來たことに就ては、種々事情があるのですが、それは後でゆつくりお断を爲ますから、兎に角此方へお出くださいませんか、モシ、お願ひで……萬望お早く、『わらいこツちやの、眞箇か』、誰が嘘を申しませう、命にも關はる大事ですのに、『ぢやが妙やなア、泥坊の船なら泥坊が居さうなものや、それにこなはん們が助けてくれと騒いでゐるのに一人も出て來んといふのが、ごだい理屈に合はんがな、そないな事いふて此方を鈎寄せるのではないかい、ドッコイ其手は食はんぞ』、『わゝ、那麼譯ぢやアありません、實は今ね、大衆に藥酒を飲まして、へど、にしちまつた所なんですから、死んだも同様です、萬望御心配なく此方へお出ください』、『何人ばかり居るの』、『都合八人で』、『刃物や飛道具などもあるやうだかな』、『それは此の通り、一緒に掻はらつて此處に持つて來てありますから、大丈夫ですよ』、『左様か、そんなら行きまはうか』。

稍このことに談判が終つた。平安丸には十五六人の乗組があつたが、我も我もと飛出して來

て、此の問答を聞いてゐた、程なく端艇が下りる、それに乗移つたのが倔強の船頭七八人、中に黒羅紗のマンテルを着た散髪天窓の四十年配、刀を一本落し差にした士らしいのが交つて、指揮をしてゐるやうに見えた。

鍵竿を引けて、陸續と軍丸へ飛込んで来た、お梅と董はそれを迎へて、是までの事情を簡單に嘶してから、毒酒に仆れた有様を見せると、いづれも奇異の感に打たれて、眼を圓くしつゝ、驚めるのであつた。

此の平安丸は和歌山藩の御用船で、和歌山から伊勢の四日市へ向け、御用品輸送の爲め航行の途中、熊野浦の大島附近で此の椿事に出會つたのである。洋服打扮の男は同藩川船奉行の下役西村三平といふ人であつた。

西村は先づ毒酒の如何なる物なるかを問糺してから、船頭に指揮をして、一々兇賊を縛し上げ、帆柱や櫓干へつなげた。

河豚六は至つて暢氣なものである、お梅が救を呼んでゐる中に、下艙の荷積場へ降りて行つて、掠奪品の中から金目があつて餘り嵩張らぬ物だけを撰抜き、それを大風呂敷に包んで、肩に引かけながら、鼻唄で悠々と出て来た。

「さア、お梅、出来たぞ、荷物が揃つたら何時でもござれのスタコラサだ、おい、お梅、何處に居るだ、オヤア、何の間に手前們が……ど、ど、何處から来た、やい、此處は俺の船だぞッ。」

喫驚して虚呂々々々々回看してゐる後方から西村は臂を伸してぐつと衿首を捉へた、「コレ、下に坐ろッ。」

## ( 二十 )

「何だ、手前は……他人の船へ断りもなく飛込んで来やがつて……あッ、あッ、こりや押魂消た、大衆がふん縛られてるだ、ハ、ア解つた、汝、船泥坊だな、おい、戸惑ひをして共食ひをしては不可ねだ、泥坊の船へ泥坊に這入る奴も無ねもんだ、間拔だなア、手前は……」

「オー、お梅、何處にゐるだよ、早く此方へ来なア、痛ね、コレ、何を爲るだ、悪戯をしては不可ね、やい、放せ」六さん、盛んに河豚式を發揮してゐる中に、西村の爲に高手小手に縛し上げられて了つた。

其處へお梅が出て来た。「六ごん、什麼おしだわ」、「什麼も慥も無ね、見ろ、こ、こ、こ、這麼にされたから」、「心柄だよ、仕方がないとお諦め」、「何だと、諦める？手前、心變りをしたな」、「あゝ、急にね、お前の顔を見たら可厭になつたよ、お氣の毒だつたね」、「何、可厭になつた？ちやア懸落の約束は何するだよ、コレ」、「その約束は海へ流して了うさ」、「な、情ないことを言ふなア、一生涯夫婦にならなくとも可いだから、コレ、切めて一年だけ私の女房になつて呉んろよ」、「オホ、またいづれ黄泉へ行つてからの相談に爲ようぢやないか」、「奴ッ、俺を欺しくさつたなッ、這畜生ッ！、起揚つて駈寄らうとする、それをぐつと引戻されてごかりと尻を突いたなりに、兩足を投出してウオー〜、犬の遠吼のやうな泣聲を揚げた。一船咄と笑ふ。

此の一場の喜劇が海賊們的末路を飾る花であつた、彼等は董が與へた解毒劑——と云つても只茶を濃く煎じた汁——に依つて追々に正氣づいて来た。さながら夢の醒めたやう見ると何の間にか犇々と縛りつけられてゐるあつと驚いたが後の祭、地團太踏んで口惜しがる。

漢法醫の用ゐる一種の劇薬が、昔から百味箆筒の中にある。それは馬醉木といふ植物、その代りに鈎吻を使用する場合もある、少量を投ずる時は不眠症、或ひはヒステリー發狂などに能

く驗くが、分量が多いと全身筋肉の力を失ひ、精神恍惚として酔へるが如く、口から涎を流し泡を噴き、遂に死に至るといふ恐るべき麻酔劑である、董は平生餘りに書籍に凝り過ぎて、固な不眠症に罹つた。で持薬として少し宛時偶に服用してゐたが、横濱へ行くに就て、その粉末劑を一壇準備して懐中して居つた。それをお梅に與へたのでお梅は聞いただけの分量を窃々酒の中に混せて、海賊們に飲ませたのが、意外の成功を收むる原因になつたのである。

西村三平はお梅と董とを平安丸に移し乗せ、海賊八人を縛りつけた儘、隼丸を本船に繋ぎ、水主にそれを操らせて、共に東へ向つた。斯くして其日は志摩御座灣の濱島まで航行を續け、一夜碇泊の上、翌日の夕刻、伊勢の大港に着いた。

此處で土地の役人に徳藏始め八人の海賊と隼丸とを引渡し、翌朝解纜したが、お梅と董は一志浦まで同船して、榎田川口の大口から上陸、直ちに松阪へ向つた。

( 二十一 )

醫學生の董は無断に飛出した廉があるので、親の手前ぬく〜と家の闕は跨ぎ難い。で兎に

あれ和歌山丸の持主を訪ねて、報告かたく自分やお梅の身上を嘲した上、出来得べくは一臂の力を藉らうと思つた。

お梅も今では木から墜ちた猿である伊豆附近でもあるなら更に便船を待受けて、八丈島へ乗出して見ぬといふ事も能きだが、伊勢くんたりまで運び去られた身の、後へ引返すにも一段の工夫を費さねばならぬ羽目になつたのだ幸ひに同情してくれる董の袖に縋つて萬事は神の導き何とかなるであらうと幾んど無意味に同行した、想へば心細い極みである。

大口から松阪までは僅の路程、徒歩でも一時間とは要らぬ、和歌山街道、熊野街道の要衝で運輸交通ふたつながら便、宇殿町といふ所に慈悲、南良の兩社があつて此處が四蘭生の御園といふ有名な古跡であることや、伊勢の海を瞰下して風色の佳いことや花岡に平田篤胤、本居宣長の石碑が建つてあることなどを一々董が説明して聞かせた、街に這入ると呉服屋と油屋が際立つて見える、お梅は始めて松阪木綿、梳油、壺屋の糞入などが此處の名物であることを知つた。

董が連れ込んだ家は十津見屋嘉七といふ、市中隨一の豪商である。産物問屋の外に海運業を兼ね、和歌山丸を始め五六艘の船を所有して、地方の海上権を握つてゐた。

ごたくと捏返してゐる店を抜けて次の土藏に續いて八疊間へ通された。程なく出て来た主人を見ると、前額のつるりと禿げた胡麻塩齧の、肉つき裕な、血色の佳い、福々しい面貌の老人是が嘉七である。

『おや、若先生、能くまア無事で戻られた、一体什麼したといふんで、驚きましたなア、甚麼も、此方から口を切らぬ中に、嘉七は驚喜の聲を揚げて、忙しく席に着きながら『實は和歌山丸の一件が、恰ど昨日になつて解りましたで、手代が態々途中から戻つて來ましてな、恁々の譯で、怪我人が出来る、若先生は其の驚ぎで、什麼なつたか姿が見なくなりましたが、兎にあれ、船を最寄の濱へ着けて、怪我人の療治手當として、私だけ急いで引返して參りましたが、いふ口上でせう、イヤ驚いたの驚かないのツて、外の者は甚麼でも、平生病氣の節にはいかにお世話になる玄庵先生の御子息、それが生死も知れなくなつたさあつては、此の嘉七申譯がない、御玄關先に行つて皺腹でも切らなけりやアなるまいツてね、昨晚などは碌々寝もしないから、大心配をいたしました、併しまアお芽出たい、私も是で一息つきましたが、一体甚麼なすつつんで』眼鏡を懸けて不審さうに顔を瞻る。

『いや、それに就きましては種々お話がございますが、その前に尊老へお引合せいたします』

と董はお梅の方を回顧つて、『此の御婦人は東京のお方で、お梅さんと被仰るが、此度私が危い命が助かつて、無事に尊老へお眼に懸られるのも、全く彼の御婦人のお蔭です、いや、私ばかりではありません、和歌山丸の仇を取つて呉れた恩人ですから尊老もお禮を被仰つて然るべき筈です』と紹介した。

『ね、仇を取つて下されたお方？お、左様でございますか、是は、能うこそお尋ねくださいました』と嘉七は會釋をしてから始めてお梅の顔を正的に視た。

未だ事情を聞かぬ、如何な素姓の女で、又た什麼いふ事が自分の荷ふべき恩誼であるか、それも解らぬのである、けれども嘉七が瞳は早くも其の美——磨き上げた江戸生粹の、きりりと縮つた肉の輝き——に打たれて、あゝ佳い女だと幾回か心に囁いた。

## ( 二十二 )

お梅は嫺雅にお辞儀をして『私しは、お梅と申す不束者でございます、此度は妙な御縁から董さまの御懇意を戴きまして、御一緒にお邪魔に上りましたやうな譯、請願お見知り置を願ひ

ます』と一通りの挨拶。嘉七はいくくと承けてゐる。

『いや、此度の災難は實に意外でございました、想ひ出して見ても夢のやうな氣がいたします』と董は遭難當時事の實から、隼丸に囚はれて以後の話、海賊全部が縛に就いたことを詳細に語つて、お梅の親切と手柄とを大いに稱揚した。

『へー』と眼を睜つて聞いてゐた嘉七が『それははや、甚麽も……驚いたことで』と感嘆してから『何ともお禮の申上げ様がございません、全く尊姐のお蔭さまで、小氣味の好い意趣返しが出来ました、いや夫ばかりではない泥坊が捉まつて見ると、奪られた品も全然手前へ戻つて來ますから、一品一錢たりとも損をせずに濟むといふもの、尊君は此の十津見屋の守護神ともいふべき恩人でござります、有難う、有難う存じます』と幾回か禮を言ふ。

『甚麽いたしましたして、お二人さんから那麼に被仰られると御挨拶に困ります、皆な御運がよくゐらつしやるから、お遣れなすつたので、私しの所爲ではございません、私しこそ和歌山丸といふ御船が通り蒐つて、彼塵事になつたればこそ、無事に助かつたやうなもの、倘しも爾でなかつた日には此の四肢を疵物にされた上、ごんな辛い思をさせられたか解りません、その御恩は返つて尊老の方に……』と謙遜つていふのを、董は遮るやうに突と口を挟んだ。



といふウエツチである。

( 二十三 )

青物を陳べた店先に立つて、墨斗の筆を抜きながら手帳へ品數を書込んでゐた辰之助は、『入らつしやい、『何を差上げますと』回顧つて。通り蒐りの外人などが、能く果物を買ひに立寄ることがある。それだと思つた。

『いや、御亭主、買物ではないよ。同伴の羽織を着た男が『私は町用取扱所から来た町用掛だがな、今此の異人さんが來なされて、八百屋の辰之助といふ者の家を教へて呉れ、私は一昨日船火事を出して沖に沈んだ亞米利加蒸氣船の者で、其節八百屋の子息さんに助けられたんだ船から上つて直に居留地の領事館に行つたもんだから、未だお禮も爲ないでゐたが、明日は外の船に乗つて國へ歸ることになつたで、一寸息子さんに遇つて行きたい、と憊ういふのだ、それで案内をして來たんだが、その息子さんは在宅かね』と言ふ。

『あゝ、左様でございましたか、それは御苦勞さまなこと……ハイ、居ります、オイ、源作

や、源作』と呼ぶと勝手から、悴の源作が出て來た。『おー、尊君、此の家ありますか』その姿を見るとウエツチは悦喜の聲を放つて、帽を脱いで、兩手を高く差擧げた。

此時辰之助は始めてウエツチの顔に睡を凝らした。シテーフ號に往つた折に何處かで見懸けたやうな男だと思つてゐたのが、急にそれと氣が注いだ。テストラに脅迫される時、立會つて通辨をした水夫だ、大勢に打擲される際、面白半分我を靴で蹴つた男だ。

おのれッ！忽ち惴然とした。が、禮に來たといふのに仍なく吃つて蒐るのも、大人氣ないど蟲を殺して、『源作、座敷へ通して茶でも上げろ』と何氣なく待遇つた。心では現在の我が敵とも知らずに、悴がその命を拾つて遣るとは、不思議にも又た可笑なものだと思つてゐる。

源作は莞爾顔でウエツチを迎へた。靴を脱がせて勝手に通すと、日本の家屋に慣れぬウエツチは怖々疊を踏んで、長火鉢の側へ妙な腰附をしながら蹲まつた。

『尊君、先日大さん有難う、私命尊君から貰ひました、尊君、神さまあります』と甲に疎らかな毛の生れた兩手を合せて、拜む眞似をして『私明日横濱離れます、長崎廻り、國歸ります、私貧乏お禮出來ません、只口上、大さんく有難うございます』と隻語ながら胸一杯の感謝を表してから『尊君お爺さん、如何になりました』と訊く。

辰之助は町用係の立去つた跡で、店から勝手に来た、恰どウエツチの背後に坐りながら、糞盆を引寄せて煙を噴いてゐる所であつた。

『おい、マドロスさん、辰之助は此處に居るよ』、ぼんと雁首で吐月峯を叩きつける。ウエツチは喫驚して其方に向直つた。『おい、尊老、おい、尊老！』叫ぶ顔の滑稽さに、辰之助は立つた腹も横に頰れて、思はず笑ひ出した。

『辰之助さん、私、大さん悪いことしました、慚かしいことある、口惜しいことある』、『何が口惜しい、人攫ひの手傳をして、咎も無ね私を踏んだり蹴たり、揚句に彼座空部屋へ叩ッ込んで餓死をさせよと爲ややつたコノ外道奴！、口惜しいもよく出来た、日本人にはな、オイ、八百萬の神々さまが憑いてござるから、手前們的やうな毛唐のへちやむくれが、甚麼所爲をしやアがつたつて、びくともする事ぢやアないぞ、見ろい此の通りチャンとお歸り遊ばして居なさるんだから……』、『アレ、爺さん、怒らずに黙つてゐてください、モシ、その口惜しいといふのは什麼いふ心ですか、父が氣焰を吐くのを和めて、源作は更にウエツチの發言を求めた。

『ソレ、その神さま、神さまの前私濟みません、貴君助けられた御恩、私大切あります、知

らない振、船から上りました、後で考へる、此處痛いですツ』とウエツチは自分の胸を膺つて『知らない振、國歸る、尊君へ濟みません、神さまの前濟みません私、皆話します、悪いこと皆詫をします』日本言葉何といひますか私國言葉、コンフェツシャン(懺悔)、此胸奇麗々々、そうしてお別れすることあります。

『ねッ、詫に來なすつたか辰之助は眉を擡がした。』うむ、流石は文明開化の國だの。

### ( 二十四 )

ウエツチは氣の荒い、旅の耻は搔捨の船乗ではあるが、了得に可愛らしい大國民の血が脈管に流れてゐる。彼は自分を救つて呉れた源作に對して、その父のことを語らず、花子のことを告げず、其儘横濱の地を去るのは、いかにも男らしからぬ仕打で、神に對する一つの罪惡である、恚う思つたで、お禮がてら一切の懺悔を爲すべく、態々其の家を訪れたのであつた。

彼は先づ黒其西哥人のテストラの秘密的職業から語り出して、幼女を買込んで土耳其に卸賣をする恐ろしい消息を告げ、辰之助父子を戰慄せしめた後花子は或る支那人と、日本人とが夜



中船へ連れて来たので、自分は其の際始めて通譯を托されたこと、それからテストラに強請つて口留金を貰ひ受けたこと、水夫仲間に残らず賄賂が行渡つたこと、源作が花子を盗み出して逃げる所を認め、護身の短銃で打たうとしたのは自分であつたこと、その刹那瀛羅破裂の椿事が起つて、自分が海に飛込んだこと、昨日聞いたところではテストラは、火に捲かれて惨死したといふこと、それらを一括して覺束ない日本語にねとくと嘸した。

父子は只驚くばかりである、今では夢のやうな其夜の危難——意外にも知らぬ背後に、這魔惡魔が潜んであつたか、と想ふと冷たい汗が流れる、併しその惡魔も日本人の義氣に立つる牙がなく、凭して佛に化つて懺悔して呉れるかと考へれば、何とも言へぬ程心地が快い、辰之助は笑つた、大満足の笑の下にウエツチを見た。

聞きたいのは、その花子を賣込に來たといふ支那人と外の一人の身許である。實は花子を自宅へ連込んでから、種々と賺し立て、訊いて見たが、素より頗是のない幼兒、誰に什麼されて如何なつたといふ事は全然記憶して居らぬ、只——怖い叔父さんが三人、舟に乗つた、打たれた——とばかり漠然とした答であつた、で肝腎の花子をいかに處分して可いか解らず、今では女房の手に預けて、吾兒のやうに守をさせてゐるのである。

此の間に對してはウエツチも明かに答へることが能きなかつた、その晩半時間許立會つたから人相や風体は恁々と知れてはゐるが、何處の誰といふ身許までは、必要がないから聞いて置かなかつたと言ふ、是も無理はない、辰之助は確と當惑した。

其處へ支那ボーイの楊潭が戻つて來た。辰之助は彼を自宅へ伴ひ還つて、手厚く世話をして遣つてゐた。シテーフ號が沈没して見れば、彼は何處に取着く袖もない身である。途方に味れてゐる中に、弗と考へ着いたのは、此の横濱に同郷の支那人で、喫茶店を出してゐる者がある事で、それを訪ねて身の振方を相談して來やうと辰之助へ告げ、此日の朝南京町を指して出掛けたのであつた。

ウエツチと楊潭は猿と犬との間柄であつた。それが偶然にも辰之助の家で落合つた。二人は喫驚した顔で睨み合つた、未だ一語も發しない。

と、揚潭の後から躡々と這入つて來た者がある。それは風装の立派な、四十形好の支那人であつた。

「御免ください」と流暢な日本語で挨拶して「私、此の揚潭同じ國、エー居留地五十八番、處安あります、揚潭大さん御厄介なります、有難う、私、始めて仔細聞く、驚くことあります、

今日お禮、御相談の爲め上りました。

『おや、左様ですかい』辰之助は席を興へて『まあ、可かつた、それで楊さんも一安心だ、さア／＼寛々お坐りなさい、是から種々と御相談いたしませう。』

ウエツチは怪訝な顔をして、慮安を噴めてゐたが『おー、汝、先日、テストラ會ひに来た支那人、子供、子供、三百兩、ツレ、賣つたことある』と急しく叫んで『尊君々々』と辰之助の袖を引いた、今の話、此の支那人あります！』

『何ッ、それぢやア此奴が花ちゃんを攫つて、賣込んだ野郎かッ』辰之助は猛然として腕を張つた。

肝を潰したのは慮安である、強い弾機にはちき返されたかのやう、忤然として跳り揚つたが忽ち障子を蹴放してはた／＼と表へ逃出した。

『奴ッ待てッ！』辰之助は續いて追蒐けた、街角の此頃新たに懸けた驛遞局のポストの前で、無手と飛蒐つての格闘、二人は泥塗れになつて揉合た。

( 二十五 )

源作も後から飛出して加勢した。慮安は逃げそこなつて手もなく捉へられ澁面づくりながら引立てられて戻つて来た、八百屋の前は眞黒な人群り、それを追拂はうと辰之助が突然水を撒く。

慮安を再び勝手に連込んで、花子事件の詮議をする事始めは甚麽の恁の遁を打てゐたがウエツチといふ證人が顔張つて居るので動きが取れず、どう／＼一切の事情を自白した、泣出しさうな顔の下から。

その自白に依ると、東京日本橋の寫眞屋澤田守節に頼んで、其手から掘出させた玉であつて守節の懇意な遊人の金藏といふ男を手傳はせ、市が谷見附で攫ひ取つたもの、親元は柳橋の藝妓であつたとかいふお梅と呼ぶ女、今は何處に居るか解らぬ——といふ事であつた。

是で稍といきさつが知れた。命を賭けて花子を救ひ出した甲斐が顯れて来た。が差向き困るのは慮安の處分である。彼は確かに人攫ひの罪を犯した男だ、日本の國法——當時は未だ新律

綱領發布前で、徳川仕來りの御定目に據つて罪を罰した——に照すと、重くて死罪、軽くして重追放に當る科である。併し彼は外國人だ、我が法律の制裁を受くるものか否かは、辰之助に解らぬ。兎にあれ町用掛に届け出でて、官の計ひに委すより外は無。

と、楊潭は甚くそれを心配して、萬望お情に穩便の沙汰にして呉れ、自分も今は外に取着く人もない境遇、便る者は此の盧安ばかりであるからと、涙の下から哀訴する、辰之助は道理だと思つた。盧安は兎にあれ、不幸なる楊の現在に同情して、借シテ一號で自分們に盡して呉れた恩誼を顧へば、無下に其の請を斥けることが出来ない。諾と領いた一言に男の肚を見せ何にも言はず盧安に楊を引渡して、先づ此方の結局をつけた。

ウエツチは是で心の重荷が下りたと悦んで、幾回もアイサンキューを繰回しつゝ、愉快に暇を告げて去つた。

その日、辰之助は委細を町の中年寄——從前の町名主は明治二年の三月廢止となり、一區に中年寄一人、添年寄、町用掛數人を置いて、町用取扱所といふを設け、行政や司法事務の下扱ひをすることになつた、是が進化して町役場戸長世話係となる——へ届けて出た。年寄は一應吟味の上、神奈川府裁判所へ進達した。

其頃の役人などいふものは、凡て朝鮮式の悠々たるもので、此の事件が東京府の手に遷つたのは、五箇月後であつた。

其の中に盧安はばた／＼と世帯を疊み、楊潭を連れて神戸に轉じて了つた澤田守節は金藏を手下に、相變らず不正行爲を續けてゐた。と金が東京府兵の手に捕はれて處刑を受けるやうになつてから、守節の尻が追々に割れて來た、其處へ恰かも花子の事件が通牒になつたので、府兵は直ちに召捕に向ふと、流石は悪黨、恣る場合に活用すべき抜穴を自宅に拵へてあつて、捕方の闖入する間に逸くも裏戸の窓から庭へ飛下り、濠傳ひに四日市河岸の方へ逃走して其儘行衛を晦ました。

是より先、辰之助は花子の親許を搜索すべく此頃開業したといふ乗合馬車に揺られて出京の上、柳橋に居たお梅といふ名を唯一の手懸に、必死と聞いて回つたが、さながら雲を掴むやうな探し物——お梅といふのは大方梅吉の事であらうが、それなれば此の春土地を引いて何處へか消れて失くなつた或ひは假れ死をしたとも云ふし、又は門附藝人になつて京阪へ上つたことも噂がある——と不得要領な答に、沮喪して横濱へ戻つた。

是非がない、これも何ぞの因縁であらうからと妻と相談の上に花子を娘分に直して、引續き

養育することにしたが、追々に懐いて来るにつけ、可愛ゆらしさが一汐の、片時も側を放せぬ家庭の花となつた。

(二十六)

お梅は伊勢松阪の十津見屋へ暫く身を寄せることになつた、暫く、此の暫くが疑問である。お梅自身では眞の七日か十日、長くて半月の間だと解釋してゐる。十津見屋の主人嘉七の言つたことが、果して信頼すべき言葉であるならば、恠く解釋するのが至當である。船の差繰、積荷の都合、只それだけなら物の半月と手間取る氣遣ひはないのだ。お梅が今にも其の船に乗つて、目指す八丈島へ行かれるものと信じ切つたのも、更に無理はないのである。併し其の暫くも、嘉七の了簡次第で長くもなれば短くもなる、甚だ的にならぬ暫くである。萬一お梅に言つたことが其場だけの氣休め——誠意を缺いだ出鱈目であるとするれば、幾んど際限のない暫くで、一年の後にするとも、十年の後にするとも、それは嘉七の自由であるのだ。けれどもお梅は那麼事を疑つて見る餘裕を有たなかつた、否、嘉七の方で有たせぬのだ。其

の日から痒い所に手の達く親切な待遇、奥の茶室一間を充がつて、起臥させ、三度の食事も心を籠めた御馳走をする、氣の毒な程の取扱ひであつた。成程董の話は嘘でない、市中隨一の豪商だけあると、お梅は思つた。頻繁に人が出這入して店の取込む様子、大勢の奉公人が立つくめに働いてゐる工合、五棟もある倉庫の龜裂一つ見せぬ白壁より、艶々しく拭き抜かれた家什の光に至るまで、凡て福の神の御宿であることを證明してゐる。家族は嘉七の吹聴どほり、三十年配の悴と未だ生若い嫁があるだけだ。悴は店の方を取仕切つてゐると見えて、顔を合せる場合が少い。里は四日市とやら、いやに氣取つた、人障りの悪いお嫁さんだとお梅は膝を突合せることになつた。その長い日も夢と流れて、數へると早や十日になる。夕飯の時は例も嘉七がお梅と膳を列べる。爾して四方山の談を交へながら箸を取る。聞けば其時に聞かれる。が催促するのも異なるもの、時が來たなら黙つてゐても先方から言出すであらう、とお梅は咏へてゐた。始めはお愛想にちよいと酌をしたのが例とはなしに夕飯のお給仕をするやうに——爲てやら

なければ、何となく場が照れるやうになつた。今夜も又たお酌だ。

『時にお梅さんや』と嘉七は外の話を轉じて、目外からお前さんに言はう言はうと思ひながら、ツヒ言はぐれて夫なりけりになつてゐたが『勢ひをつけるかの如く、猪口の酒をぐつと呷つて『八丈島行の一件だがね、彼箇は何もあつても行遂げる考かい、見合せるといふ譯にはいかないのかね』とお梅の顔に腫を据わせた。

『ね、見合わせる?!』とお梅は不思議さうに視返して『什麼してございますお船の都合でも不可なくなつたので?』と言ふ下から、早や心配が勃々と置揚げて來た。

『いや、船の都合は甚だでもなるが、實は段々考へて見ると止されるもんなら、止した方が、お方さんの利益になるやうに、まア私だけは思はれるがな第一さ、島に渡つたところで、役人が分外に嚴ましいといふから、永くは留めて置くまい、屹と追返すに極つてゐる、怒じ顔を見て本意ない別れをするくらゐなら、苦しい思をして出掛けるだけが、痴的しいぢやないか假令追返されないうとしたところで、鬼の棲むといふ海の涯だ、見る物は浪ばかり岩の穴に信天翁を拍手に暮したところが、根つから詰りはしまし、そんな事を爲るよりは、矢張本土にゐて面白思をした方が、どんなに生甲斐があるか知れやしない、の、お梅さん、悪いことは懲めな

いから、すつぱりと諦めて了つて、茲で一つ心の梶を取直したら如何なものですね。』

お梅は呆れるといふよりは、寧ろ情ないやうな氣がして、答もなく俯いてゐる。

( 二十七 )

私の爲を思つて、爾う被仰つてお呉んなさるのに、お言葉返しては濟みませんが』とお梅は稍と顔を擡げて『そりやアね、詰らないのは最初ツから知れ切つてゐるんで御座いますよ、外さまの眼から御覽じたら、成程酔狂とも物好きとも痴ども見ませうが、爾う見られても、女の道をつくさなければならぬ、つくさうと思ひ詰めた私の心も些とはお察しく下さいましな、爾う思ふのが痴なので、痴にならずとも濟む伶俐な考が、外に有るかの知れませんが、だげども私はその伶俐な考を有たくはないのです、好このんで痴になりたいたいのです、痴につて一念を貫きたいのです、貫くのが當前、それが女の道だらうと、人さまは何れでも、まア私だけには爾う思ひますわ』と最つと理窟を言つてやりたいのを、態と控へ目にして當らず障らず、ふうわりと待遇つた。

『それ、それが間違つてゐるといふのだ』と嘉七は隙さず突込んで『女の道といふと大層奇麗に聞けるが、お粧りなしの生地で言つたら、つまり片桐さんに惚れた、思ひ切れない、側に行つて一緒に暮りたい、といふだけの事だらうがの』と冷笑つて『その惚れたはまア可いとして思ひ切れないといふのが未練なのだ、未練があるから側に行きたいなごといふ慾も出る、それも先方へ行つて、望まほり末長く暮せるものなら、未練を残した甲斐もあるが今言ふ通り、島の法度が嚴重だから、三日と側に居られるものではない、して見ると夫は到つて詰らない慾で骨折損の草臥儲け、片桐さんが折格忘れてゐた所へ、怒り顔を見せて苦しい思をさせ、飛んだ罪造りをするばかりだ、そんな事なら始めつから断然と思ひ切つて、別に身を立てる工夫をした方が勝した、とお懲めするのだが、併し港に着いたばかりで、直と追返されても構はんどいふなら、まア出掛けて見るが可いさ、私ア無理に止めはしないよ』と不機嫌さうに顔を背けた。

或ひは爾であるかも知れぬ、島の事情は能く解らぬが、實際に接して見たなら、必ず那麼結果になるやうにも想はれる。お梅は迷ひ始めた、半ば失敗に歸したかの如き感じがした。

見合せるといふまでに到らずとも篤と研究して、工夫をして見るべき餘地がある。それは兎

に角、主人が急に這座事を言出したのは何故であらう、彼箇程堅く請合ひながら、今になつて突然——這座も訝しい、何か其の裏面に思慮が潜んでゐるのではあるまいかとお梅は氣が注いた、疑ひを起した。

で、その奥を叩いて、本音を吐かせて見やうと、顔に成るべく不快の色を露さぬやうに努めつゝ、愛嬌づくつた眼に嘉七を視流して『すると旦那、什麼したら可いでせう、私ア只今の所では尊老お一人を、杖柱もお頼み申してゐるのでございますから、御差圖に依つては如何とも身の振方をつけて了ひますわ、甚麼せ世間から見放されつちまつた捨小舟なんですもの』と鈎をかけた。

と、嘉七は苦もなくそれに引懸けられて『む、流石は物解りの早い江戸ッ子、よく爾ういふ氣になられたと、忽ち舊の笑顔に回つた。世間から捨てられたといふなら、私が拾つて上げようではないか』。

『わゝ尊老が？』、『引受けようぢやアないか、お前さんの身を……』、『妾のやうな者を、まアお梅は嬉しさに粧つて『お引受けなすつて、什麼なさいますの』、『知れたことさ』。

急に眞面目になつて『私もコレ、女房に死なれてから三年以來の男賸だ、出入の者も心配し

て、いろんな媒妁口を持込んで来るが、一つとして氣に入つたのは無い、其處へお前さんが見  
 ねられたのは、結ぶの神の引合せ……此嘉七にお授けになつたやうなものだ、エー眞實、此の  
 年齢になつて色の戀のといふ譯ではないが、お前さんのやうな、氣性の確乎した者が家の束ね  
 をして呉れれば、此の十津見屋がどのくらゐ助かるか知れない、の、お梅さん、寧ろの事に、  
 私の家の人になつてお呉れでないか」

お梅は笑ひながら俯いてゐる、と嘉七は後背にあつた帳面と手匣とをずる／＼と曳摺出し  
 て。

大抵お解りかも知れないが、此の十津見屋は是でもな、二十萬兩の分限者だ、ソラ、今日一  
 日の上り高でも此の帳面に附込んである通り、八百五十七兩二分三朱、嘘ぢやない、正金も此  
 の通りピツタリと合つてゐる」

手匣一杯に詰込んだ民部省の新紙幣や小判などを掴み出して、頻りと自分を廣告するのであ  
 った。

## ( 二十八 )

お梅は變な氣がした。襟ぐつたいやうな、痴的しいやうな、笑可しいやうな、腹が立つやう  
 な、儂ないやうな、一種の錯雜した感想が湧いた。有難迷惑といふ言があるが、それだけでは  
 此時の心地をいひつくせぬのであつた。

何と答へたものか、餘りのことに即座の考を据ゑる暇も無かつた。で單に嘉七の機嫌を害は  
 ぬだけの程度に止め、いづれ今晚熟考した上で、好い加減の挨拶をして、其場を濁した。

が好い加減の挨拶では濟まぬ、翌日にも分明とした返辭をせねばならぬのである。借居間に  
 引けて、床に就いてから考へて見ると、種々に心が迷ふ。

島に行きさへすれば甚麼にかなるであらうと、今日までも思つてゐたが、それも漠然とした  
 だらう勘で、果して爾うなるかならぬかは、我ながら解らぬのである。嘉七の忠告は無理がな  
 い、實際を穿つた言のやうにも想はれる、夫程の苦心をして稍と島に着いたばかりの矢先、抓  
 み出されて空しく逆戻りをするやうなら、甚だ詰らぬ事である。詰らぬと知りつゝ危険を冒し

て、無駄骨を折る必要もないのだ。

紙幣と帳面を突きつけての口説文句、呆れた仕打ではあるが、金のあるのは事實である。此の土地では真先に指を折られる素封家なることは疑ひがない。二十萬兩？聞いたゞけでも可厭な感覚がせぬ。金方萬能の世の中、此の財産を掴んだら、甚麽事でも朝飯前である。彼は先のない身、それを見送つてさへ了へば、自分の伎倆一つで十津見屋の機關を自由に運轉される。其上で島に行くも好し、役人などは紙幣束で頼孕をたゞきつけて思ふ男を島から連出して來ることも、能きない技藝ではない、爾して最う一事業、娼婆へ浮れ出して見るのも面白からう。そんなら嘉七の相談に乗つて、此の家の御内儀さんになつて見ようか！、可厭だ？、それが眞平御免だ。

併し横に首をふる、其時は既に縁の切目だ。彼が今まで釣つて置いたのも爾ういふ下心が在つたからのごとで、セツにかけて靡かせようとしたのである。それを情なく刎つけたなら、乾と御返禮が來る。船は出せぬ、平にお断り、直とお立を願ひたい——必ず恚う來る。

何とか腹を立たせずに、船を出させる工夫はないものか。被仰る通りになるから、兎に角一遍だけは片桐さんに遇はせて、と言つて見ようか、否、幾個甘い爺さんでも那頼手口に乗りは

せまい、乗らすとも乗せようと思へば乗せられぬことはないが、そのやうな罪な懸引をして、人を欺すのも好まぬ事である。

では、身を任せた上の分別と爲ようか不可ぬ、不可ぬ、斯くまで苦勞するのは麼も何の爲！、只一片の意氣地！女の操！その意氣地も操も泥にするくらいなら、始めよりして這麼辛い思はせぬ、今までの苦難を無意味にしたなら、お梅の女が廢る。

千々に胸を碎いた末に、遂に決然と意を据わた、録は何だ、浮世の儂ない娛樂は何だ、それを棄て、それを見切つて、残る生涯を操といふ一字に捧げた此の身。風吹かば吹け、雨降らば降れ、やはか、初一念！徹さずに止むべきか、浪潜る魚鱗になつても必ず良人の側へ！、

斯くして彼は誘惑から遁れた、依頼心を抛つた。となると明日まで居るのも可厭な氣がする一刻も早く此家を離れたくなつた、急ぎ手荷物を取纏めて、十津見屋の裏門から窈々と立退いた。時は恰かもその夜の九つ過ぎ。

翌る朝、下女が慌だしく叫ぶ聲に、嘉七が此の茶室に來て見ると、端然と夜具を畳み揚げて奇麗に取片附け、座敷の中にお梅が残して去つた手紙がある。先づ喫驚してそれを讀み始めた。



( 二十九 )

取急ぎ申上參らせ候、はからぬ御縁にて數々のお世話をいたゞき、有難く存じ上參らせ候、さてとや昨晚仰せきけられ候事につき、篤と考へ候ところ、いかほど難儀をかさね候ども一旦覺悟いたし候上は、ごこまでも一念をつらぬきたく、お前さまの仰せにしたがひ候はゞ、今までの苦勞甲斐もおはしませず、女の操がすたり、片桐の顔へ泥をぬるやうに相成り候まゝお氣もじさまながらお斷り申上參らせ候、ついではお目に懸り候もかへつて御機嫌をそこねるばかりにつき、失禮ながらわざと無斷に御暇申上げ候、悪からず御用捨てられたく、いづれ折も御座候はゞ必ず此度の御恩返しを仕るべく御身大切にいとひ遊ばされ候やう蔭ながら念じ上參らせ候、あら〜しと

なほ〜董さまへおあひなされ候節は、宜しくお話しくだされ度、おたのみ申上參らせ候

旦那様

梅

同じ脇鐵炮でもドンと來るのもあればスツと來るのもある。此の手紙の如きはスーの部に屬するものだ。爾も咬しめて見れば、いかにも女らしい情が籠つてゐる。涙を以て書いた傷々しい文字だ。物憐れに感じられるのが至當であるけれども、嘉七の眼には爾は映らなかつた、文意が餘りに叮嚀過ぎたやうけ、それだけ癪に障つた。何だか冷嘲されたやうな、愚弄にされたやうな、紙緋で鼻の穴をせ〜くられたやうな氣がした。

と思ふのも道理、彼は十分に己惚れ切つてゐたのだ。相手は嘗めてゐたのだ。屹と二つ返辭の、宜しくお頼み申すと、尻尾を掉つて來るに相違ない、あゝその明日が待遠しいと、躊躇しながら一夜を悶々明したのである。その鼻の尖から後足で砂、命までもと惚れ抜いた女が、無慘や一枚の斷り手紙に化けてゐる、豈夫れ口惜泣をせざるを得んやである。

失望の極端には自暴といふ危険物が潜んでゐる。剃刀、出刃庖丁、放火、投身、ぶらんこなどの御宿は此處である。併し嘉七は兎にあれ思慮も名譽もある一廉の紳士だ。女に振られたからといふの、眞逆跡を追蒐け、血塗れ騒ぎを仕出來すやうな下等な行爲もなし得ぬ。が腹の立つことは、こんな場合に於る熊公の立腹と同じ程度である。此儘指を啣へて引込むのも忌々しいと思つた、何とかして腹癒をしたい、思ひ知らせて遣りたいと傲れた。何か此方の身分に障

らぬやうな、巧妙な手段はないものかと考へた。

有る、有る、有るぞ！にたり笑つて手を打つ、下から、二番々頭の彦助といふのを呼んで委細の機密を言合めた。彦助は畏つて直ちに駈出した。

\* \* \* \* \*

松阪から一里、榊田川口の船着場、大口の海岸通に眞黒な人群り。——喧嘩だ、姦通だ、駈落者だ——と騒々騒いでゐる。

其處へ通り蒐つた女は、年頃四十餘りの粹な風采、少し縮れ氣味の髪を櫛巻にして、やけに黄揚の毛筋を突込み茶の細かい辨慶のねんね半纏に、紺絞りの細縮の浴衣、それに變八端と黒縹子の晝夜帯をぐる／＼巻にして、本天の鼻緒のついた日和下駄を素足に突かけてゐた。色は白いが眼立たぬ程の薄痘痕のある、眉の痕の青い鼻のつんとした、小柄の年増。

人蔭から伸上つて窺いて見ると、旅の者らしい女をお店者風の若い男が引捉へて、何か聲高に到鳴立てる。その側に一目で解る陸つ引、松阪の勘太郎といふのが、朱總のついた十手を是見よがしに腰に挿して、懐中手をしながら囁めてゐるのであつた。

( 三十 )

其の年増は人の背後に佇んだ儘、甚麼争ひであるかを聞くべく、徐かに耳を敬てた。

『イヤ、何と言ふても承知でけぬ、エ、ならんわい泥坊ぢやから泥坊ぢやといふたが無理かいエ、そないなことは、私知らんがな、言譯がましいこと言ふたどて、聞く耳ありやせんがな、さア盗つた品を返せ、返すことでけんなら、番所へいつて譯つけろ、コレ、ちやツちやツと行かんせ！』お店者は女の胸倉を掴んで、聲高に罵り立てる。

『呆れたことを言ふねお前さんは……』と女は裂のある美しい眼で睨みつけて『元來私が那麼事をする柄か什麼か、まア人を見てから物をお言へな、外の事なら兎に角、泥坊といふ悪名をつけられた上からは、いくら中の利かない旅先だつて、黙つて引込む譯にはいきやアしないから、お前の方で連れて行くと言はなくとも、妾の方から出る所へ出て、白い黒いの裁きをつけて貰ひませう、さア、何處へでも突出してお呉れ、エ、サ、返せと言はれたつて、盗りもしないお金や、品が返されるかね、馬鹿も休み／＼お言ひなッ』牙をた聲の肝高な調子、口惜しさ

うに身願ひするのであつた。

陸つ引の勘太郎は冷かにそれを看下してゐたが、懸て一足前に進んで「おい、ちよいと待たんせ」。若俊を制して「主は何處ぢやい」と訊ねる様子。

「おう、こりや親方はん、よいところへお出だ、私は十津見屋の奉公人彦助ぢやがな」。若俊は十手に眼を注げて、頻りと敬意を拂つてゐる。

「十津見屋の手代かい、此の女子衆は？」、「こりや、何處の者やら知らん犬の糞ぢやが、船の中で難儀をしようたのが、わらい可哀想ぢやに依つて、慈悲深い旦那が見るに見かねてな、十日程家に泊めてやらして、世話を爲よつたところが、親方はん、ごうちやいな、まア恐ろしい女子ぢやござんせんか、昨夜な、金を五十兩に、反物の十反ばかり盗りくさつて、無断に逐電をやらかいたぢや、おのれ、ごないにして遣らうと、今朝から私が鶴の目鷹の目、あつち此方と探した果てに、此所来て見ると案の定船に乗りくさつて飛ばうと爲よる所を、取捉まへて膏を絞つてゐる最中ぢやがな」。

「うむ、それでは此の女子が、五十兩に反物を盗りくさつて、逐電を……それに相違ないかい」「さよちやわい」、「太い奴ぢや！」と勘は先づ一喝した。

「こないな横道者があるぢやで、官府に手数が絶わんのぢや、コレ、若い者」と臆を突出して此の往來中では詮議もでけぬわ、番所へ引立てる、主も一緒にいかんせ」と女の腕をぐいと掴んだ。

「アレ、お待ちくださいいな」、人垣を押分けて出たのが、今まで眼を放さず窺き込んでゐた年増だ、「やア」、その影を認めると、勘は意外だといふ風で顔を瞞めた。

「親方、突爾に飛出して這座おせつ、わいをしちやア濟まないがね、此の悶着を私に預けてお呉んなさる譯にはいきませんかわ」。ちろりと流した眸に凄い程の權威——といふ程でなくとも人に迫る一種の殺氣が——あつた。如何なる人とも、什麼いふ事情とも解らぬながら。旅の女の顔には嬉しさうな色が上つた、大方その言葉が江戸辨であつた爲であらう。

「む、預けてくれこのことかい」、「爾う」、「そりやア知らん顔でもないに依つて、任せんものでもないがな、主の關り合ふた筋でもありやしないのに、預つてごないに爲る心算ぢや」勘は迷惑さうに、厄介な女に這入られたものだ、間の悪いのを啣つやうに、笑ひながらも額に入の字を寄せてゐる。

「エ、サ、關り合はないがね、まんざら知らない人でもないんだよ、知つた人だとすると、大

勢の見てゐる前でさ、泥坊だの何だのと人間の悪い騒ぎ方をされちやア、黙つて見てゐる譯にもいかないぢやないか、何、甚麽も爲やアしないよ、私しがよく聞いて見て、實際そんな悪い事を爲たんなら、直とお前さん所へ突出して了うし、でなかつたら此儘穩かに飛ばして貰はうぢやないか』

『成程』と勘は領いて『それでは任せると爲ようかい、不承無怯に引請けた』肯てお呉れか、流石は親方、解つてゐるわね』と意味あり氣に視流して『だが若い衆さん、只預りは爲ないよ、白い黒いの分るまで、さア盗られたといふ五十兩を、私の方から一時お返しして置かう、と懐中してゐた夾袋から民部省札を抜いて手渡すると取つてよいか悪いかと猶豫つてへ』ね、お立替恐れ入りますなア』と勘の顔を窺く。勘は取つて置けと眼配せする。其下から引奪るやうに受取つた。

## ( 三十一 )

金を渡してから年増は『それに親方の居る前で、ちよつと念を押して置きたいことがあるが

モシ番頭さん、盗られたといふ其の反物はどんな品もの』と聞いた。

『は、それは何であつたやら知らん』と彦助は考へて『む、爾ぢや、縮緬、縮緬、京御召と西陣の帯地、みんなねらう高價い品ぢやがな』と取つて附けたやうな事を言ふ』

『あ、爾かね』と年増は軽く領いて『モシ、旅のお方、何も念齋した、お前の持つてゐるその風呂敷包を解いて御覧な』、『い、宜しうございますとも……さア、能く検めてお呉んなは』女は自身の潔白を誇るかのやう、手逸く携帯の包を二つまでも引解いて三人の眼の前にさらけ出した。有るものは身廻の小道具類と着換ぐらゐるものが、那麽品は一點も無かつた。

『お二人さん、御覧の通り、ですま能く覺わといてください、年増は鋭い眼で覗いた。』だつてなア、内儀さん、他に隠しくさつたのなら、此處には有るまいがな』と負惜みを言ふ彦助を屹と睨みつけて『黙つておゐで！朱總の十手を差した此の親方の手に揚つた上は、最うお前の差出口は要りやアしないよ迅々とお歸りな』、『ホウ、去んでもよいかな』

不得要領ながらも結局がついたので周圍に群つた見物は激と散つて了つた、その中に二人の影が消ゐるのを待つて『モシ、旅のお方、飛んでもない目に遇ひましたね』と年増は笑ひながら側へ寄つた。

「ハイ、有難うございます、實は尊姐こんな事になりますのも種々と深い事情が……」と云ふのを制して「それは解つてゐるよ、最う何にも心配することはないから、私の家へ一緒に……ねね、お急ぎでなかつたら爾うおしよ、私の方にも聞きたいことやら嘶したいことやら、澤山あるんだから……なに直近所だよ」と意味ありさう。「左様でございますか、ちやア御邪魔に上りませう」。

二人は連立つて海岸から大口の町へ這入つた。此の難題を浴せかけられた旅の女は。言ふまでもなくお梅であつた。

跡に隨つて十町許も行く、町の中程に京風の格子造、間口は狭こましいが、奥深の土藏に母舎を打通した一構へがある。其家へお梅は連込まれた。

出て来る男はいづれも骨格の逞しい一癖ありさうな肌合で、口の聞きやうから風采、尋常の素人家ではあるまいとお梅は睨んだ。

暖簾を潜つて勝手へ通る。此頃張替へたらしい青畳に埃一つ翻してなく、重骨の障子に緞子の切抜、小囃洒として居心の好い住居である。

「おい、寅、お前金長羅さまへの御供物を皆なに分けて遣つたかね、目の出るお禁厭だつてか

ら、物は延喜だ、一片づゝでも満遍なく配つてお遣りな、ア、爾うか、アノ拔作や……オホ、拔作と言はれるのが可厭なら、最う些と確乎おしよ、お前昨夕の仕返しに出掛けると云つてたが、お止しな、ね、這度時は息を抜かないと、けちがついて仕様がなくなつちまうからさエ、貸して上げるよ、上げないつて言ひやしないがね、只棄てるんなら、運の向いて来るまで待つた方が確かぢやないか、何を愚圖つてるんだよ、眞箇に世話の焼ける男だね」。

疍走つた聲で、先づ四方へざつと一雨降らしてから「オホ、是は失禮でした、さアお座りなさい、是から寛々お話しませう」と艶々しく磨き上げた椶の如輪木、是が自慢らしい長火鉢の側へ坐をしめた。

お梅は前にお辞儀をして「飛んだお邪魔をいたします、不見不知の私しを……有難うございました」と挨拶するのを、更に熟々と見下して「お前さん、お江戸だね」、「ハイ、尊姐も何ですか、東京のお訛が……」、「そりやア有るごこの沙汰ではない、私ア是でもね、生ね抜きの江戸ッ子だよ」、「わゝッ」。

## ( 三十二 )

『ど云つたばかりぢやア解りはしまいが、私はね、深川の仙臺堀の、今は如何なつてるか知らないが、ホラ、伊勢崎町に久世大和守と被仰る關宿藩の御下屋敷があるでせう、その伊勢崎町の左官で勝といふのが私のお爺さんさ』、『あら、左様でらつしやいますか、ぢやア靈岸寺の直き御近所でございますねえ。』

お梅は唯無性に嬉しく感じた、その嬉しさを十分に言ひ表したいのを強ひて抑へて、後の談話を聞かうと勉めてゐる。

私の身上を残らすさだけ出た日には切がないが、幼少の時から随分苦勞をしてね、どうく江戸にも居られず、東海道を渡り歩いた未が、桑名に流れ込んで左様さ、すると此の家の主人と云やア立派に聞けるが、その實は壺皿と骰子一つが商賣道具の稼ぎ人、舊は藤堂さまに抱へられてゐた榊田川といふ角力取であつたのが、土俵を引いて素人名の龜吉に戻つて、此邊十里四方を繩張に些たア顔を買つてゐたんさ、その親分とね、オホ、微の生れた惚氣をいふやう

だが、双方血道を揚げて熱ぼつたれた揚句が、まア甚麼やら念が届いて夫婦になつたのは可いが、三年も経つか経たぬにボカリと死つちまはれたのには、いや困つたの困らないのツて、だげども後には大勢の乾兒もゐることだし、折格賣込んだ株を棄てるのも惜いこつたから、まア行れるか甚麼だか、一つ後家さんの腕試しをして見やうといふんで、柄にもない娑婆ッ氣を出してさ、恰ど足掛五年、恁して女世帯を張透してゐるが、死んだ親分の威光でね、私のやうなぼんくらでも大衆が阿母々々と立てゝくれるから、そのお蔭でもつて箔も落さず、川口のお駒親分だとか何だとか言はれて、こんな瘦せッぼちが大きくなつて、往來を假ばり歩かれるからオホ、世間はよくしたものさねえ。』

語り了つて得意に笑ふ、果然、彼女は、尋常者ではなかつた、意氣人を呑む眼の輝き、てきばきとした辣腕の切味にも、確かに女俠客の異つた色彩を放つてゐる。

『まア』とお梅は驚嘆の色を眼に見せて『そんなお方さまも存じませんものですから、飛んだ失禮をいたしました、東京のお生れと承はりますと、何ですま最うお懐かしくつて、それに恁いふ場合でございますから、猶更のことで』と言はうとした事が一向に口へは出ず、何故にんなに脆くなつたかと我から恠まるゝ程の涙ばかりが湧いて来る。その泪には嬉しいといふ意

味よりも、今の話が身につまされて、愁しくも心織くもなつた無量の懐が籠つてゐるのであつた。

『真箇にねね、私も覺があるよ、遠い旅の空で識つた人に遇つたくらゐ、嬉しいことはありやアしない』とお駒はその涙に眼を注いで自分もほろりとした様子である。『一体お前さんは江戸の何方なの、甚麽もその肌合がね、すつきりと脱俗がしてゐる所を見ると、矢張りそれしやの果らしいが、違ひますかね』。『よくお當になりました、お察しの通り、此の春まで柳橋で稼いでゐました、梅吉と申す仿者でございます』。『爾でせうとも、柳橋なら江戸でも目貫な色街で昔から此の土地に出た者は廢りがないといふくらゐだのに、甚麽して、又た那麽に早く見切つちまつたんだね旦那に捨てられでもしたのかね』。

『いゝね、爾いふ譯でもございませぬ只今のお嘶に種々苦勞を爲すつたと被仰いました、私も同様の境遇で、流れるに事を缺いて、とう／＼這麼土地へ流れて参りました』とお梅は凡ての事を打明けて、過去五年間の悲しい消息を語つた上、十津見屋との關係を細かに言ひ添へた而して拐帶をしたといふ嫌疑の懸つた事情は、お駒の判断するに任せ、強びて辯解も爲なんだのである。

お駒は聞いてゐる中にも、時々咳をした、それが故意とらしい咳で、側を向いては窃と眼を拭つてゐた。

( 三十三 )

『あゝ、解りました、すると何だね、詰るところはお前さんが八丈島へ出掛けて、行つて片桐さんと一緒に暮しさへすりやア、文句がないんだね』。『左様でございます』。『可し、一切私に任してお置き』。

お駒の言は直截明快、寧ろ無愛想の方である。お梅の身上話を聞いて氣の毒だとも言はなければ、恚して救つて上げようとも言はない。只——私に任してお置き——と簡単な挨拶、結論だけを聞かしてそれで済ました。

『一体お前さんは、彼の十津見屋なんぞを買被るから、那麽間違が出るのだ』と今度は問題を變へて、昔から伊勢乞食と云ふ通り、汚なくお金を貯める方にかけて、先づ伊勢者は一等だらうさ、十津見屋なんぞは伊勢氣質の悪い所だけを篩にかけて、その粉を固めて拵へ上げた身代





「、寫真だね、良人さん、こりや花坊のちやありませんか」、「だから見ろってんだ」、「見て  
みますよ」。

横濱の八百屋辰之助夫婦は、今しも花子の衣類から現れて出た小判形の寫真を取上げて、互  
ひに驚異の眼を輝かすのであつた。

( 三十四 )

其の寫真といふのは、嘗て母のお梅が澤田守節の許で映したもので、花子を抱上げた姿が映  
つてゐる、彼が此世を棄てる時に、併せて斯の兒をも棄つべく決心して、生涯の紀念にと遣し  
て置いた涙の結晶こそ、即ちそれ。

花子を連れ込んで来た時に、衣裳が餘り汚なくなつたからといふので、新らしいのを仕立て  
遣つて着せ替へた。脱殻は後の證據にと、疊んだ儘箆筒に仕舞込んで置いたのであるが、此  
の日は恰も明治三年の六月十四日、例年の如く蟲干をすることになつて、衣類や反故などを日  
に曝した。辰之助は庭へ出て其の始末をしてゐる中に、弗と眼に注いたのは、竹竿に懸けた花

子の古衣、綻びかゝつた襟の中から何やら食出してゐる物がある。不審しつゝ引抽いて見ると  
それが此の寫真——巾一寸ぐらゐの楕圓形卵色の、小さな臺紙に貼つた——であつた。

「おい、女房、是を仕舞込む時に、お前氣が注かなかつたのか、間拔だなア」、「だつて、良人  
さん、此の奥に寫真ありと貼札でも出てありやアしましいし、障つて見てちよいと硬いぐらゐち  
やア、解りやアしないぢやありませんか」、「誰だらう、此の抱いてるのは?」、「爾さねね、何  
だか分外に粹な様子をしてゐますね、素人ぢやアありますまいよ」、「といふと藝者か茶屋女:  
:む、藝者といへば倘しも阿母のソレ、梅吉てね女ぢやあるまいか」、「あ、爾いへば何處か  
彼の兒に面貌が肖てゐますよ」、「むん、爾か、早く花坊を呼んで訊いて見な」。

女房のお銀は店先に遊んでゐる花子を呼ぶべく立ちかけたが、急に坐り直して、良人さ  
ん、彼の兒に見せるのは考へ物ですよ、稍とこさど母のことを忘れツちまつて、私に懐いてゐ  
る所だのに、それを見せた日にやア直と緞が戻りますよ、泣かれて持餘すのも智慧がないぢや  
ありませんか、「それも爾だな」。

と、前に置いた寫真を再び取上げて繰回して眺めてゐたが「あッ、何か書いてあるぞッ、裏  
面に書入があるのを見落しちまつた、女房。眼鏡を持つて來い」と叫んだ。「ね、何か書いてあ

りますね、早く読んで御覧な」と急いで次の間から老眼鏡を持って来るのを、辰之助は耳へ懸けるのも迂かしさうに、文字の上へ翳して讀むと

片桐義卿長女 花子

慶應三年丁卯三月十日生

明治三年四月十七日母お梅と共に寫す、同年同月二十三日鹿兒島藩士横山正太郎安武之養女と爲る

と細かい楷書で美事に認めてあつた「あ、解つた！女房々々、花坊の身許が解つたぞッ」「ねッ、解りましたか、と、と、何處の兒ですわ」、二人は大發見をしたかのやう、驚喜の聲を揚げた。

縦令何人の胤であらうと、縁あつて我手に授かつたものであれば、その一生涯を引承けて養育して遣らうとは、夫婦の間に決せられた花子の處分法であつた。けれども身許の明かでないのが面白くない。一生懸命に育て上げた後で、不意にその親が現れて来て、さア引取りませうと言出される様な事があれば、長い間の苦勞も千日に疇つた萱、莫迦々々しい目を見なければならぬ。出來得べくは親元を突止めて、正式の承諾を得て貰ひ受けたいものだ、と志してゐた

のである。

片桐といふ人の娘で、それが鹿兒島藩士の横山といふ人の養女に貰はれたものだとするれば、差向き横山を捜し出して相談を取極めるのが、至當の順序である。と云つて態々鹿兒島まで行く譯にはゆかぬ。いづれ東京と書いてあるから未だ葦下にあるかも知れぬ。一つ當つて見ようではないか、と夫婦は協議した。

で、翌十五日、辰之助は花子を伴つて、例の乗合馬車で東京へ出た。直と突かけた所は、神田橋御門内の薩州屋敷である。

中玄關の方へ廻つて案内を頼むと、「おー」と嚴つい返辭が聞えて、一人の衣至肝が出て來た。

( 三十五 )

「エー、手前は横濱相生町に、八百屋渡世をいたして居ります辰之助と申と者でございます、少々お窺ひいたしたい事があつて、お訊ね申しました」と辰之助は背負つてゐた花子を下

して玄關先へ畏つた。

「何ち、八百屋？あゝ野菜類を商ふ者か、それならば何ちや、當屋敷に於ては出入の者があるぢやで、凡て其方へ申し附け居るぢやけん、他からまかんでた者は一切採用ならんがな、書生は突立つて脛を張る。」

「いね、御用を承はりに參つたんでは御座いません、外の事で、」「わー、」「アノ、鹿兒島藩のお侍さまで、横山正太郎と被仰るお方は、只今ごちらにお住居でございませう、實はそれを：

：、「何ちな、横山？」書生は首を傾げて考へてゐたが「む、正太郎ごんか」と大きな聲で叫んで「安武先生ならば、人の風説聞でも解りさうなもんぢや、ソレ、日外集議院門前に於て割腹なされた方ぢやが、」「わ、かつばらひなされたんで？」「ぢやごアはん、腹を切つたやぢ」

「わッ、腹を？如何して、」「外に切り様があるものか、横一文字ぢや、」「へねー」。

辰之助は眼を睜つた。新聞といふ物の未だ發達せぬ時代、始めて慙る事を知つたので意外に感じたのである、漸々事情を問糺して腑に入れてから、その切腹したといふ時日と、寫眞の裏に記してあつた花子縁組の日とを對照して見ると、僅かに三日の差があるばかりなので、一層疑念を深くした。

で、一應花子と自分との關係——花子を手許に養つてゐる原因を晰して、衣裳の衿から發見した寫眞を示し、態々出京して來た目的を告げた。爾して横山が現世に居ないものとすれば、他に親族か知己のやうな者でも有りはせまいかと尋ねた。

「されば」と書生は又首を拵つて「安武先生には森有禮ちう舎弟がおんすが、只今歸藩中ぢやで致方もごアはん、當屋敷に別懇にいたした人も居さん譯ではないが、外の者よりは一番町の鮫島ちう官員、是が最も親しう語いやはつた友人ぢやで、其處まかつて相談いたいたが可ござんそ、何ちか計ひ呉れるぢやらう」と親切に教へて呉れた。

辰之助は失望の中にも光を認め、猶鮫島の身分や宿所を聞確めて、薩州屋敷を出て濠畔を番町へと向つた。

屋敷を探し當て、一安心と想つたのは糠喜び主人の尙信、外務省の用で横濱へ出張、明日の午後に歸邸する筈だと云ふ。では又た出直して參りますと言置いて、鮫島家を立去つた。

歸濱して再び出て來るのも臆空である。幸ひ南茅場町に遠い姻戚の家があるから、今夜は其家に一泊して、明日の夕景に訊ねる事に爲ようと、九段阪を下りて日本橋の方へ足を進めた。怡かも其の日は天下の三大祭と稱へらるゝ日枝神社の祭禮日、市中到る所軒提灯や、繡綵花

の裝飾に、華やかな景氣がついて、熱さにもめげず押出す人の衣香扇影、近年に無い賑ひであつたが、茅場町に這入つて見て驚いた、此處は又た非常の雑沓である。それも道理、御神輿と花車山鉾の幾十とも知れぬ行列は、海運橋を渡り了へて今しも此の町の御旅所へ着かうといふ矢先であるのだ。

一息に門口へ達し得べき距離に其家がありながら、幾萬ともない人垣に隔てられて一寸も先に進むことが出来ぬ。辰之助は立惱んで嘖乎と眺めてゐる中に、押戻されて往來の隅に窘んだ。

『ソレ喧嘩だッ!』、『抜いたぞッ』。突然として消魂しい叫聲が起つた。『危ない、逃げッ!』、『ソレ、逃げるく』。續いて悲鳴の聞ゆる。怒濤の如く頰れ立つ人影、だ、だ、だッと踏めく機会に、人に突かれて前へ倒る。背の上にある花子はわつと啼出した儘、解りかゝる紐から這つて、投げ飛されたかのやう、動と人の足下へ墜ちた。

( 三十六 )

仆れた上へ誰とも知らぬ者が乗蒐つた。それを弾返して起揚らうとすると地上に突いた手を突然下駄で踏まれた前へ脱兎けやうと躁る、今度は首頸へ腰を落されて、瓦破と潰れる。總身の力を絞つて辛くも膝を立てると、横合から洋傘の尖で嘔と脾腹を突かれた。此の刹那の苦惱は辰之助の嘗て経験せぬところであつた。

『あッ痛、おい、静肅にしろ、押すな、押すな』と叫ぶ下から、ふつと花子の居ぬのに氣が注いた。忤然として『おーい、花坊!花坊や、花坊は、ご、ご、何處にゐる!』と聲を限りに呼んだ。

が、その聲も嘈然たる叫喚の中に葬られて、何の反響だになく、消れて了う。助けて呉れい!死人があるぞく! 凄惨なる悲鳴は泣聲に交つて、其處にも此處にも聞ゆる。

渦き立つ人海嘯に揉まれながらも、辰之助は必死となつて花子の所在を探した。探すと云つても、徒らに探さうと腕くだけで、手も足も出さず餘地がなく、右から左、後から前に押しつ押しされるだけだ。

大混亂の波に吞まれた人の頭上を透して、屹と前面を見ると、成程白刃の光が閃いてゐる。醉漢などの斬合を始めたものと推せられた。それを取締の東京府兵が制するのであらう、手鎗

の穂先と菲山笠の揺くのが見えた。

此の騒擾も知らず貌に、遠くを静かに鍊つてゆく幾臺かの山車、テケレンドンのく馬鹿囃子に續いて、蚊の鳴くやうな木遣の聲も面白さうに聞えて来る。

辰之助は嚙としてそれを眺めた。最早花子を呼ぶ勇氣もない。渾身の力は脱けて、只ふらく人浪に漂ふばかり。宛らシテーフ號から追れて海に泛んだ時のやうな氣がした。

\* \* \* \* \*

『おい、定公々々、ちよいと見や、迷子のやうだせ、む、こりや女の兒だ、あゝ可哀想に……手前、一つ聞いて見ろよ』。

御輿が御旅所へ着御して、納めの拍子木と共に見物が散りかゝる夕間暮である。茅場町鐵の渡から海賊橋——今の海運橋に通ずる阪本町一丁目の通商司前——維新前は參州西尾藩松平和泉守屋敷、當時は農商務の一部ともいふべき通商司に使用されてゐた、今の兜町一圓に——辰之助にはぐれた花子が迷子になつておろくと泣いてゐたのを、通り蒐りの二人連の男が見てその側へ寄つて來た。

是が主人であらう。年頃四五六の面長な、何處か病身らしい憔悴の見わたる此頃切つたばかりの散髪に帽子がはりの手拭を吉原冠り、越後縮の黒つぼいのに藍氣のばつとした一本獨鈷を締めて、絹の股引白足袋に石割雪駄といふ打扮、流行の洋傘を突いて扇を使つてゐる。

定公といふのが、大形の華な廣袖浴衣に茶の三尺、尻からげの赭い毛脛を出した壯俊。甚麼やら堅氣の稼業らしくはない。

『む、正に判然と女の兒でげす、風装もそんなに汚なくは無ね、眼鼻立もはつきりした佳い兒でげすせ』と定は花子の顔を窺き下して『コ、コウ、甚麼したく、連にはぐれたのか』と尋ねた。

花子は涙片手に定を仰看げて『お、お叔父ちゃん居ないの、叔父ちゃん、わ、わ、私を置いて行つたの』と歎いてゐる。

『なに？、叔父さんが置いて行つた、あア、ちやア迷子ぢや無ね、棄てられつちやつたんだ、イヤ、何處のどいつだか知らねわが、酷いことを爲やアがるもんだ、モシ、旦那、捨てられたんですとさ……何處だ、和兒は？』

『わ、私、遠いの、ガラ／＼に乗つて來たの』、『わ、ガラ／＼に……あゝ、人力車か、何方か

ら来たね、『彼方なの』と東を指して考へて又た西へ指を向けた。『ハッハッハ、それぢやア何方だか解らねわやな、名前は何といふ。』『わ、私、は、花ちゃん。』『花ちゃん？ 佳い名前だ。だが家が知れなくちやア困る、旦那、什麼しませう……や、耳所に怪癖をしてらア。』  
憐れむべき花子よ！ 斯くして彼は又た日影冥き涙の谷に突墜された。

( 三十七 )

旦那と呼ばれた男は、西に残る夕映の光に花子の姿を熟々と眺めて『む、こりや擦過いた傷だ、衣服は塵埃だらけになつてらア、ハ、ア、顛んだんだな』と考へてゐたが『寢公、ちよいと其邊の藥種屋に行つてな、赤膏藥か何か買つて來い、可哀想になア』と手拭の端を口に濡して、顛顛の邊に流れる血を拭いて遣る。

姿が駈出した後で『花ちゃん』と優しく呼んで『佳い兒だから泣くんぢやアないよ、その叔父ちゃん所の所へ是から連れて行つて上げるからね』と賺し立てると、嬉しさうに點頭いて啼き歇んだ。

『とは云つたものゝ、何處の叔父ちゃんだか知れなくツちやア、送つて行きやうが有りやアしない、困つたもんだ』と眉を寄せて『花ちゃん、和兒に阿父さんが居るかい』と訊くと、少々な首を掉る。『おや、居ないのか、阿母さんは？』

花子は甚麼答ふべきかと迷ふものゝ如く、愛らしい眼を肝然と瞬つて、それから又た俯いて了つた。『居ないのかね。重ねて訊いたが送辞をせぬ。見るとシク／＼啼いてゐる。』

母ありや？ 極めて簡單な問。それが彼に取つては餘りに大問題である。眞珠に似たる一雫の涙、その涙を以て答へるより外に、過去半年間の悲惨なる運命を説くべき方法を知らぬのである。否、鏡よりも淨くして且つ瑩かなる穉心の面には、現在去來の影を映すだけである。彼は過去の一切を忘れた。愛の羈のいかにして絶たれたかを忘れた。恐るべき魔の手に囚はれて如何なる憂目を見たかを忘れた。何様の人から人へ轉輾されたかも忘れてゐた。けれども忘れられぬことがある。忘れてゐても時として思に映る物がある。それは外から來る影ではなく、内から射込む強い光線！、懐かしい母の露である。母といふ一語の響はいかに彼の少なき胸を打つたであらう、靡げなる記憶は、此の刹那に忽ちに呼び醒されて、温かなる懐中の昔戀しく其人何處にと無き幻を逐つて、孤なる今の我を悲しむのであつた。

「あッ、飛んでもないことを言出して、又た泣かれつちまつた、可しく、泣くなく、その阿母さんにもな、今に遇はして遣るぞ、ア、く、何處の子だか知らねわが、可哀想なこつたなア、頻りと哀れを覺れたらしく、背を摩つて劬はつてゐる所へ嵐が駆戻つて來た。

「さア、買つて來やした、アハ、尊公も餘程子煩惱で、それに好奇と來るから堪らねわや」だッて是を見過しちやア行かれはしないぢやないか、さアく、痛い所をお出し、叔父さんが癒して上げるから、最う可い〜」。

手逸く膏藥を貼りつけて遣つて「おい、崙公、手前乗られたんだなんてわが、爾ぢやないよ怪我をしてる所から泥塗れになつたのを見るてねと、何でも先刻の騷擾に連にはぐれたらしいせ」。「爾ですかなア、大勢の怪我人があつたてわくらるでげすから、迷子も出る筈だ、エーと厄介だが仕方がない、此頃出來た町用取扱所へ連れて行つて渡して來やすかな、さア私と一緒に來な」。

崙公は無造作に花子の手を曳いた。それを慌てゝ引止めて「おい〜不可ねわ〜、自身番なんぞに連れて行つた日にやア、此の祭の取込最中だ、どんな目に遇はされるか知れたものぢやアない、崙公、ちよいと其邊から駕でも人力車でも頼んで來て呉れ」と奪ふやうに花子を引

寄せた。

「わ、駕を？如何なさるので」。「家へ連れて行く」。「お止しなせねな、後が面倒だから」。「お前の知つた事ぢやアない、何でも可いから早くしな」。「へエー」。「寔は憫れた」。

斯くして花子は、その人に抱かれ、駕で南へ伴はれた。是が新富町の新島原遊廓、中萬字樓の主人善十郎といふ者であつた。

( 三十八 )

今の京橋新富町の全部は、當時吉原と相對して南の桃源郷とうたはれた遊廓であつた、許可になつたのが明治元年京都の島原に倣つて新島原と唱へ、周圍に濠、東西に大門を設け、街を劃つて松が枝、吳竹、梅が枝、櫻木、八重咲、初音、千歳、青物など、優しい町名をつけた。妓樓は大小併せて百數十軒、市中南部の客を吸収するので、吉原に譲らぬ繁昌であつた。此所の名物は簪と菓物で、中通に列ぶ店の呼聲が一つの景氣を添へたものだ。客種の多くは町人で武家は比較的少かつたといふ、それでも時の大藏少輔であつた伊藤博文や、造兵寮頭の井上馨

なごが屢々豪遊を試みた逸話の存つてゐる所を見ると、官吏社會の遊び場所であつたことが想像される、簡程の色街も明治四年に吉原へ合併となつて今は跡も止めず、纔かに櫓下藝者の名にその面影を偲ばせるのみだ。

中萬字屋は梅が枝町の太籬であつた。抱妓も呼出新造附の貳兩二分から、座敷持の壹兩、上玉揃ひの三十幾人といふ至盛の花を握つて、家を闇に浮れ来る色餓鬼の喜捨錢に、めきくと身代を肥やしてゐた。

善十郎は果報者と同業者から羨まれる程であるが、唯一つの不足は子種のないことである。是が例も女房お仲との係争問題、良人さんは身体が虚弱いからだ、否、汝の畑が稔確である故だと晩酌中に口角泡を飛ばして激論するのであつた。

いかにも、善十郎は多病である、人柄が稼業に不向の好人物で、情深く義理堅いところから、娼妓などが親のやうに慕つてゐる。此の人にして這麼に弱いのは什麼いふ祟か、成らば身代りになつて上げたいと、部屋では絶えず噂に上る。

恰ど此の日は店の人——樓丁の一種——の寛公を伴に祭禮見物に出掛けた歸途であつた。驚で花子を連れて店の淨め塩を跨ぐと、さながら黄金の槌でもお土産に持つて来たかのやう、未

だ碌々事情も話さぬ中から、女房のお仲はいきなり抱上げて頬摺をする、接吻をする、果は抱いた儘部屋を飛出して何處へか行つて了つた、聽て女房は戻つて来たが、花子の行方が知れなくなつた。さア大變と探して見ると、二階から三階、花魁の手から新造、新造の懷中から鴉婆の脊上にまで轉々され、樓中さめき立ての大歡迎、花子は兩の袂を菓子やら果物やらに膨らまして、莞爾しながら搜索隊に發見されて来た、是には善十郎も驚いた、今に此の兒は可愛がられ死に殺されて了うだらう!

『なア、お仲、寧ろのこと拾ひツ放しに爲ちまはうじやないか』  
翌る日内所の部屋で、善十郎は脂下る煙管の相好を頼しながら、欣々然として女房に相談を始めた。

『爾ですともさ、折格お授かりになつた寶物ですもの、他人に奪られて堪るもんですか』  
お仲は花子を膝の上へ乗せて綾しながら、餘念もなくその顔に看恍れてゐたが、一も二もな

く同意して了ふ。  
『アハ、虫の好いことを云ふ、人に奪られるもないもんだ。此方が奪上げてゐる癖にさ』  
と善十郎は笑つて『ちやア、官府へ届けたり何ぞするのも面倒くさいから、手数は抜きにして



家の子に爲ると定めツちまうせ、人が聞いたら遠い親類から貰つたとか何とか、好い加減に言つとくが可いせ。』

『アイヨ、だが嬉しいね、妾が一生懸命に鬼子母神さまへお願ひ申したお蔭なんだよ。』  
『なに、爾ちやアね、俺が拾つて来たからだよ。』  
『まあ、御覧なさい、此の眼色なんぞの可愛いこと、云つたら、全然難人形のやうだから……』  
『そりやア爾さ、手前のやうなお多福たア達はアな。』

妄らない争論にも十分の歡喜が溢れてゐた。慙くして花子は中萬字の人となつた。

(三十九)

伊勢松阪の豪商十津見屋の店先へ、一荷の長持を昇ぎ込ませた、お駒は、恰かも今、番頭の彦助と舌戰最中である。

『ちやア何かね、甚麼しても主人と遇はせる譯にはいかなと云ふのかね。』  
『左様ぢや、今忙がしい所ぢぢでな、用があらんしたら又来てくだんせ。』  
『忙がしくつて遇はれないといふなら』

遇へるまで待たうぢやないか、ナニ、明日になつても、構はないよ、明日が遇へぬなら明後日明後日が遇へぬならその又明後日、一年かゝつても十年経つても、私の方は甚麼せ遊んでゐる身だ何なら一生涯、此の土藏店の立腐れになるまで、此處まで待ち申ませう。』  
『ね、待つ？そないなこと爲れては、わらい迷惑ぢやがな。』  
『迷惑なら早く遇はせる算段をするさ、おい、やん八、家からお握飯と蒲團を持つてお出で、今夜は此處にお泊なさると爲ようよ。』

此の月並の威嚇文句も、相手が相手だけに存外の効驗があつた、主人の嘉七は女親分お駒と聞いて、大方お梅の仲裁に來たのであらう、遇へば面倒だ、体好く追返せと逃を張つたのであるが、慙う出られて見ると御勝手に言ふ譯にはゆかぬ。それに何やら得体の知れぬ長持、多少の不審も混つてゐるので、一番々頭の信七といふのへ含めて、御用の次第に依つてはと訊ねさせると、實は金儲の御相談に上つたのだとの返辭。そんな事なら何も木戸を築かせるのではなかつたもの、と打つて變つた待遇、直と座敷へ通して面會した。

お駒は遠慮もなく卒然と上つて來た同時に件の長持も、乾兒二人に吩咐けて、がたびしと座敷へ昇込ませた。

『旦那さま、アノ私はお聞及びでもございませうが、女子の癖に飛んだ道樂が病、皆さまの御』

最負に絶つて、まア甚麼か恁か世を渡つてゐるお駒と申す變り物でございます、願請お見知置を」と意外の優しい挨拶。

嘉七はその顔と長持とを七分三分に眺めて「あゝ左様でございますか、つひ御見蕪れ申してな何處のお方やら知れんものちやで、店の者が何やら無調法を申したさうな、イヤ忙がしい時には能く有るやつで、例でも若い者を叱りますちやて、ハ、ハ、ハ」と濁してから「時にどんな御用向ぢやな、何か金儲の御相談にお越しなされたとやら承はつたが……」。

「ハイ、それは外の事でも御座いせんが、旦那、實はね」とお駒は背を屈め氣味に、首を突出して「私の知合のお方で、津藩の立派なお武家さまが、此度政府の御政治向が變つたに就て御屋敷の御勝手向も自然改革とやらを爲さなければならぬやうな事になつて、代々傳はつた、寶物をお拂ひになるんで御座いますが、その中で一つ手放すのが惜しい品があるんで、成らうことなら夫を賣らずに、抵當になりと入れて金を借りたいが、お駒、お前に心當りは無からうかと恁う被仰います、否、無いことは御座いせんが、甚麼いふ品ですと尋ねますと、眞箇に不思議な、そりやア最う、實に奇妙奇烈な寶物でございますので、私も喫驚しました様な譯でね、恁ういふ物に金を貸す家は滅多にありはしないが、十津見屋さんなら、有餘つてゐら

つしやる御身代ですし、それに骨董や何かに眼が利いてゐなから、屹と相談に乗つて下さるだらうと思つて、それで唐突に窺ひました」。

嘉七は眼を圓くして聽いてゐる、不思議とは何を意味するかと、未だ見ぬ先から好奇心を躍らすのであつた。

所が尊老、そのお方は此頃酷い工面で遺線してゐる最中ですから、借りる事は借りてもなか／＼請出される氣遣ひは御座いせん、屹と期日になつて流して了ひます、さア、此處が突目此方の手に入りさへすれば占めたもので、直と五千や一萬の金を儲ける工夫も私の胸にありますが、旦那、什麼でございます、利益は二割だけ私にお呉んなさるとして此の品を引受けてくださいませんか」。

(四十)

お駒の癖に十分釣込まれた嘉七は、さも不審らしい顔をして「そりや一体甚麼な品で？不思議といふのは如何いふ事ですか」と訊く。

「それは人形でございますの。」「ね、人形!? ハテチ。」「只人形といふだけなら、珍らしいことも別に有りやアしません、其の人形に奇妙な機關がしてあるんでございます。」「ホ、ウ、奇妙といふと?」

お駒は愈々眞面目になつて『まあ、ちよいと見た所では春長が人間並に出来てゐるだけで、異つた點もありませんが、能く見ると、髪の毛の生れ際から眼の工合、唇の色合から眞白な齒、肉つきといひ、膚理の緻かなところまで、眞箇の人間と些もと變りはありません、それにね、旦那、一つの不思議は凝然と觸つてゐると、何處ともなく體温が出て来て、全然生きてゐる五体でもあるやうに思はれます、世間には人肌地藏といふのがありますが、人肌人形といふのは未だ聞いたことは有りません、何と妙ちやア御座いませんか?』

「ちよつとお待ち」と嘉七は手を振つて『お話中だが、そりやア男か? 女か? ごつちだね。』『ね、女ですともさ』と言に力を入れて『爾も素敵な美人ですよ。』『ね、女!、爾か? 嘉七は鶴の啼くやうな聲を揚げて、にや〜と笑つた。』

「不思議はそればかりではありませんよ。」「おや、未だ有るのか。」「是を拵へた細工人は、何でも長崎邊の名人で、西洋にも長いこと行つてゐた切支丹莫天連の魔法使ひであつたさうです

がね、それがソノ何で御座いますとさ眞言陀羅尼ペーロシヤアの魔法を吹込んで、三年要つて拵へたものだけに、恐ろしい一心が中に籠つてゐるものと見えて。」「む、む、誰でも其の人形を見る前に、平生想つてゐる女の事を心に念じて、三遍その名を唱へてから眼を肝然と開いて見ると、什麼でございます、旦那、人形の顔がその女に全うつし、寸分違はぬ姿で動くといふぢやありませんか?』「ね、そ、そ、そ、そりや眞箇か、實際か?』「い、ね、そればかりでは御座い

ません、其女の聲色で口を聞きまますとさ。』『へ〜』  
嘉七は此のお伽話めいた怪譚に、子供らしく全然魅せられて了つた。眼を睜つて、拳を握つて漸々前へ乗出して来る、科學思想の幼稚な時代、斯るローマンチックな物語は能く無學な人々に信じられたものた、而も嘉七には此の場合慾といふ物が手傳つて、阿房になれと嗾しかれてゐる。

『ですからさ、旦那、此品に金を貸しつけて、質流れにして了つて、此方の手に取揚げてたら私の名儀でもつて方々を持廻つてさ、見世物に出さうぢやありませんか、それこそ掴み放題の金儲けが出来ますせ。』『なアる程……シテ幾千借りたいといふのだい。』『左様さ、三月縛りで三萬兩!』「わ〜ッ!』」

嘉七は喫驚して反かへつた。それをお駒は冷かなる笑の下に視流して、天下に類のない寶物だもの、それくらゐの値打はたつぷりでさア、貸してお遣んなさいよ。

「だつてお前、そ、そりやア法外だ、切て三千兩とかいふのならばなア。」「三千兩？、吝だね、でも先方ちやア濁り切つてゐる所だから、それで話がつくかも知れないが、屹と三千兩、出してお呉れなさるか。」「まア、それも見た上の相談だ。」「ちやア御覽に入れると爲ませうさア十津見屋ん、尊老が平生想つてゐなさる女の名を唱へたりく。」「は、私が……ハ、ハ、ハ、云はれても外に……仕方がない、ドレ、亡くなつた嬢アの名でも唱へようかな。」「

大事らしく眼を瞑つた、その間にお駒は立揚つて、長持の海老錠をビンと脱した。」「さア、よござんすか、開けますよ、出ますぞ。」「ばたりと蓋を刎ねる。

途端に嘉七は伸揚つて怖々窺き込んだが、忽ち「呀！」と驚いて飛退いた。中から現はれたのはお梅である。

( 四十一 )

「旦那、今日は……御機嫌宜しう」お梅は靜かに長持を出て、嘉七の側近く坐りながら「彼の節は御厄介さま、此度は又た飛んだ御相談を持ち込んで相済みません、何卒宜しく」と凄じ程やわのある眼で、ちろりと睨んで、右の手を突袖にツンと横を向いた。

嘉七は呀然と口を開いた儘、惘れに呆れて眺めてゐる。狐が今落ちたといふ顔色

「旦那、イヤ十津見屋の御亭主、お駒は冷笑つて『そんなに喫驚するにも及ばないぢやないか死んだ嬢アの名を唱へようなんか、体裁のいゝ事を言つときながら、口の中でムニヤ／＼の惚れた女を念じた効験は現金、内儀さんに爲ようとまで血道を揚げたお梅さんが、お誂へ通りヒヨクリとお出まし遊ばしたんだもの、さア懸値のない眞物へお眼に懸つたら、最う何にも文句はなからう、三月縛りで三千兩、耳を揃へて借りませうかね。』態度はがらりと變つた。

「チヨ、チヨ、戲談言つては不可ない」よ嘉七は狼狽して「ひ、人を、ば、愚弄にするにも程がある、不思議の人形だの何だのといふから、甚麽も訝しいと思つて、眉に唾で聞ふてゐたら案の定、飛んだ女を種に使つて、此の十津見屋へ押借に來なすつたんだな、おい、お駒さん、お前も女親分だとか何だとか謂はれてゐるお人だから、些とは眼鼻が利いてると思つたら、案外だね、趣向に事を缺いて、這摩手長猿を箱入にして持つて來なさるとは、餘り智恵が無さ過

ぎる、此の貨物ぢやア、どんな香具師でも二の足だらう、まア十津見屋は御免を蒙る、足下の  
明るい中にお持歸りを願ひませう』と虚勢を張る。

『何だとい、持つて歸れッ?』お駒の眼はきりりと釣上つた。『御大層もないことをお言でない  
よ、店から大きな聲で怒鳴込んだら、此の十津見屋の暖簾にも關はるだらうと氣を利かして、  
故意と人形仕立の趣向にして、何にも言はせず此の長持へ納めて遣らうとしたソノお情を踏附  
に、人形の機關を打壊さうといふ了簡なら、此方もその氣で蒐つて上げよう、おい、禿ちやん  
柿の種、お前はよくも此の女に泥坊の悪名をおつけだね、それも切めて爾らしいと思はれるだ  
けの形でもあることか、夢にも覺わのない無垢の身に泥を塗つて、振られた怨の仇討を爲よう  
といふの、ア、愛想が盡きて物が言へない、エ、サ、それに違ひがないよ、何と云つて此のお梅  
さんを口説いたか、お望となればその時言つた事を本人の口から嘶させるから、お前の息子と  
嫁さんを此處へお呼び、ソレ、呼ばれまい、呼ばれたら好い切晒したらう、それとも達て盗ま  
れたと言張るなら、私と一緒に此のお梅さんと連立つて、町會所へ行かうぢやないか、いづれ  
お白洲の菰の上で、今度の一埒を打ました上、アノ番頭の彦助といふ奴へ吹込んで、お手先衆  
の金五郎へ袖の下を使つて、此の子へ無實の罪を着せた事から、私から五十兩を立替へさせて

杜騙も同然の猫糞にした事まで、一つも残らで申し上げてよ、此の十津見屋を叩き潰して、べ  
ン／＼草を生やさせて遣るから爾う思へッ、さア、禿、一緒にお出ッ!』  
痛快に罵倒した。言々皆炎、觸るゝ物を焚き盡さずんば止まざる氣焰の下に、嘉七はグーの  
音も立てばこそ、蒼くなつて顫ひ出した。

\* \* \* \* \*

お駒の奇襲は豫想以上の功を奏して嘉七は脆くも白旗を揚げた。降伏の條件はお梅に對して  
詫状を差出すこと、お駒の立替金を即座に返すこと、持船一艘を船頭附の儘一ヶ月間お駒に貸  
渡すること航海中の費用一切は凡て十津見屋の負擔たるべきこと、——是であつた。  
七日許の後、紀洋丸といふ千石積の和船がお駒の手に渡つた、一月を支ふべき糧食薪水等を  
積込んで櫛田川口を解纜、直ちに伊豆七島へ向つて進航したが、無論お梅が乗込んでゐる、お  
駒も五人の乾分と共に同乗することになつた。

(四十二)

お駒は何處までも江戸子式で行つた。お梅に對する同情は口よりも行、お氣の毒だと慰めもせぬが、その氣の毒と思ふ心を實際の上に活動かせて、ときばきと處決けてやつた。十津見屋の喉首を押へつけて、左から左に船を出させたところなどは、竹を割る利刃をその儘、お梅は傍で見てゐる、一時に溜飲の下るやうな思がした。

是だけでは猶満足が出来ぬ、航海の途中萬一の事があつて、眼指す島に着かれぬやうなら、佛造つて魂入れずだ、甚麼せ世話序に島まで見送つて上げよう、妾も年中ぶらぶらと遊んでゐる身、遊山がてら異つた島を見物するのも面白からうし、又た都合に依つては東京と名前替の故郷へ廻つて、親仁の墓詣りもして來たいからと、お梅が辞退するのを刎つけて、自分も其の船に乗る事にしたのである。

幸ひにして島へ着き得るとしても、思ふ情郎の片桐に遇うことが能きようか、或ひは察しない島役人が、嚴ましい錠を楯に情なく追返すやうなことはあるまいか、追返すといふ程でな

くとも、面會を拒みは爲まいか、面會が協つても同棲したいといふ望が空しくなりはせぬか。是が嘉七の口から注意された時に自分の心に起つた疑で、且つ迷、且つ煩悶であつた。

船に乗る前には是をお駒に噺した。爾して其の見込を尋ねた。とお駒は——何だい、そんな妄らないことを今から氣に病む人もないもんだ、遇はせぬなんて吐したら毆飛ばせば可いちやないか歸れと言つたら、お臂に根が生ねたとお言へ——例の調子で一口に消なしてしま。自分に取つては重大な問題ではあるが、お駒は石鹼の泡沫ほごにも思つてゐない、飽までも突貫主義である。是に勵まされて其後は再び言出さなかつた。

乾兒は龍三、八太郎、乙吉、竹之助、豊松と呼ぶ究竟の壯漢、成程此の手們ならば鐵の扉も破りかねまじく見わた。それに船頭水主十人許、お駒の氣ツ腑を見せて、十二分の行渡をつけであるので、いづれも溢るゝばかりの勇氣、その故で船脚も素敵に早い。

お梅は絶えずそわ／＼としてゐた。鳥も通はぬといふ絶海の孤島、世の人は鬼でも棲んでゐるかのやうに想つてゐるけれども、其の鬼は却つて爾う想ふ人の世に棲んでゐるのだ、罪と虚榮との腐れた空氣に包まれた賑かな巷がそれだ。自分はその鬼に惱まされた、血を吸はれた、心を搔取られた、生み殺しみの苦痛をさせられた。今その魔界を遁れ、望の岸に向つて進みつ

とある。艦の方に吼ゆる波は執念く追かける浮世の影であらう、それを砕いて、蹴散らして、絶望と煩悶の残る泡を後へくと送り返す。舳に跳る潮は、我を迎ふる神の使か、きらめく日影を浴びて、平和の光に幸あれと諷ふ。斯くして此の船は懐かしの島に曳かれて行くのである。其處には慰藉もある、愛情もある、家庭もある、安心もある、歡喜もある、新しい命もある。とお梅はこんな風に思つては、希望に満たされた眼を睜つて、渺々たる前途を眺めるのであつた。

お梅の心の長閑なるが如く、海も長閑な日和續き、無事に下田の港に着いた。此處で二日許碇泊の後、島への水先案内を備ひ入れた、針路を東南に取つて、神津島に寄港の上、翌る日八丈島に向つて直航した。

(四十三)

八丈島に赴くには、神津島から三宅島に渡つて、風待をするのが例で、餘程の好日和でなければ出船が能きぬといふのは、萬一氣象を見そこなふと、航海者の最も恐るゝ黒瀬川に捲込ま

れるからである。

黒瀬川とは漁夫社會の慣用語で、實は黒潮の事である。赤道轉向海流の一で、本邦の南を流れるのが、その主派と目され、伊豆七島が其の流域中に屬してゐる。黒光の潮流で速度一時間七八里、過つて此の波に卷かれようものなら、いかなる船舶も木葉の如く押流され、生きて還れぬものとしてある。

幸ひ下田で備ひ入れた水先案内者が老巧の船頭であつた爲め、此の危険にも出會はず、巧に風順を利用して一日の中に八丈島に達することができた。

お梅が幾んど生涯にない程の嬉しさを感じたのは、島の西北に屹然として突立つた、八丈富士が、紫泥色の摺鉢に似たる姿を、望遠鏡のレンズに映した時である。あゝ彼所にこそ我が夫——と思ふと性しくも胸が躍る。それを秘して平氣らしくつくろふのを、お駒に看透されて手痛く擲りつけられ、頓かに初心の娘にかへつてぼつと顔を紅くするなど、着港前の一時間は、一船擧つて小兒のやうに浮れ立つたのであつた。

此の島は神津島から東南に三十六里餘、北緯三十四度四十七分半といふ位置。地勢は東西二里半、南北四里、周圍十里十三町餘で、伊豆七島の最大なるものだ。全島の地質は火山噴出の

焼砂から組成つたもので、その一部を除くの外は植物の生育に適せぬ。氣候は寒中であつても華氏六十度、綿入を着る者がないくらいで、櫻と桃は二月の末に花盛り、茄子や蕃椒は、嚴寒の頃、青葉の中に美事な實を見せてゐる。

部落は大賀郷、三根、末吉、中の郷、檜立の五箇村、外に小島と青が島とが附屬してゐる。港は三根村附近の神港、大賀郷の八重根港と二箇所あるだけ、その外は四邊斷崖を以て圍まれ船を着くべきが場所が無い。

目下の人口は九千九百餘、戸数が千六百、田畑を合して四百五十餘町歩といふが、明治初年は三割方も少かつた産業は主に漁で、農が之に次ぐ、女子の業としては養蠶機織ぐらゐなものだ。

紀洋丸は八重根港から這入つて、前崎といふ砂濱へ乗着け、一同此處から上陸したが、さて一向に勝手が知れぬ。

何でも家の在る方へ行つて、それと尋ねたならば片桐の成行も解るであらうと、天竺桂や赤揚の茂つた林の中に狭く透つてある小路を辿つて行くと、五六町許の先で二三人の女に出會つた。

島女が誰一の誇である長くして黒い髪を、島田らしい形にして、西の内細く束ね、花篋の蔓巻を絞にした黒木綿の裾短かな殺袖衣に、廣さ尺許の麴芳染にした帯を締めて、木綿二巾の前掛をかけ、鉢巻した天窓の上に水桶や青物籠を載せて、軽々とそれを搬ぶ、こんな風俗は神津島でも三宅島でも見て來たのであるから、左程物珍らしくは感せぬが、その色の白いことだけは他に類がないので、お駒もお梅も霽しく看惚れるのであつた。

『アノ姐さん、ちよつと伺ひますがね、此の島に流されて來た人は何處に居るんでせう、それを教へて下さいな』。

お梅は先づ問ひかけた、が、其の言葉が通せぬらしく、女們は不思議さうに顔を見合せてゐる。

( 四十四 )

新島原の中萬字屋に拾ひ揚げられた花子は、兎も角も幸福であつた親に離れ家を喪ひ、人の手から手に投げられて、あらゆる憂目を見た彼に取つては、必ずしも幸福とは謂へぬが、風雨



の管を遁れて瑠璃の鉢に移し栽えられ日影燦かな窓の下に飾られたけが安全な新境遇を得たのである。

けれども彼には過去の悲哀も現在の怡樂もない、一去一來の境遇、凡で無意識である、運命に反抗しようとするればこそ、苦痛も生ずるのであるが、彼はその力を有たぬ、いかなる壓迫にも服従する、笑つて受ける、何等の苦痛も自覺せぬのである。今の幸福に對してもその如くである。何の爲め此の家に來たのか、何故に多くの人が自分を憐れくまで、可愛がつて呉れるのか、それすら意志の外に措いて、只餘念もなく嬉々として遊んでゐる。喩へば草花の椽の下、石の蔭、荊の中、その所を問はずして、自在に舞勺ふに異ならぬ。天真爛漫の神の使を其儘の無心、そこに一汐の哀れが潜んでゐるのを、誰あつて酌取る者は無かつた。

此の樓に濱扇といふ花魁がある。有名の手取者で玉の大關、長い間のお職の位を張つてゐたが、此の女が頗るの小兒好で、花子が來てからはお客もそつち退の可愛がり様、絶えず部屋に呼込んで現を抜かして弄り廻すので、鴛婆から叱言を喰ふことも屢々であつた。

濱扇の馴染で横濱の生糸商伊三郎といふのがあつた。暫く遠のいてゐたのが、其歳の九月八日の晩、風雨の眞最中に顔を見せた、商用で出京したのが、此の天氣であるから歸濱を見合せ

たといふ事で、花魁の部屋に小鍋立の味な寸法。

『だが、よく來ておくんなんしたわね』と濱扇は鼻紙で鍋の火を煽ぎながら『花のさく日の千度よりもつて、古くから爾う言ひなますが、眞實こんな晩に來てくんなんすのが、染々嬉しうおつすわ』。

『ハ、ハ、月並のお世辞なら廉く仕入れて置かうせ』と伊三郎は笑つて『昔から廓で心もちの好い物は、流連の晩に降る雪だとしてあるが、雪たア違つて、こんな風雨ちやア、折角來ても寝つかれアしねせ、眞實に騒々しい風だな』と耳を敬てる。

戸外は轟といふ風。大きな三階造りの家も空跳る魔神の蹄に蹴られて、みしくと転るばかり、窓には礫の如き雨のばらりと鳴る。

『眞に狂人染みた暴れ方さまです、是ぢやア方々に被害が出来ることござりいせう』、『む、出來るとも、今日東京へ來て聞いた話だが、何でも越中島で調録があつて、天覽に供へる都合であつたのが、朝つから太陽さまが眞紅になつて、全然銅の金盃でも見るやうであつたから、今日は屹と天變があるに違ひないといふ事を、陰陽博士の阿部晴明……といふのは昔の事だが、天文係から爾し申し上げたもんだから、急にお見合せになつたといふ事だ、そのくらゐだから

今夜の暴風はコリヤ餘稍甚からうせ、ア、米の値段が飛ばねば可いな。『オホ、馬鹿らしい、此の里に來さんしてお米を氣にしてお在なんす、何ぞますね。』『アハ、どうく内兜を見られて了つた。』

其處へ花子が新造の若菜といふに連れられて、ちよこくと這入つて來た。

『おや、花ちゃん、よく來なました、さアノ若ちゃん、お菓子をお遣なんし、濱扇は飛着くやうに抱き寄せた。』

『ホ、恐ろしい可愛い、兒だな、全然お雛に魂を吹込んだやうだが、花魁、こりやア樓の兒かい？』伊三郎は猪口を把りながら莞爾に花子を顧みた。

( 四十五 )

『いね、爾ぢやアおつせん』と濱扇は膝に抱き上げた花子の頬へ吻接をして『花ちゃん、今度兩國へ連れて行つて上げいせう、虎と象の見世物が來いしたとき、面白いことでおざいりせうねね』と餘念が無い。

花子は什麼してか、樓婦のお高に懐かなかつた。それが不思議にも此の濱扇がお氣に召して母のやうに慕つてゐる。今しも其手を抱緊められて、嬉しさうに嫣然つきながら『姨ちゃん、象居るかい、大きいノお馬、お鼻ぶうらく、私、見たいなアと』隻語でいふ。

『おや、花ちゃんは象を見たことがおざりすかね、何處で？』濱扇は不審に思つた。『私、見たの、橋、長い橋あつたの、私、婆やと行つたの』と花子は臆る氣なる氣臆を辿るかのやう。

『爾う、訝しいねね』と濱扇は首を傾げた。

『ハ、、、他愛がないなア』と伊三郎は笑つて『お客の俺をそつちのけに、夢中になつたらア、好い面の皮だ、おい、花坊、羨ましいの、此の叔父さんもお前のやうに優遇たら嘸嬉しからう株を譲つて呉れないか、アツハツハ。』『あら、濟みいせん、勘忍なんし』と濱扇は始めて客の居るのに、氣が注いだかのやう、艶かな笑顏を見せて『先刻、何とやらお言ひなしたねア、爾うく』と稍と憶ひ出して、此の兒は樓のちやアおつせん、主人が他から拾つてお出なした迷子さます。』

『は、迷子！』と伊三郎は眼を睜つて飲みかけた猪口を下に措いた。『何處から拾つて來たのだ迷子なら直と知れさうなもんだが。』いね、それには種々事情のあることでございます、察し

て見ると可哀想でなりいせん』と濱扇は花子を膝から下して、端然と坐り直した。  
 山王祭で刃傷騒ぎがあつて、その時に連にはぐられた迷子であつたのを、主人の彌兵衛が救ひ取つて来たことから、實子がないのを幸ひ、手許に養育しようとしたのであるが、假そめにも人の子、拾ひ放しにしては冥利が悪いと反省して、其筋へも届け出で、親許が知れたなら直と貰ひ受ける豫定であるが、今だに判然せぬ所を見ると、大方その親が故意と捨てたものであらう。這麼無瑕な玉を、何處が憎くつて蹴出したのか、其の人鬼の氣が知れぬと、濱扇は涙含んで語るのであつた。

『ハテナ』と伊三郎は眉を擡せた。『その嘶で、ふつと思ひ當つたが、倘しや此の子は横濱ぢやアありやしないかな』

『横濱?』と濱扇もちよいと考へて『いね、爾ではおざりいすまい、妾の推了では、ヒョトしたら兩國の近所ぢやアおせんか知ら』『何故?』でも今の嘶に象の見世物を見たと言ひなしたものの、それに長い橋があつて、婆やと一所に行つたと言ふところがね、甚麼やら兩國の近くに住んでゐる者らしく思はれいす』

伊三郎は頷いて『成程それも爾らしいが、實ア花魁、私の方に慙ういふ話があるのだ、俺の

家は濱の相生町だが恰ど五六軒先に辰之助といふ八百屋がある、その辰がよ、矢張花といふ名の女の子を連れて、山王祭にやつて来たんだが、其時に喧嘩か何かあつて、混離紛れにその子とはぐれて、それつ切何處へ什麼迷つて去つたか、行方が皆無知れぬといふので、辰は落膽して戻つて来たといふ話を……爾さなア、二月許前にちらりと聞いたんだ』

『いゝッ、矢張アノ山王祭に、名前も花ぢやん? 嘘ぢやアおつせんかね』と濱扇は驚きながらも容易に信じなかつた。

屋外は一際烈しい風の、蓬々然として天地に怒號する響は、二階を震撼して物凄しく覺れた非常を警むる樓々の拍子木は、遠近に氣立ましく聞ゆる。

花子は尋常ならぬ外の氣色に、幼心の怖ろしく感じてか、幹と濱扇の膝に取着いてゐる。

( 四十六 )

此日の朝から氣象が變であつた、忙しく北に飛ぶ雲の灰色したる覆衣から幽かに洩れて來る日の影が、宛ら虹のやうに赤く見られ、蒸暑い南風に微雨を交へて、恠しく天地を彩つてゐた

のが、己の下刻から次第に勢づいて、鞆々と萬竅を鳴らす響物凄しく、瓦を飛ばし家根を剝り扉を倒し木を抜くなど狼藉いたらぬ所なく、夜に入つては一層の猛烈を極め、市中に少からぬ損害を被らしめた、中にも深川の御船藏附屬の建物を仆して、馬と人とを即死せしめ、大川碇泊の船幾十艘を押流して、永代橋に衝突破損せしめたなどは、その著るしきもの、他に出水やら潰家やら怪我人なども夥だしく出来た。

伊三郎はその晩中萬字に泊つて、翌朝はお直しの、嵐が風いだから寛々横濱へ歸ることに定めて、濱扇の部屋を港に錨を下した。

花子は談話をしてゐる中に、睡氣ざしたと見え、濱扇の膝を枕にすやくと寝込んで了つた。

「あら、甚ましいせう」と新造の若菜がそれを見て「花魁、内所へ連れて参りいせう、最うお引の拍子ごます、主もお引けなんしな」と花子を取らうとするのを、濱扇が止めて「這座によく寝んねをしてゐるものを、起すのも可哀想でおすから、寧ろ此處に泊めて遣らうではありんせんか」と放したくもない様子だ。

「それだつても花魁、主が居さつしやるに」と若菜は伊三郎の顔を見上げて笑ひながら「お邪

魔になると濟みせんから、それでは妾が抱いて寝ることにいたしやう」と云ふのを伊三が「いや、お察しは有難いが、什麼せ春中合せの仇同志だ、お乳婆の役をさせられるぐらゐは覺悟の前さ」「いね、主は最うお歸りなんし、妾は此の小さな情夫としつぱり嫁むんごますから」と濱扇は罪のないことを言つてゐる。

花子は斯くして蘭麝の匂ほのめく錦の衾に移された。是までとても濱扇の部屋に抱寝をされることは「敢て珍らしくはなかつた。鴛鴦は内所への氣兼ねから、度々叱言を聞かせたのであるが、その効がないので、遂には見て見ぬ振をするやうになつた。彌兵衛夫婦も最初の間は迎へに人を寄越したが、連れて戻ると花子が啼き出す程なので、止むなく放任して置いた。

濱扇は伊三郎から意外のことを聞いたので、十に九つまでは其の辰之助とやらの娘であらうそれなら其様に早く親許へ知らして遣つて悦ばせ、此の子にも阿母さんの笑顔を見せたいもの興るか興れないか、其上の話し合、此方の眞情さへ徹つたならば、よもや否やは言ふまい、と思つた。

で委細を主人夫婦に告げて、明日にも先方へ人か手紙かを出すやうにさせたい、夫と聞いたならば、定めし夫婦も喫驚することであらう、と伊三郎を引かせてから、自分は内所へ行くべ

障子を開けて廊下先へ出た。

天維地軸を捲くやうな暴風狼雨、恐るべき魔の唸を闇に曳いて、一氣三千里、蓬として奔り行く、その力に揺られて堅牢一拭に建てた三層樓も、みりみりめきくと怪しき響を起し、戸障子などはがた／＼と物狂はして鳴つてゐる。その合間々々に表を廻る金棒の鈴蟲チャラ、ン／＼と哀れな音を立てるのが、一汐に悽慘の色を添へる。

頓て檜の階段を下りて、是から一廻り、内所部屋へ行かうとする板の間に差蒐つた。

ゴッゴウ！一際烈しい颯、バリバリドン！凄じき大響音の突然として頭上に起ると俱に、ガラ／＼ガラツ！巨炮の弾の破裂したるが如く、微塵になつて颯れ飛ぶ大厦の骨、呀！濱扇の影は何處！。

(四十七)

此の晩は樓中寝つく者は無かつた。部屋へ退けても只瞿々、海の鳴るやうな風の音に耳を躍らして、不安の中に夜を更かすのであつた。

見世の若い者などは未だ起きてゐた。不寝番の男も引切なく拍子木を打つては、上下を見廻つて非常を警める、斯く注意しながらも、恐るべき凶變の頭上に落か／＼りあるとは、誰あつて悟る者が無かつた。

濱扇が出て去つた後で、伊三郎は花子を側に寝かしたなりに、自分も枕を着けたものゝ、矢張此の風が氣になつて、什麼しても眼が汗を勝。

横濱は無事か知ら？家では定めし我を案じてゐるであらう、風は強くとも幸ひ雨交りであるから、先づ火事の心配だけはあままいが、東京でさへ船の流矢や橋の破損がある、矧して濱は一層甚からう、あゝ、裏の土藏の家根は彼の儘に抛つて置いたが、恁と知つたなら昨日にも修復をするのであつたもの、剝られなければ可いが、むゝ、臺所にも雨漏があつた筈だ、お炊が嘸ぶうぶう言ふことだらう——這麼事を考へながら、不快らしく反側打つた。

いかにも凄じい吹き様である、近くで庭の立木の折れる音や、遠くで招牌などが吹飛ばされ、塀に當つて壊れるやうな響が、手に取る如く聽ける、今寝てゐる部屋は二階であるが、宛ら怒濤に揉まるゝ船のやうに、咄軋と揺ぐのが知れる、嘗て四國へ渡つた時、難船した事など想ひ出して、覺わす手足を龜縮た。

花子はと見ると、此の風雨も夢の外に葬つてすやくくと、小さな甕を洩らしながら、無心に  
睡つてゐる其の寝顔の神々しさ。

「ア、幼兒は罪がないなア」と獨言をいつて「甚麽も爾らしいや、屹とそれに違ひがない、  
いづれ濱へ戻つたら早速辰の方へ知らせ遣らう、爾して場合に依つたら、双方の仲に立つて  
一骨折つて遣らざアなるまい、這麽樓に貫はれることになれば、本人も幸福といふものだし、  
又た濱扇もごんなに悦ぶか知れやしない、こりやア好い巧徳をした」と思ふ下から、手を伸し  
て、朱羅宇の煙管を把上やうとした。

恰かも其の途端である、地雷火の爆裂するやうな大音響、激しい震動に弾き飛ばされて、伊  
三郎の体は毬の如く夜具の上から顛がつた、はつと駭いたが、踏めきながら起直つて、突と寢  
てゐた花子へ手を懸けた刹那、ぱりくごしん！柱も榎も梁も一時に劈ける音がして、傾く  
床もろとも、闇に立つ壁砂の煙の中へ投墜された。

何物か強く我が脊を壓しつけてゐる。それを勿返さうといきんで見たが些とも動かぬ。力  
を前方に注いで宛ら蛇の殻を脱ぐやうに押出すと、稍このことで抜出られた。

此の時の感覺は明かでない。いはゆる夢中になつたのであらう、其の物音やら光景やは、

纒かに彷彿として後の記憶に残つてゐる程であつた。

氣が注いで見ると、渾身の此處彼處がヒリヒリと疼む、花子は右の手に犂と抱いてゐた、花  
子も喫驚して眼を覺したか、犂と胸に撲み着いてゐる。

何の間にか自分は裏庭に來てゐるのだ、天地晦冥、風も雨も依然として吼わ狂ふ、その中を  
透して見ると、現に今までも暖かく我が夢を護つてゐた鎗金窩は、纒かに一部の建物を刺すば  
かりで、無慘や亂離骨灰に碎かれてゐる、何處でか女の叫聲——助けて呉れいと肺を絞るやう  
な悲鳴が、おどろくと吹き荒ぶ嵐に雜つて、物凄く聞えて來る。

人事ではない、我すら辛ふじて命を拾つた程である、況して此の子——我と一緒に助かつた  
のも何ぞの因縁であらう、是を什麼にか始末をした上でなければ、と伊三郎は思つた、庭續き  
の外曲輪、濠一つ踰れば築地の河岸である。兎もあれ其處へ避難した上で、出口を探して  
耳門を啓けると、芻橋は何の間に吹き攫はれたか影だにない。

咄嗟の機轉に耳門の扉を外して、濠に浮かせた、爾して自分は裸になつて水へ飛込むと、深  
さは乳の邊までしか無い。占めたと悦んで花子を扉の上へ乗せ、それを押しながら五六尺も進  
んだ。

と、塀に立かけた材木が、風の方で塀もろとも波多離と濠へ倒れた。その材木が伊三郎の肩から首頸かけてドンと打つ、『あッ痛ッ！』叫ぶ下から氣が遠くなつて、抑へた扉を放すと、花子に乗せた儘風に煽られて、筏の如く下流に趨る。

( 四十八 )

さしもの大風雨も曉までにびたりと歇んだ。一天明浄、拭いて取つたやうな瑠璃空に、金柑色の麗かな旭が機嫌好く顔を出した、宛然虐の大病人が一晩でけろりと癒つたかのやう。

中萬字屋は多くの被害者中に於るヘッドマンであつた。先づ建物は根こそぎに押潰され、抱妓八人とも其下に壓かれて無惨の横死、夫婦は辛くも身を以て免れたが、傭人の中に重軽傷が五六人も出来た。

意外の凶變、廓内の騒ぎは一通りでない、同業者は勿論、各樓出入の鳶人足や若い者、町用係などが集つて来て、頽れた木材石瓦の取除、死骸の發掘、負傷者の救護、上を下への混雜は小さな戦場を観るが如くである。

彌兵衛夫婦は一時廓内の仲屋宗四郎方へ避難して、此處に生存者を收容する事にしたが、二人とも早や血眼の半狂人である。萬事は俺に任せて沈着いてゐると仲屋の主人が止めるのを振切つて、朝から飯も喰はず壊れ跡に飛出して、茫然とその慘狀を眺めてゐるのであつた。

午後の八つ頃、肩から右の手へかけて、繃帯をした男が、杖に絶りながら大儀さうに歩いて中萬字屋の見世跡に來た、亭主は頻りに探し廻つた末に、漸く庭先に積重ねた疊の蔭で、彌兵衛夫婦を發見して、急いでひよろこく駈寄つた。

『やア、亭主、無事で居なすつたかッ』と慌だしい聲を懸けると印半纏に股引といふ甲斐々々しい打扮をしても、何から手を出して可いか解らず、只瞿々と四邊を看回してゐた彌兵衛は、その紅く充血した眼を此方へ向けて『阿誰でございましたッ』と力のない聲音だ。

側で炊出しの御膳籠を始末してゐた女房のお高が、それと見て喫驚した顔。

『あら、横濱の旦那、一体、まア、甚麼したといふんです』と叫ぶやうに言つて、何のくらの心配したか解りやアしませんよ、倘しや尊客もね、潰されてお了ひなさりやアしないか、麼那事でもあつた日には、お宅へ對して甚麼申譯を爲ませうと思ひましてね、今朝ツから皆さんへ爾う言つて、我々と掘起して探して見て貰ひましたけれども、そんな大根はお生憎さまだ、畑

が違ひやしないかと言ふんでせう、否確かに埋けてある筈だ、幾個強い風だつて、挽臼のやうにお尻の重い人だから、吹飛される譯はないッてね、今も爾う申して居ました所なの、だが能く助かつてくだすつた、まアく是で一つ荷が下りました」と胸を撫でると、彌兵衛は「むん爾うく、濱扇の旦那でしたな」と始めて憶ひ出したやう。

「甚廢も變だせ、お前們の様子が……大根だの、お尻が重いのだ、何を言つてゐるんだ、それに三年以來の馴染の顔を忘れる亭主もないものだ、健在しなくちやア不可ねせ。」  
「オホ、眞箇にねね、最う何ですか二人とも今朝つから氣が憎としちまつてるんですよ、良人なんぞア現在の女房を忘れつちまつて、先刻もね、何處かでお見掛け申したやうなお顔だが、ごちらの内儀さんでしたかなんて、妾に言ふぢやアありませんか、可厭になつちまひますよ。」  
「いや、それも無理はない、實にハヤ氣の毒とも何とも言ひ様がない、私の事は寛々話すとするが、何か大分怪我人や、死人やらが出来たといふぢやないか、何は甚廢したね、濱扇は」と伊三郎が訊くと、お高は急にわつと泣出した、彌兵衛も腕又をして頻りに瞬きする。

「げ、怪我でもしたか?」「いゝね、怪我なら宜しうございますが、そ、そ、その濱扇がね。」  
「ど、ど、甚廢した。」  
「し、し、死骸になつて、ろ、廊下先から出ましたんでございます。」

「わッ、し、し、死んだかッ!」

伊三郎は愕然として睜る眼に、怨しさに空を仰視げた。「モシ、旦那それに就て伺ひますがアノ花坊は何になつたか、尊客は御存知ありますまいか。今度は彌兵衛が問を投げる。

「む、は、は、花坊か」と伊三郎は俄かに手足の慄顔を見せて「花坊は、た、た、助け出すことは助け出したがな。」  
「わッ、尊君がお助け下さいましたか、有難いく、シテど、ど、何處に居ます。」  
「裏の濠で、な、な、流して了つた。」  
「わッ、流したッ?」

(四十九)

裏の濠で花子を流して了つたといふ伊三郎の話は、彌兵衛夫婦に新たなる爾も強い驚愕を興へたが、餘りに唐突であるので、未だ半知半解の、勞れ切つた顔に怪訝の色を泛べて、共に伊三郎を瞻りつゝ、その説明を待つものゝ如くに見わた。

「イヤ、實に思ひ出しても慄然とするが」と伊三郎は恐ろしかりし前夜の記憶を辿つて「丁度彼の時、花魁は花坊の事に就て、お前さん們は相談をして來ると云つて、部屋を出て去つた後



で私は花坊を抱きながら寝てゐると、突然にバリ／＼ドンと來たらう、喫驚したの何のつて』  
 と一通りの事實を碎いて、濠に飛込んだ事まで嘶してから、水際から一間詰も離れたかと思ふ  
 途端に、後方でミリ／＼といふ音がしたから、ひよいと回顧るソノ肩ッ先をドシリとやられた  
 のだ、其時は何が仆れて來たんだか解らなかつたが、後で見ると其物は塚に立かけた松の  
 四分板、二間物をゴテ／＼と縛つてあつたのが、風で塚ごと打仆れて來たんであつた、まア急  
 所を道れたから助かつたやうなもの、右へ最う一寸も寄つた日にやア天窓を破られる所であ  
 つた、が首筋の動脈を強く打られたもんだから、急に目が眩んで氣が遠くつて、霎時は夢中で  
 むたが、顔へビシヨ／＼雨が當るので、漸々正氣づいて見ると、何時甚麼したのか、水へ半身  
 浸つたなりに、半身は倒れたソノ塚の上へ乗ッ蒐つて、天窓を材木に凭せかけてゐるぢやない  
 か、ア、危なかつた、水中へ引繰返りでも爲ようもんなら其儘御陀佛だつたと、自分ながら  
 運の好いのに驚いたよ。』

二度までも繰回された危難を逸して不思議に命を繋ぎ得た此人は、塵もいかなる日の下で生  
 れたのかと、二人は手に汗を握りながらも其の好運を祝するのであつた。それにしても花子は  
 と後の話が待悶かしく『旦那、そして、そ、その扉は、ご、ご、甚麼なりましたね』と彌兵衛

は氣遣はしさうに促立てた。

『さア、それがなア』と伊三郎は苦しげな息を吐いて『氣打をする拍子に、ブイと手を放した  
 やうに覺れてゐたが、倦氣が注いで四邊を見ると、眞暗だから碌には知れないが、水明りで濠  
 だけは依稀と見える、ところが其扉も花坊の姿も、カラ眼には映らねわのだ、さア大變だと思  
 つたから、身は最う海鼠のやうになつて、水に浸つた腰の下なんぞア、からツきし性が無かつ  
 たけれども、一生懸命に濠を泳いで、向ふ川岸に匍ひ上つた、それから河岸ッ端を去つたり來  
 たり、花坊々と金切聲を揚げて、隅から隅まで探して見たが……』と言を杜切らして首がっ  
 くり。

『居ましたか』『怪我が無かつたでせうねね』と夫婦は疊みかける。伊三郎は當惑の眉を顰せ  
 て『居たと言ひたいところだが、居ないのだ、お二人、實に濟まないことをした、打つなり蹴  
 るなり此の伊三郎は思ふ存分にして腹癒をなすつて下さい、俺ア残念で堪ない、折角助け出し  
 た子を……あ、彼の材木が怨らしいや』と身顛ひしてぱち／＼と瞬く。

お高は早や泣いてゐる。衰弱し切つた神經が新たな刺撃を受けて、一時に亢奮した彌兵衛は  
 急に拳を擱んで絶望の聲を放つた。『花坊も死なしたかッ、ねッ、甚麼でもなりやアがれ、面倒



知つてゐるなら嘸して見てお呉れ」と言ふと、漁夫は天窓を掻きながら「俺も八丈島の方言は覺て無のだが、大島なら何度も言つたことがあるので、大抵の事なら知つてゐるだ、實父のことをテ、阿母がハア、兄がアセイ、弟がゼイ、女ツ子がアンコ、そげねにといふ事がソガアンダレ、爾だといふ事がカワシタラ、來いがワセで、行けがデロよ、有難うさまがナムテントウ御無沙汰をしたがイシナンボーイ、惚れたといふことが……」。「最う澤山々々、講釋は後廻しにして早く用を足してお呉れ」。

此の漁夫も頗る怪しい通譯官ではあつたが、手眞似半分の談話に依つて、甚麽か恁か要領だけは得られた。

島女の語る所を聞くと、島の大賀郷大里の原といふ所に、昔からの陣屋がある、伊豆菲山の代官江川太郎左衛門の支配で、手代が一人出張して他の小役人と共に島の政治を執行つた。是を地役人と唱へてゐたが、明治の代になつてから人も代つた、詳しくは其の陣屋に行つて尋ねるが好い、流人の所在も解るであらうといふこと。

で、兎にあれ、役所に突懸けた上の思案と、お駒は一行は引いて大賀郷に向つて。半里ばかり

りの距離で直と解る。その陣屋は竪七間半、横四間半、内地風に土地の風を折衷した建築で、外に御染屋、圍藏などが四棟もある。總構が長さ五十四間、横五十間といふ宏きな建物、四方に石垣が匝してあつて、手潤く取つた庭先には、熊竹蘭といふ島の植物が一丈餘りの高さに舒び、紅白入亂れた花を今を盛りと匂はせてゐる、屋後には蒲葵やら山桂やら檳榔樹やらが、一つらに碧の傘を張つて、滴る雫の奥から耳珍らしい黄鳥の音が洩れて來る。

お駒は一同を門側に待たせて置いて先づ自分だけ玄關に進んだ。「お頼み申します」と呼んだが返辭がない。更に「お願ひ申します」と續ける。猶且答がない奥ではバチリ／＼と碁を打つやうな響が聞ける。

根が疝性の女、傲氣味になつて式臺に上りながら、踵でドツと／＼板の間を踏んで、猶も大聲に叫ぶ。「オーイ」と聲がして、稍この事に一人の男が出て來た。

是が地役人か、或ひはその部下か、銀杏天窓の色の黒い、鼻の低いのに眼ばかり苛つらしい品のない面貌の、四十形好、黒の薄い殺袖に控鈕のついた戎服、それに白袴を着けて脇差を一本佩いてゐる。

見馴れぬ本土の打扮をした女、何時那處から來たかと恠しむものゝ如く、峻しい眼に一際稜

を立て、「何ぢや、汝は？」と冠せるやうに訊く。  
 「ハイ、妾は」とお駒は小腰を屈めて、伊勢から態々渡つて参りました駒といふ者でございませうが、御監視になつてゐる流人の中に、東京者の片桐義郷といふのが居る筈でございませう、それに遇はせて戴きます譯には参りますまいか、お願ひに出まして御座います」と恭しく出た。  
 「何、片桐？」と意外らしき面色、それなり口を緘んでお駒の姿を射るやうに囁めた。「如何でございませう、居りますか知ら」。

(五十一)

居るも居ないも答へぬ先に、炯々した眼で睨みつけて「すると何か、その片桐義郷に遇ひたいといふので伊勢から態々出て来たのか」と島役人が訊く、その調子がいかに横柄に、小忌らしくお駒の耳に響いた。

「左様でございます、只今申し上げた通りで」「一体汝は何だ」「何だかと被仰いまする」。

「いわさ、片桐に什麼いふ關り合ひのある者ぢやと尋ねるのだ」「關り合と申して、本人には別に御座いません、只その女房の梅といふものが私の朋輩でございまして、何や箇や一切私が世話をして居りました人ですが、是非亭主に遇ひたいと言ふもんですから、ぢやア私が連れつて上げようといふやうな譯で、一緒に此の島へ渡つて参つたわけの事で、外に難かしい仔細も事情も有りやアしません、モシ、お願ひで、お慈悲に遇はして遣つてお呉んなさいまし」。  
 お駒は淡泊に言ふ、役人はさも呆れはてたといふ風で「では亭主に遇ひたいといふ女があるので、汝が無造作にそれを同道して来たんぢやな、イヤハヤ酔狂な奴もあるもんだ、伊勢から此の島までは何百里といふ路程なのに、常盤津のおさらひか銭湯にでも参るやうな心得で居る馬鹿な女だ」と苦笑して「その梅とやらいふ女は何處に居る、是へ呼べ」と勿体ぶつて肩を揺る。

「ちよいと、梅ぢやん、此處へお出よ」お駒は門側に待たせて置いたお梅は手招きすると、借は首尾好く願が協つたかと、嬉しさうにちよくと駈出して来た「姐さん、有難う、お蔭さまで」「いわ、未だ禮を云ふには早いよ、モシ御役人さま、是が片桐の妻女でございませう」。  
 紹介せられる下から、お梅は玄關の式臺に手を突いて「察察こんなお願をいたしますのも、

種々内輪の、悲しい辛い譯合があつての事で御座います、女子の身で遙々と海を越えて、漸くの思で此島まで参りました心の中を、萬望お汲み取りくださいまして、お情に片桐へ」と云ふ裡にも、既往の苦勞やら哀愁やらが、胸一杯に突上げて来て我知らず墜る涙、それを見られまいと顔を俯けて「一寸なりとも遇はして下されば、最う何よりの御恩で御座います」と續けたが、聲は亂れて他には聴取れなかつた。

島役人は腕を張つて如鬼と突立つたなりに、下眼にお梅を睨してゐたが、その瘋んだ唇の邊に、恠しげな笑がにたくと浮んだ。それも忽ちの中に消れて「オホンといふ咳ばらひと共に臆を前に突出した。

「こりやく、其方門の勝手な事ばかり申し居つては困る、片桐といふ男は此の島に来て居るか如何かは、流人名寄帳を調べて見んでは解らんが、假令居るにもせよちや、よいか、此の島の掟として、尋ね参つた親類縁者に一々面會を許す譯には参らん」

お駒はちろりと其の顔を見た、涙を宿したお梅の眼も、多少の懸念を帯びて輝いてゐる。

「一体此島は代官支配中も、流人の取扱方に就ては寛大の方では無かつたが、御維新後葦山縣の管轄となつてから、格別に嚴重に相成つたぢや、凡て國元より本人へ贈り越すべき届物や

書狀の類と雖も、開き封にいたして葦山縣へ願ひ出で、官の許可を得なければならん、許可の見留が据つた物でも、此の島へ着いた上は、我々が一々切手に引合せて檢めた後、差問ない物だけ本人に渡す、書狀の如きは残らず役所の張面に寫すくらゐなものぢや、届物でさへ斯くの通りであるのに、矧して面會と、飛んでもない事ぢや、如何しても遇はんければならぬ要談があるならば、仔細を認めて縣へ願つて、官許を受けるのが當然、イヤ願つて出ても許しは爲ない、然るにお手前們はその手續をもいたさず、勝手に此島へ参つて、遇はして鼻ねといふのは、阿房か狂人、いづれ本氣の沙汰ではない、以ての外の願ぢや、退れッ」

一喝の下に追ひ拂はうとした。お駒は怖へに耐へてゐる癩癩が一時に烈破したかのやう、青い眉痕がきりりと揺くと、いきなり袖を捲り上げて、「お黙りよッ、此の芋役人奴ッ！」と叫び立てた。

(五十二)

何ぢや？芋役人！此奴怪しからんことをッ。白袴先生、赫となる。

「爾だらうぢやないか」お駒はそれを尻目にかけて「島の統治を爲るのが役目なら、最う少し物が解つてゐさうなものだに、午睡の夢が未だ醒めないで見れて、随分頓馬な音を吹くぢやなか、葦山だか辣蕪山だか知らないが、そんな所へ持込んで官許を受けて来るくらゐなら、おまはん風情の小役人にビョコ〜天窓を下げやアしないよ、それこそ大威張で遇つて行かアね、さ、這那面倒な思ひをしたく無ければこそ、這塵薄汚ね玄關先へ額を摺着けて、情願お慈悲にと哀れつばい聲を出してのぢやアないか、掟とか法度とか、小難かしい杓子定規で、ビタ〜人の頭を殴るばかりが役人の能ぢやアあるまい、義太夫の阿古屋と云つたつて、お前們には解るまいが、ソレ、琴の音色を聞分けたといふ島山さんのやうにね、些とは人情といふものを汲んで、サラリとさばけてお呉れな、その人情も慈悲も知らない役人なら、案山子にも劣つた島の番人さ、と言はれるのが可厭なら、願を聞いて遣つても、ね、モン」と急に語調を優しく「まんざら巧徳にならないこともありますまいが、野暮だわねね、おまはんは」と凄い目で笑つて見せた。

「こ、こ、此奴、ぶ、ぶ」無理なことを申すツ、不肖ながら官命を受けて八丈島を預る地役人の小名木新六ぢや、其方如きものに芋役人ぢやの案山子ぢやのと嘲弄されては、其儘に、差措

かれん、不埒な奴め、ふん縛つて海中に投り込むぞツ。烈火のやうに哮り立てた。さア、それが、恐いとならば速かに立歸れツ、罷り成らんわ！退れツ！何だこね、海へ投り込む？オホ、猫の死骸と間違へたのかい、可厭だよ、此人は……ぢやア、甚麼あつても遇はせて呉れる譯にはいかないんだね。お駒は估となる。

「勿論！」と叫ぶ下から「こりや〜下男們、此の狂人を叩き出せツ、早う參れツ、と足を踏鳴らす。

聲高に争ふ聲を恠しんでか、先刻から玄關側の庭仕切に來て、扉の蔭から、ちよろ〜と首を出して、此方を窺いてゐる五六人の小厮があつた。此の下知が懸ると忽ちに躍り出して、ぱらりと包圍攻撃、二人の胸倉を掴んで、ぐいぐいと小突きながら押出さうとする。

と見た乾兒の壯俊五人、「ソレ親分を手籠に爲やアがるぞ、引ばたけ！」轟然として飛んで來た。「やいッ、此の芋蟲野郎奴、巫山戯た行爲をしやアかるなツ」拳を振つて横合から突貫。

滾然たる一場の白兵戦、引組んで捻合ふ者、蹴られて踰めく者、髪を掻き誘る者、鼻に吃ひつく者、仆れつ起きつ顛びつ踏けつ、打たる、肉の響は罵る聲に和して、風に立つ黄なる埃に呑み去られた。

島の芋酒に勇氣を腐らしてゐる小廝們は、喧嘩馴れた博徒の敵としては、餘りに弱くある。見てゐる中に散々に打惱まされ、手足や顔に擦過傷をこしらへて、命からかく庭内へ逃込むやうになつた。勝に誇る博徒們は玄關先に躍り上つて、奥の間までも闖入すべき勢ひ、それに怖れて、新六先生は何の間にもやうな姿を消して御座る。

と、慌てゝ中から駈出して来た一人の男がある。「コレ、待たつしやい待たつしやい、爾う荒立てゝは困る、靜肅にしても事が解るぢやで、先づ先づ愚老にお任せなさい、決して悪いやうには計ひません、まづ、何事も勘辯々々。

逸り立つ壯佼們を抑へて、玄關から庭へ降りて来たのを見ると、色の蒼白い眼の細い、腮の殺げた五十年配、天窓を慈姑の取手に結つて、白麻の古い單衣に、黒紗の道服を着た様子が、什麼やら此島の醫者らしく思はれた。

(五十三)

「私はな山本博庵といふ醫者ぢや」とお駒の前に進んで来て「といふと立派な先生らしいく聞

ゐるが、その實は自分ながら怪しい竹の子で、ソレ、よく落語にいふぢやないか、閻魔の姿を畫いて大黃、狎が火に煖つてゐる所を畫いて陳皮と判じさせるといふやつ、アハ、そんな藪でもな、鳥ない里の蝙蝠で、まア甚麼か慥か、人救けをしてゐるから可笑しい、此方さん們も婦人の事なら寸白や血の道があるぢやらう、那麼場合には遠慮なく御座らつしやい、只で診て進せる、只なら藥が利かんで、損はあるまい、ハツハツハ」と自ら嘲る如き口輕な調子、細い眼の皮を揺がして、無邪氣らしく笑つた。

面白い奴が出て来たぞ、お駒は黙つて笑に受けてゐる。と、博庵はお梅の姿を偷むやうに流眡して『唐突の騒ぎぢやで、よくは解らんが、實のところ此の役所は愚老の出入先でな、毎日のやうにやつて參つては、御用のお手傳から天狗俳諧碁の御相手……アハ、島だけに閑なものぢや、そこで今彼室で聞いた所に、依ると、何かソノ流人の中に尋ねる人があつて、態々渡られたといふやうな筋合、の、左様でござらう、シテ其の遇ひたいといふ人は何誰かな』と頼母しさうな言である。

『尊老のやうに優しく言つてお呉んなさりやア、何もね、餘計な憎まれ口を叩くにも及ばないのを、餘り邪険な出様をするから、私だつて小面憎くなるぢやないか』とお駒は刺る氣焰を吐

くと、『むゝ爾だともく』と、博庵は譯もなく同情して『愚老も舊はといへば矢張流人ぢや、ナニ、少しの間違でな、此島に流されてから足掛五年になるが、未だ徳川家の御治世中には、そんな無慈悲な役人は只の一疋も無かつたよ、皆な情のあるお武家、私のやうな者でも其の御取立に預つて、陣屋へ出入が叶ふやうになつたくらゐぢや、イヤ今の明治の役人てね奴は甚だも不可ん、喩へて言はうなら、犬神に憑着れた盲人、目先が見ねない癖に無暗と人に咬つく、アハ、是ばかりは薬の盛りやうが無い』と痛快なことを言つて、大衆を笑はせた。

聽てお駒から片桐の話を聞いて『何、何ぢや、片桐義郷!』と眼を睜つたが忽ちがつくりと首を垂れて、腕又しながら考へてゐる。

何處に居りますか、御存知でせう、情願尊老のお計ひで、遇はせて下さる譯には参りますまいか』とお梅は氣遣はしげに其の顔を瞻ると『ア、』と呻くやうに太息を吐いて『では何にも知らずにお越しになられたか、ヤレ〜氣の毒な』と様子が有りさう。

『何、甚だかしましたんですか』と聞かぬ先から疑懼の思に打たれて、お梅は猶も熱心に見詰めるのを、博庵は其の視線から脱れるやうに首を振つて『イヤ、甚だもせん、では兎にあれ、愚老がな、その片桐どの、御座る所へ案内して、お遇はせすると爲ませう、百聞は一見に如か

ず、遇へば何も筒も解ることぢや、む、それが可い』と頷いて『私の爲ることぢやもの、役人衆も別に叱りはせまい、さア後から跟着いて御座れ』と尻を端折つた。

案じるより産むが安く、手もなく良人に遇はれる道がしたので、お梅は急に勇み立つた。今にも懐かしい良人の側に、と思ふと怪しく胸が躍る、それを抑へて欣々と軽い歩を連ぶ後方から、お駒も乾分們も元氣好くさゝめき立て、隨つて行く。

百日紅や合歡木の花の咲いてゐる林を抜けて、形ばかりの逕を海邊の方へ進むと、小松の生れた赭土の邱へ出た、直ぐ下に浪打つ音が聞える。

邱を下りると、廠に似た形をした沙羅の木が、二丈ばかりも轟々と伸びて緑の葉を潮風に振つてゐる凹地へ出た、日影の薄れた濕地で、何處となくヂメ〜としてゐる。其處に立列んでゐる卵塔、内地とは違つて墓は二尺程の轉石を四角に積上げ、その上に自然石を建て、卒塔婆を飾つてゐる。新佛のは人の這入れるくらの龜子形をした木造の小屋を据ね、其の中に遺族が坐つて喪に服するといふ支那風の奇習を、目前に看ることができた。

と博庵は、一つの新らしさうな墓の前に立停つて、不審してゐるお梅を回顧りながら『御内儀、さアお引合せするぞ、是が片桐義郷のどのぢやと石を指さした。』



「わッ！」お梅は一目で喫驚。覺えずふらくと眩暈がして、卒倒しさうになつたのを、後から来たお駒が慌て、抱き止めた。

(五十四)

餘りの驚愕にお梅は一時感覺を失ふまでになつた。眼を据わて、息を吞んで、唇を戦かして憎とその墓を凝視めてゐる、顔の色が眞蒼、甚麼やら腦貧血を起したらしく想はれた。

それをお駒が介抱して近くの塋の上に腰を懸けさせ、沈着くやうに脊を摩つてやりながら、「モシ、博庵さん」と側へ呼んで「此の墓が片桐さんだと被仰るからには、最う此の世に居ない人死んだものなら今さら悔んだところで仕様がありませんが、一体何時亡くなつたんですね病氣が、それとも何ぞ外の……打れたとか蹴られたとか云ふやうな事から、こんな惨めな姿になつたんですか、切めてそれだけなりとも詳しく聞かして下さいな」と訊ねながら、悶へるお梅を抑へて「何だね、氣の弱い、確乎おしよ」と叱るやうに勵ますのであつた。

博庵はさも氣の毒さうに、首を俯垂れて、ふむ、ふむと鼻で呻いてゐたが「イヤ實にお察し申すぢや、良人に遇ひたい一心から遙々と海を踰わて、こんな地の涯までお越しになられた御内儀、尋ねる人が冷たい石に化つて御座る所を見られたなら、そのお嘆きや落膽はごんなでござらう、博庵、重々御推察いたすぢや」と潤み聲になつて、袂に眼を拭きつゝ、先づ他事ならぬ同情の程を見せた。

「エー、左様さの、片桐ごのが御逝去になつたのは先月十九日、今日で恰ご二週忌になるかな何、外に仔細もない、矢張ソノ病氣でな、元來此の島にはバクといふ悪い風土病があるぢや、何のことはない、脚氣の重いやつで、足が大蛇の腹のやうに脹れる、爾して大熱が發して、渾身の機關が狂つて、大抵四五日でコロリと死了る、片桐ごのも最初はそれぢや、愚者は醫者のことぢやで、流人の病氣で凡て療治をいたして遣すが、外の者とは違つて身分のあるお武家のこと、何とか致して本服させたいと存じてな、イヤ骨を折つたの折らないの、晝夜枕頭に附切り、手を換へ品を替へて一生懸命に薬も盛つて見たが、何しろ身の衰弱はあり、殊に長々の心勞ぢや、バクばかりではない、心臓も悪ければ肺も悪く、加之に胃弱と疝氣が手傳つたで、全然病氣の長家も同様、是ではいかな普婆扁鵲といへども七の取り様がない、どうとう十日許で惜い人を奪られて了うたわい、命は天なり、ア、く、壽命といふものばかりは、名醫の方も及

ばん、ま、ま、前世の約束事ぢや、諦めさつしやい、諦めさつしやい。

悲惨なる最期！語る人が上手であるだけに、その病中の苦悶がいかに烈しかりしかを、眼に観る如く明白に想像させるのであつた。猶且腥い土の香の哀れな新墓を前に囑めて、傷ましい生前の消息を聞かされたお梅の懐！心ない岩燕は夕陽の光を片羽に流して、ちよ／＼と娛し氣に啼きながら頭上を行戻する。

『阿郎やッ！』喪神のやうになつてゐたお梅は、突然帛を裂くやうな聲を立てた驚いて支へるお駒を突のけていきなり、其墓の上へ躡りかゝつた、爾して葬と墓標の石に取絶つて『な、な何故に、こ、こ、こんな姿になつて呉れました、な、情ないッ、何故死にました、モシ、何故生きてゐて下さらないんですよ、わ、妾の、こ、こ、此の心がお解りなら、モシ、よく來たと一言被仰つて下さい、良人やッ！』

彼は發狂したかど怪しまれた沈痛なる聲の斷續、肺を絞つて流れる血、啣ち立てゝは潜々と泣いてゐる。

お駒はそれを見るに堪へぬらしく、沙羅の木の蔭に避けて、ひそかに鼻紙を顔に充てゝ、貰ひ泣をしてゐる。一行皆黙然、後方で頻りに涕を啜る音が聞えた。

\* \* \* \* \*

日は暮ればてた、霧に包まれた海のぼつと灰色に燻んだ空の涯に、夢のやうな弦月が泛んでゐる。

墓地から一町餘り、海へ突出した岬の、赭土まじりの岩山に小松がちよろちよろと生ねてゐる。その岩の上へ突俯して袂を面に泣沈む人がある。

足音がした、岩蔭から駆寄つたのはお駒であつた。『おや／＼梅ちゃん、未だ這麼所に居るのかね、まア甚麼したといふのさ。』

(五十五)

お梅は返辭をせぬ。眞白な頸足に翫れたおくれ毛が、磯の香を送る汐風にそよぎ立つて、戀に慥れた後姿を、疎氣な月に淡光の影畫のやうに見せてゐる。

『梅ちゃん、未だ泣いてゐるのかね、お止しよ、毒だからさ』とお駒はその肩に手を懸けて搖

ぶつたが、身動きだにせぬのである、足下近くに轟と鳴る浪、松の葉越に吹立てる夜の海氣はひいやりと袂を簸る。

『いくら泣いたつて追着きやアしないぢやないか、最う好い加減にしてお諦めよ、ね、梅ちゃん』とその横顔を窺き込んで『彼時からね、博庵さんの世話で、近所の漁夫へ懸合つて、兎に角お泊りの宿だけは拵へて貰つたが、狭い家だから悉皆這入る譯にはいかないッてんだらう、仕方がないから其の隣の家へも押込んで遣ることに、稍と話がついたんさ、まア汚ないけれど我慢をして四五日島見物でも爲ようぢやないか、さア飯の準備もさせて置いたから、一緒にお出でよ、何時まで這麼所にあるのさ、方々探して歩いたぢやないか、眞箇に世話を焼かせる兒だね』と賤すやうに、又た叱るやうに言ふ。

始めて其聲が耳に這入つたらしく、お梅は大儀さうに起直つて、ねつとりと四邊を眺めた。『有難うよ、姐さん』と襦袢の袖に刺る涙を拭いて『妾は如何して這麼に意氣地が無くなつたんでせう』と力の脱けた聲音。

『オホ、お氣が注がれたかね、實お前さんは弱いね、意氣地なしだね、健在おしよ、旅の空ぢやないか』お駒は氣を引立てようとしてか、それに鞭打つたが『だけれども可哀想ね、私で

さへ張合が抜けつちまつたもの、實の本人なら無理もない、察して上げるよ、梅ちゃん』、急い聲が塞つた。

『いね、仕方がありませんわ』お梅は故意とらしく元氣を街つて『恠うなるのも因縁業でせうから、私ア最う仕方がないと諦めて了ひました』。『ね、誰めた？眞箇に？まア』お駒はそれを疑うものゝ如く、感心したかの如く、眼を睜つてお梅を瞻つた。

『姐さん、笑つちやア可厭ですよ、私ア泣きたいだけ泣いて了つたんですから、最う此上泣きアしませんよ』と強て笑顔をつくらつて『眞に弱くなりましたね、柳橋に居る頃は這麼ぢやア無かつたんですよ、人からやんちや者だの白無垢でツかだのと云はれる程、勝手放題に暴れぬいて、偶には白刃の下も平氣で潜つて來たばら、がき流の名人でしたけれど、此頃ぢやア自分で愛想が盡きる程すつかり、が弛んで了つて、張も意氣地も種切れになつたのは、一体如何したつてんでせうね、オホ、飛んだ泣虫を飼ひ込んだ姐さんこそ、好い面の皮ですわ、勘忍してくださいな、ね、姐さん』。

半年も経たぬ間に、如何なればこそ斯くまでに、意思の力の衰へはたかとも自ら怪しみ且つ嘆く。その言を聞かされては、お駒は一層の同情を注がずには居られなかつた。

『いわ、そりやアね、おまはんの悪いのぢアない、皆な世間のさせる業だ、誰でも散々苦勞をしぬいた揚句には、そんな風になるんさ、増しておまはんは女子だもの、浮世の波風に揉るれば自然と稜も取れる譯だアね』と慰めて、『だが弱くなり仕舞に老い込んぢやア困るね、最う一奮み娑婆ッ氣をお出しよ、ね、梅ちやん、片桐さんが此世に居ないものと定つたら、最う望もなし、這麼島に愚圖々々しても居られまいから、いづれ日和を見て逆戻りといふことになるんだが、本土に歸つてからおまはん、如何する氣だね、私も乗かけた船なりや、及ばずながらおまはんの一生を引受けて、世話をし上げてあげなければならぬが、何を爲ようともおまはんの胸次第、私から差圖がましい事は言はないからね、それも今ツから考へてお置き、ね、可かね』と嬉しい言である。

と、お梅は俯けた顔を擡げて『姐さん、思召は眞箇に』と力を入れ『有難うございますが、此上のお願はアノ、此儘妾を泣蟲にさして下さいましな』と言ふ。

『ね、泣蟲とは？』お駒は不審を打つた。『わ、妾ア、な、泣蟲になつて、一生涯、こ、此の島に残つてゐたいんです』顫ひ聲の痛々しい語調。『まア』お駒は呆れた。近い岩陰に人影がある、小松の間に半身を匿して、抽然と首を伸して、耳を歌て、息も吐

かずに二人の話を聴いてゐる。それが例の山本博庵であつた。

### (五十六)

その翌日である、地役人の小名木新六は寛やかな平服に着換へて、役所の庭園を逍遙てゐると、仕切戸を啓けてちよこくと這入つて來た男がある。

『モシ、御支配さま、何處にお在でございますな、モシ、御支配さま』と呼びながら、四邊を回看すと、熊竹蘭と椰子の木の蔭から手を拍らして『此處ぢや、此方へ參れ』と新六は招く。

『おや、こんな所にお在ぢやもの、知れない譯だ』と側へ駈寄つて『へ、今日は大分蒸暑い陽氣で、お庭先の御納涼、結構でげすな』と腰を低く、妙にひよこくと叩頭をし乍ら『昨日は如何も手痛く敗北仕つて、イヤ残念ぢやの何のと、怨は骨髓、お蔭さまで昨夜などは枕に絶つて口惜泣、さア今日は甚麼あつても會稽の耻を雪いで御覽に入れる、後刻是非一戦を願ひた

いもので、へイ』。

是が博庵であつた。小名木の事を御支配さまと敬ひ奉る。醫者とはいふでふ其の實は幫間式の体度、斯くして彼は島役人のお髯の塵を拂つてゐるのであらう。

「博庵、今日は大分遅いぢやないか、最う來さうなものぢやと、先刻から待受けて居つたのに何處へ暮れた、此の不忠者奴ッ」と故意と睨みつける眞似をして「まア、碁などは如何でも宜しい、汝に種々内談がある」と後方を回つて「む、彼所に參らう」と小名木は先に立つた。役所とはいへど有名無實、島の太平さは是ぞといふて取扱ふべき事務もない程、只毎月三回各郷の村名主が羽織袴で此處に寄合ひ、形式的に公務を支辨するぐらゐが關の山、其の日は午睡か碁、女ならずは酒、夢の如くに暮すのが常である。

爲朝百合が人の長ほごに伸びて、牡丹よりも大きな花を涼風に匂はしてゐる。その畦を自然の花壇にして、前に据ゑた一脚の卓子らしいのは、羅漢松を荒削りにして組立てた島人の細工物、それを真中に島萩を編んで拵へ上げた椅子が、三四脚列んでゐる二人は對座になつて腰を掛けた。

「博庵、何ぞ欲しうはないか、む、此前の便船で下田から取寄せた酒がある一献饗應はうかの」やア、それは尙妙頂來々々、此の土地の芋酒てわやつは最うく飲み飽きてゐますから、偶

には爾いふ名酒を戴かして下さいませれば、博庵の壽命七年だけは請合つて生延びますで、イヤ、戴かぬ先から喉がグビグビ鳴るやうでございます。『意地の汚ない奴ぢや、待て、今飲まして遣る』。

手を拍つて召使の女を呼んで、その酒を搬ばせた。召使は表面だけ、内々は妾の島の美人。旦那のお仕着らしい中形の單衣に、淺黄縮緬の扱帯をだらりと垂れた様子は、宛ら塲末の女郎をその儘。

時に博庵、如何ぢやつたな、昨日の狂人は？何とか巧く括め込んだか。小名木は卓子の上に頬杖を突いた。『いねお尋ねまでもないことで、其處は博庵老の腕でげす、いかな難病たりともヒ一つ廻したが最期、藥の効驗神の如しでな、やア、これは結構々々、重ねて最う一杯、ア、珍なるかな、此の味、流石は伊豆の名酒でげすな、博庵は手酌でぐいぐい。』

『コレく、飲むことにはかり夢中になつては困るぢやないか、早く模様を話せ、さてく人怒しな、憎い奴ぢや。』アハ、是くらいに思はせ振をして置かんと、拙の骨折甲斐が見ねませんでな、ドレ、そろく皮を切りませうかの。』

## (五十七)

樽庵は微酔の浮れ調子になつて「イヤ御支配さま、尊官は彼女們的事を狂人ぢやと被仰るが拙の診察いたしたところでは、尊官の方が飾程上手の狂人でござるがな」と嘲るやうに言つて、椰子の實の殻を割つた杯を下に措いた、「何に狂人ぢや？怪しからんことを」「小名木は眼に稜立てる。ソノ狂人も尋常の狂人では無うて、蘭醫の方では是をデレスケーと申しますぢやて、先づ腹の底から浮氣の虫がきり／＼と混上て參ると、俄かに大熱が發して、恚う眼尻がデレリと下つて、何のことはない、南風に融けた唐人館、ぐにや／＼と筋の弛むのが此の病氣の性質でな、拜するどころ、尊官も昨日からそれに憑着かれなされた様子ぢや、お氣を注げなさらないと不可ん、什麼もお顔色の様子がな、餘程の御熱氣と相見えますて」「何のことぢや、詰らないッ、ハツハツハハ」

新六をさん／＼弄物にしてから「イヤ有様はな、御支配さま、昨日尊官が彼女們とお嘸し最中、襖から隙見をいたして居りますと、アノ梅とやらいふ婦人が餘程お氣に召した様子ぢやで

『早い奴だの』『其處は愚老の眼力、脈を取らなくてもチャアンと病の鑑別がつくから奇体ぢやて、むゝ是ならば拙の比加減で如何にかなりさうな貨物ぢや、一つ處方を考へてコロリと參らせて、御支配さまの御恐悦面を拜見したいものぢや、イヤ御褒美に預らなければならんと存じましてな、彼の騒ぎへ飛込んで故意と下手の、ハイ／＼左様でございと松井源水の假聲で煽て込むと、脆いもんで、おまはんは真箇に親切なお方ね、と來たから可笑しいぢやげねせんか』『うむ／＼、流石は老功なものぢや、それから如何いたした』

是非片桐に遇はして呉れと申すぢやで、オット諾々、さア遇はして進せる、此方へお出と連れて參つた所は』『む、何處ぢや？』『濱邊の墓場で』『ね、墓？ハテナ』新六は不審の眼を睜つた。

『それから突然に新佛らしい墓の前に引張つて行つて、さア是が片桐どのぢやと指さし、たらイヤ喫驚したの何の、誰の墓やら解らん石に突然撲み着いて、おい／＼泣く始末に飛んだ愁嘆場を見せられて、お臍が飛出す程可笑しかつたが、さア此處が辛棒どころと我慢をして、眼を摩り／＼貰ひ泣の狂言は、何と近頃の大出来ではげせんかな』『や、それは妙々驚き入つたる頓智ぢや、ハツハツハ』

新六は手を拍つて喝采の聲を揚げた、博庵は得意満面、首を前に突出して『それから兎にあら、宿を充がつて遣らなければ、此方の計畫をするのに都合が悪いから、拙の戀意な漁師で、何でも云ふことを聞くといふ薄野呂の太右衛門といふ奴に、拙から内意を申し合せて差向き其家に逗留させることに至りましたが、さて一旦は巧々欺いで遣つても、直と立たれるやうな事に相成つては、目算が外れるぢやで、何とか長く足留をしたいものぢやと工夫中、イヤ天の粹麗妙なるかな、そのお梅と申す女、此の島に残つて一生涯暮の側で暮したい、と個様に話をし、てゐるのを、拙がな、物陰に忍んで聞取つたで、や、こいつはお誂へ、爾うなりや愈々此方の物だと悦んで、早速御注進に……エへ、此の好男子奴、酒ぐらゐるでは廉いぞ』と夢中になつて聞いてゐる新六の肩をポンと打つ。

『イヤ、大儀々々、博庵老大明神ぢや』と新六は毛蟲のやうな眉を揺がして、にや／＼と笑つた。『ぢやが、本人はそれで可いとしても、一方の片桐が……』と云ひかけるのを、無造作に遮つて『何の左様な事はお茶の粉さい／＼、萬事は拙に任してお置きなされ、ソラ、の』と聲を低めて囁くと『む、む、成程々々、可からう』と新六は荐りに頷いてゐる。

神の住む國——清い娛しい樂園だとお梅が想像してゐた此の島も、やはり同じ濁つた空氣に

包まれてゐる一塊の穢土に過ぎなかつた悪魔は到る所に鋭い毒爪を磨いでゐる。傷める花の運命は猶もその爪に搔破らるべく、自ら躍つて迷路の巢に投じ去つたのである。

(五十八)

明治三年九月八日——花子の可憐な姿が消え去つた忌むべき魔の日である。或ひは永遠に往いてかへらぬ命の日、涙の日、追恨の日、斷腸の日であるかも知れる。

併しながら一つの不思議は、濠から死骸の揚らぬことである。他も我も想像し且つ斷定する如く、果して水に溺れたものとすれば、濠のいづれかに其小さな遺骸が沈んでゐなければならぬ。然るに綿密なる搜索も何の獲るところなくして了つたのを見ると此推察は外れたのだ。

倘しや濱扇の客伊三郎が、意故にこんなことを捏造へて中萬字屋夫婦を欺き、其の實何處へか花子を連出したのではあるまいかとも、疑ふ者もあつた、併し彼が甚麼人物でないことは、中萬字屋夫婦が説明し得られる所なので、一も二もなく打消されて了つた。

すると愈々解らなくなる。花子は自分で河岸に匍ひ上る程の年齢でもない、能力も無い。そ

れたらば誰か、通り蒐つて、救ひ揚げたものでもあらうか。否、那麽筈はない、眼と鼻の間に伊三郎が怪我をして、木材に乗つた儘苦んでゐるのが、いかに風雨の那裡とはいへ、陸つた雲にも月がある、其の微光で眼を注ぎさうなもの、夫を打捨て、花子だけを救ふといふのは、人情の上に於て有り得べき事ではない。矧して其の場所から推了しても、此の廓内外の小兒であることが明かに知れてゐる。とすれば今日にも此の廓へ来て、心當りを探さなければならぬ理此の二つの要點が缺けてゐる所から判断すると、決して花子は人に救はれたものではない、と否認することが能きる。

忽ちにして廓中の大疑問になつた、中には神隠したの天狗に攫はれたのだと眞面目くさつて言嘯す者もあつた、慙くして徒らに、三四日を過ぎた。

其の中横濱から伊三郎と同道して、八百屋の辰之助が出京した、彼は伊三郎とは同町内で、見知合の間柄であるのだが、伊三郎から花子の事を聞いて驚きもした、心配もした、兎にあれ中萬字屋に遇つた上での分別と、伊三郎を促して俱に出て来たのだ。

斯うなつて見ると、その濠で溺死した疑のある花子が。自分が三月越捜しぬいてゐる花子と同名異人であつて呉れれば好い、前の花子なら未だ生きてゐるといふ望があるだけ、幾個か勝

した、なご、勝手な慾が出て、寧ろ人違ひであるべく禱つてゐた。

所が不幸にも同一の花子らしく、否、らしいのではない、正く夫に違ひないことが、中萬字屋の談で解つた、迷子にしたのも拾ひ兒にしたのも同じ日の山王祭、爾も其の相貌から他の舉動までも瓜二つ。疑ふべき餘地がない。

落膽して太息を吐く辰之助よりも、花子の経歴を聞いた中萬字屋夫婦の感慨が一沙であつた。話して花子の舊衣から、現はれて出た筐の寫眞、それを辰之助が持つてゐたのが、却つて哀れを惹く涙の種になつて、四人ながらひとしく袖を濡した。

辰之助は曩に一度、番町の鮫島外務少辨を訊ねたが、花子の行衛を捜し當てぬ中は、合せる顔がないと云つて其儘にしてあつたので、中萬字屋と伊三郎と同道して。鮫島の屋敷へ出掛けて行き、主人に會つて一切の事實を晰した、鮫島も幾んど小説のやうな孤兒の運命に驚き、委細を薩州の森有禮方へ知らして遣ららうといふことであつた。

斯くして花子には、兎に角死んだものとの正札が附いた。その兎に角といふだけが、未だ幾分か望の脈がある。けれども彌兵衛も辰之助も男だけに諦めが早い、諦められぬのは女同志のお高とお銀である、東京と横濱と隔れながら花子に残る未練は一つ、双方申し合せた様に、占



易者に尋ねるやら御神籤を引くやらして、頻りに花子の生死を氣遣つたが、何物に當つて見ても、最早此の世には居ないとの判断であつた。

(五十九)

「いやはや恐ろしい風雨になつたもんだ、今朝の様子では、真逆こんなぢやアあるまいと思つてゐたんだが、空の事はやはり天文學者でなくては解らねね、此方們なんぞは頭の上はトンとお構ひなし、天保錢の一枚も拾ひたいといふ慾張根性から、首を突出して地上の方ばかり睨んで歩くもんだから鴉に糞を引かけられたり、今のやうな酷い目に遇はされるんだ、眞箇に氣が利かない、何だつて又た風に攫はれるやうなことをして置きやアがるんだらう、幸ひ脊上に打かつたから可いやうなもの、撲所が悪かつた日にやア、それこそ釣臺もんだせ、ア、痛い、未だヒリヒリすらア。

こんな事を思ひながら、木挽町の采女が原から築地へ渡つて、左へ濠畔を合引橋に向つて、とぼ／＼歩きの疲れた足を曳く男がある。

竹の子の饅頭笠を吹き飛ばされまいと、左の手で扇を押へた、右の手に顛はぬ用心の天秤、肩に鰻笹の空になつたのを引かけてゐたが、風に簸らるゝ簞の下から、繼短だけかけの古股引が見えるけれど、顔は笠に陰れて隠らなかつた。

其頃に於ける此の附近の地理を説くと、今の歌舞伎座邊は肥州侯細川越中守の中屋敷跡で、その筋合ひが馬場、采女の原といふ潤い空地であつた。今の精養軒の在る部分は、越前敦賀の酒井右京亮の屋敷であつたのが、明治になつて北海道開拓使長官東久世通禧の邸宅と變つた。

又た築地一圓は本願寺を除くの外凡て武家屋敷で、今の區役所邊は土州侯松平土佐守の中屋敷濠畔に三箇所も辻番があつて、嚴めしづくめであるが、川一つ隔て、新島原の不夜城、日夜絃歌の聲を湧かす、それが妙なコントラストであつた。

「だが何だ、鯉節屋の看板が落ちて背中中に當るなんぞア延喜がいせ、たまさか錢は這入つても、先方で見放してゐるのか、抜裏の露路のやうにお立寄もなさらず、迅々と素通りをするので、年中懐中は風を引いてゐるやうな始末、それで例も婆アにギヤア／＼怒鳴られてゐるんだが、近い中に何ぞ吉い事があるか知ら……ハツクシヨツ、おや／＼婆アが又た何か言つてるせア、／＼可厭だ、文句を聞くのが實可厭になつて了つた、働きがないの、意氣地が無いのと言

はれたつて、富籤を中てるのが商賣ぢやアあるまいし、爾うく金が儲かるもんぢやアない、人は容姿よりも心、どんなに貧乏してたつて、正直誠懇にしてやへ居りやア、世間は威張つて渡れるもんだ、上を見れば切がない、人の事なんぞ羨まずに、何でも下を見て……オット、下を見るのは禁物々々、又た上から落こつて來られた日にやア災難だ、おや、濠の水が大分高くなつたやうだぜ、此分ぢやア深川邊は水が出るだらう、さて、厄介なお天氣さまだ。雨こそ稍や小降になつたれ、風は依然として哮りすさぶ、その勢ひの猛烈なる、油断をすれば吹倒されるばかり空は纔かに雲薄らいで、禿げかゝる黒の笹緑に、鈍さうな半月の光を漂はしてゐる。時は九月八日の夜半。

合引橋の角を曲る時に、新島原の近い方向にあたつて、何やら人の叫ぶやうな聲がした。ふつと立停つて耳を敬てたが、轟といふ風の音に紛れてそれが分明と解らぬ。

『ハ、ア、何處でか、風の神を追はらつてゐるんだな、家内中聲を揃へて怒鳴り立ると、頼れかゝつた家も起直るてねことだ、何だ、馬鹿々々しい』。

呟いて又た歩き出した、土州屋敷の塀を風避にして河岸傳ひ、輕子橋——今の築地橋——近くに差慶ると、後方でわつと小兒の泣聲が聞けた。

(六十)

喫驚して回顧る。陸上には何物も認めぬ。『おや、何だらう、薄つ氣味が悪い』。

途端に近くで又たわつと魂切るやうな聲がした。ぶる／＼と身顫ひしていきなり大地に膝を折つたが、怖々伸上つて、聲のする水面へ眼を辿らすと橋杭に突當つて堰止められた扉様の物その上に乗つて泣いてゐる子兒の姿！

『あッ、か、か、河童の幽霊だッ』。

船松町二丁目の、直ぐ眼の前に佃島への渡場を控へて、白帆かすむ入江の秋を眺められる辻角に、平右衛門といふ老爺が住んでゐた。

以前は漁師であつたとか、類る齡に危ない船乗でもあるまいと見切をつけて、變へた商賣はやはり冷水は縁のある腥物屋、海老やら鱈鮓やら、銀ぼうに海鰻、重にそんな材料を舊の仲間から仕入れて來ては川岸に行くのも臆空だといふ場末の天獄羅屋を廻つて利を薄く活る。極めて正直な、氣さくなところから佛平右衛門と渾名を呼ばれて、花客から可愛がられてゐた。

風の較や風ぎそめた夜半過ぎに、平右衛門は這々の体で吾家に戻つて来た、がらりと扉を開けるとお座敷が只た一間、その真中に据ゑてある盥は、天井の雨漏を受けたのであらう、依稀とした破行燈の火影が、煤けた雷、水に怪しく映つてゐる。

「おい、婆さん、今歸つて来たよ、ちよいと起きて呉んな……いやはや、甚麽も酷い目に遇つて来たせ、濡れたの濡れないのツて、骨の鈍底まで凍りつくやうだ、や、畜生ツ、こんな所へ這入つて寝てやがる、シツ、シツ」。沓脱に寝込んでゐる犬を追ひつける途端、いやといふ程尻尾を踏みつけた、犬は喫驚してキャン／＼啼きながら、扉を揺つて逃げて去つた。

「何だね、騒々しい、今頃歸つて来て……何時だと思ふんだよ、最う夜が明るぢやないか」。座敷の隅に立廻した小屏風の蔭から、突慳貧な聲が聞けた、その後、大きな欠伸が続く。

「だつてお前、だつて何だね」平右衛門は辟易しながら「彼の大雨風だもの歸る譯にはいかねぢやないか」と袋をごそ／＼と脱いで「さア／＼、下りな、此處が叔父さんの家だ、最う怖いことはない、今にね、そのお衣も乾かして遣るよ」と脊負つた一人の小兒を上り口へ卸して「おい、婆さん、濟まないがの、ちよいと起きて臺所から水を持つて来て呉んな、足を雪ぐんだから」と手拭で天窓の濕氣を拭いてゐる。

「可厭だ、今方稍と寝ついたばかりぢやないか、足なら其處に雨漏の水があるから、それを其方へ曳張つてサツサと拭いてお了ひよ、私、起きるのが可厭だつてばさ」。轉轆打つ下から今度は咳を仕始めた。

「仕様がないなア、仕方がない、おや、是で洗うと爲よう」と腹匈になつて座敷の盥を引寄せた、「あツ、汚ねねなア、眞黒になつてらア」と沓脱に落して、こちア／＼水音をさせる。

「婆さん、起きるのが可厭なら此處から話すがな、今日は大變な捨ひ物をして来たせ、今見せて遣るから吃驚するな、可いか」。『ね、捨ひ物？、耳寄だね、何だね、お金かね！』。「直彼箇だもの、慾張つてるなア……金ぢやア無いやな」。『ぢやア衣裳？』。「インエ」、腰につく物か「ガア、何だらう、當てゝ見な」。平右衛門は洗足を濟まして疊に上つた。

「いやに蒸すぢやないか、ドレ、お見せ、私起きるよ」堪りかねて床から匍出した来た「アハ、現金な婆さんだ、ソラ見る、這座物だ」と平右衛門は後から抱いてゐた小兒を灯火に向けると「おやツ！小兒ぢやないか、まア」と愕いて「一体甚麽したといふんだね、おごかしちア可厭だよ、爺さん」と片膝を立て、反かへつた。

前額の禿ちよろけになつた、ちんちくりんな顔に貧しさうな血の色の、較や黄ばんだ小兒の

中から、釣上つた眼の底光りする、鼻の低い、鐵漿の班らに剝げた、見るから小忌の婆さんである。それが反齒を露出してたたくと笑つた時は、平右衛門に抱かれた手を搔のけて、小兒はいきなり逃出しさうな氣勢を示した。

## ( 六十一 )

平右衛門は沈ひ晒しの浴衣に着替へて、草臥足を投出しながら「ア、快い心弛だ、稍と人間らしくなつた」婆さん、ゆつくり嘸を爲るから、まア火でも熾して、此の兒の衣裳を燥つて遣つて呉れ、可哀想にベタ／＼濡れてるせ、何、替りに着せる物がない？仕方が無ねからお前の半纏に括んで遣るがい、エ、何だ、質に入れつちまつた？ちやア風呂敷でも一寸と掛けて遣んな、可いよく、それで澤山だ。

婆さんは七輪を持出して、ばた／＼と煽ぎ始めた。その側で平右衛門は小兒を劬はり立てつゝ、啜へ煙管の煙の下から、ねと／＼と語り出すのであつた。

「今日はお前、四谷から青山に廻つてそれから芝へやつて來ると、彼の風雨だらう、動かれる

もんぢやア無ねやな、仕方がないから天福さんの許で雨宿りをしてゐたが、なか／＼歌みやアしねね、その中漸々夜も更けるし、途中の橋でも流された日には事だから、雨が小降になつたのを幸ひに、思ひ切つて出掛けたのさ、するとお前、金六町の通りで、鯉節屋の看板が風に攪はれて來やアがつて、脊上をいやつてね程打つたんだ、痛い痛くないの」と想ひ出したやうに顔を顰める。

婆さんは三身の衣裳を火に黠しながら「へん、好い氣味だつたね、怠ける罰だよ、序に死んぢまへば可いのに」と毒を言ふ。

「彼麼ことを言つてらア、悪たれたな」と平右衛門「呟いてそれからお前、吹飛ばされぬいやうに、天秤棒を突張つて、築地の、ソレ、土州様の横ッ丁だ、彼所の河岸ッ端まで來ると、輕子橋の下でわつと泣き出した者があるんだ、喫驚して腰を抜けかゝつたのを奴ツくそつてんで窺いて見ると、如何だ、婆さん、何度から流れて來たのか、扉が一枚水に浮いてゐる其上に、此の兒が乗つかつて、オイ／＼泣いてるだらうぢやないか、最初は河童の幽霊かと思つたが、能く見ると確かに人間だから、打棄つとく譯にもいかねね、兎に角揚げてやつて聞いて見ようと思つてな、河岸の石に取捉まつて、天秤棒を伸ばして、此の兒にその先を掴ませて、や